解剖する時に、私有財産と自由競爭との二制度が此の理想に背反する弊害の源泉たることが分る、こゝに於て理想主義の必然の歸結は、社會主義だと云ふことになるのである(註十八)。理想主義と社會主義とはカウツキーの疑ふが如く、決して無緣のものではない。又ローザの云ふが如くに理想主義は空想主義ではない、現存社會が進化して次の社會に到達することを認めるが故に、現存社會の構成と次の社會への發展とを檢討する科學を要求する、之が空想主義に缺けたるものであつた。又理想主義は現存社會を不合理とする民衆の存在を認める、之はプロレタリアのみではないが、それを中心とする、かゝる負擔者を見出して社會主義の實現を待望する、之が空想主義に缺けたる他のものであつた。ローザが理想主義と空想主義とを獨斷的に同視して、既に決算されたる空想主義への聯想を利用して、理想主義を低く評價せしめんとするは、正しい態度ではない。ベルンシュタインの理想主義に對しては、彼等の批判は急所を突くかも知れない、然し之は彼が理想主義に於て完全でなかつたからである。

晉にカウツキーとローザとの理想主義への批判が妥當を缺くのみならず、彼等自らが知らざる裡に唯物史觀を逸脫して、却て理想主義を援用しつゝあることを看過してはならない。彼等は社會主義が窮局目的だと云ふ、然しそれが何故窮局目的であるのか。なるほど彼等の發展理論によれば、資本主義は必然に崩壞して社會主義が實現するのかも知れない、だがその崩壞の中にも經濟發展が一因素であると共に、階級闘爭も亦他の因素である。而して階級闘爭の當事者たるプロレタリアの意志如何によつては資本主義が崩壞しないかも知れない。そのプロレタリアが今何を意志するかが問題となる時に、資本主義の崩壞を前提とするは、前後顚倒の誤謬を免れまい。暫らく此の點を許容して資本主義が必然に崩壞するとしても、あることが必然に發生するからとて、何故にそのことが窮局目的として意志せねばならないかが說明されない、恰も地震が必然に發生するからとて、地震の發生を目的とせねばならない理由がないのと同じである。こゝに必然の結果と規範との觀念上の混同が潛在する。而して之はマックス・ウェーバーによつて既に明白にされた誤謬である。若し必然の結果が直に規範だとするならば、その前提としてその必然の進行が既に「あるべきもの」の必然の進行だと認めてゐるとせねばならない、それならば次に起る問題は、人は何故に「あるべきもの」に必然に動かされてゐるのかと云ふことゝなり、その時既に規範が人間に內在することを認めることゝなる。次で問題は、此

の規範が事實から發生するか、それ自身獨立のものかと云ふことであるが、事實からいかにして規範が發生しうるか、一は「ある」ことであつて他は「あるべき」ことであつて、その本質に於て相異るものである。異るものが他のものより發生することを說明することは斷念するの外はない。かくて規範はそれ自身獨立のものであり、事實からも自然からも經驗からも由來するものではない。かゝるものを「先天的」(apriori) なるものと云ひ、かゝる能力を認めるのが理想主義である。マルキシズムが認識は感覺より成立すと云ひ、意識は存在によつて決定されると云ふ時に、マルキシズムと理想主義とは相對立し相反撥するものである。然るに窮局目的は理想主義に依るに非ざれば說明しえないことになつた。窮局目的を固執するならば理想主義を採らざるをえず、マルキシズムを固執するならば窮局目的を拋棄すること修正主義者の如くならねばならぬと云ふ二者擇一の窮境に陷るのである。

カウツキーは社會主義を窮局目的とすることは、プロレタリアの必然の認識だと云ふ、だがベルンシュタインは社會主義を窮局目的としないではないか、而して社會民主黨の大部分はベルンシュタインに追隨して修正主義者となつたではないか。而も勞働者階級のものに於て殊にそれが著しかつたではないか。社會主義が窮局目的だと云ふことは、プロクリアの認識すべきことではあらう。然し必然に認識してゐることではない。カウツキーがプロレタリアを美化して陶醉してゐる時に、ローザは國民大衆こそ却て窮局目的と結合するに苦心を要すると云つたのは、流石に現實を洞察した卓識だと云はねばならない。マルキシストは單に自己を主張するに止まる時は規範に訴へる必要がなかつた、然るに黨內に修正主義が現はれた時に、論敵を說破するには、當然に規範に訴へて敵の改宗を要請せねばならない。更に共產主義が現はれた時に、之に對して自由主義を主張し、革命獨裁を排斥せねばならない、その時必然と云ふことは果して何の効果がある。規範に訴ふること愈々多くして、唯物論の桎梏を受くること愈々多し。社會民主黨が共產主義と對抗する時に、動もすれば受太刀となるは、その責任マルキシズムの哲學に在らねばならない。而して彼等は必要の限りに於ては、唯物論を逸脫して、暗々裡に理想主義を借用しつゝあるのである。政治の經濟に對する影響、經濟發展から離脫した鬪爭意識の强化等を認めた時、亦既に唯物史觀から逸脫したではないか。誠に社會主義者を跑きの付かぬ泥沼に驅るものは、マルキシズムの哲學でなければならない。

（註十七）「社會政策原理」三八〇――三九六、四〇六――四一〇、四一七――四二〇頁參照。
（註十八）「社會政策原理」二二七――二四五頁參照。

獨逸は不幸にして自由主義に忠實なる自由黨を持たなかつた。自由主義の發達せざりし國にマルキシズムは繁榮する。だが又自由主義なかりしことの故に、そのマルキシズムは社會主義のみならず自由主義をも、その身に負はねばならない。之が獨逸社會民主黨の呪はれた運命であつた。だが自由主義と社會主義とは一朝にして融合しえない、それには幾多の迂餘曲折を經過することを必要とする、修正主義とは之を要するに、社會主義の自由主義化に外ならないのである。自由主義は十九世紀末に於て、目的を社會改良主義に置き、實現の方法を自由主義に、その哲學を理想主義に求めた、かゝる自由主義の方向へとマルキシズムを轉向させようとしたのが、ベルンシュタインの意圖であつた。だがたとへ獨逸に於て自由主義はいかに必要であらうとも、社會主義は更に之に劣らず必要であつた。英國に於て自由主義は既に一歩前進して、社會改良主義を社會主義にまで發展せしめ、實現の方法と哲學とを自由主義から承繼して、勞働黨のイデオロギーとなつた。ベルンシュタインにして若し今少し永く英國に滯在して、勞働黨の發展を檢討しえたらんには、彼れの修正主義は別の方向を辿つたかも知れない。

マルキシズムの發展史上修正主義は必要であつた、然し修正主義が社會改良主義に終り、自由主義の把握が不充分であり、理想主義の基礎付けが不完全であつた時、獨逸社會民主黨は矛盾と混亂とに惱まざるをえなかつた。曾てあれほどに力强くビスマルクの鐵槌を反撥しえた黨が、アドルフ・ヒットラーの一擊に脆くも屏息した原因は多々あらう、その中の一に指導原理の混亂が算へられねばならない。人若し獨逸社會民主黨の爲に起つならば、彼はベルンシュタインより自由主義と社會改良とを採り、カウツキーより社會主義の窮局目的を採り、ローザから目的と手段との聯關を採り、更に理想主義を以て唯物辯證法の哲學を完全に清算するだらう。修正主義は今一度來ることを必要とする、而して第二の修正主義は叙上の內容を有するものでなければならない。だが誰か云ふ、理論の整理は學究の閑事であると。ラッサールはいみじくも云つたではないか「若し科學と勞働者階級と云ふ社會の相對立する兩極が結合したならば、その鐵腕にすべての文化障害を壓倒するだらう。近代勞働運動の全勢力は係つて、理論的認識の上に在る」と。

# (三) コミンテルンの崩壞

## (一) 序論

一九一九年三月モスコーに於て成立し爾來モスコーを本部とした「共産主義者の國際團結」(Kommunistische Internationale) 即ちコミンテルンは、世界大戰後暫らくは猛威を振ひ、現存社會秩序を震撼するの概があつた。然るに成立以來殆んど連年開會されたその大會は、一九二八年以後遂に開かれず、今やコミンテルンは孤影飄然として國際線上にその姿を沒しつゝある。之と共に一時各國勞働界に活躍した共産黨も亦、その勢力頓に衰頽し、露西亞に次ぐ世界第二の共産黨と云はれた獨逸共産黨は、ヒットラーの彈壓の一擊の下に聲を潜めるに至り、近くは日本の共産黨首腦部たる佐野、鍋山の諸氏が、自ら共産主義及びコミンテルンを批判し、所謂轉向續出の傾向が現はれた。身を一九一九年乃至一九二三年頃に置いて、今日の世界勞働界を眺めるものは、何人も隔世の感に打たれないものはあるまい。

世界大戰後の十五年は各方面から觀測して、次の四期に區劃することが出來る、即ち第一期は戰爭の休止した一九一八年から一九二〇年に至り、戰後の一時的好景氣の時期である。第二期は一九二一年から二三年に亙り、前期の反動として不景氣の襲來した時であり、第三期は一九二四年から二九年秋に至る好景氣の時で、此の時に於て世界の生産額は既に戰前のそれを凌駕し、歐洲に於てさへあれほどの戰爭の創痍を受けたに拘はらず、略々戰前一九一三年の水準を回復したのである。第四期は一九二九年九月のアメリカの恐慌に始まり、一九三一年夏の獨逸、英國の恐慌により更に拍車を加へられ、爾來今日に至るまで繼續してゐる。

一九二八年七月のコミンテルンの第六回大會は、獨自の立場から、大戰後を三期に區別し、第一期は休戰から一九二三年に及び、之を世界の革命動亂の時となし、第二期をその以後として之を資本主義の相對的安定期と稱するが、やがて第三期に於て資本主義の內在的矛盾は遂に第二の世界大戰を惹起し、かくて革命を招來すると云ふ。此の分類による第一期は、恰も私が前述した第一期と第二期とを包含するもので、確かにコミンテルンの稱するが如く、世界殊に歐洲を擧げての革命的波浪の高揚した時であつた。その第二期は好景氣に見舞はれた安定期と

して、革命運動の終熄したことは止むを得ないとしても、第三期は一九二一年乃至一九二三年の不景氣と比較にならない深刻な恐慌の時であり、若しコミンテルンにして健在ならんには、此の時期に於てこそ第一期にも增して活躍しうべかりしに拘らず、恰も此の時に於てコミンテルンの消息杳として絶えたのは、果して何に基因するのであらうか。

之を好むにせよ好まざるにせよ、今やコミンテルンが崩壞途上を辿りつゝあることは、打消し得ざる事實である。だがコミンテルンの崩壞と云ふ時に、吾々は二つの內容をその中に區別せねばならない。その一は共產主義の沒落であり、その二は共產主義の國際團結の沒落である。各國は共產主義を信條とする共產黨なる政黨を持つと共に、此の政黨はモスコーを本部とし、その本部から絕對的の服從を要請する指令に動く國際的團結を構成してゐる。かゝる團結を結成すること自體が、共產主義なる思想の內容の一部を構成してゐるから、共產主義の沒落は當然に共產主義的國際團結の沒落を伴ふことにはなるが、理論上は各國內に於て共產主義が沒落すると共に、共產主義が多少その內容を修正して、而も國際的團結を保持する事は可能である。然るに吾々の眼前に展開する事實は、各國に於て共產主義が沒落すると共に、その國際的團結なるものが沒落しつゝあるのである。こゝに於て何故にコミンテルンは崩壞したかと云ふ問題は、一は何故に共產主義は各國に於て崩壞したかと云ふ問題と、一は何故に共產主義の國際的團結は崩壞したかといふ問題となる。曾て獨逸共產主義者は筆者に語つて、共產主義者たるはよし、されど共產黨に加入すべからず、共產黨に加入するはよし、されどモスコーの幹部の指令に動くコミンテルンに加入すべからず、三者は三種三樣にして同一ではないと云つたが、此の言は問題を以上の如く二個に區別することを裏書するであらう。

何故にコミンテルンは崩壞したか、之に答へることが本文の目的である。だが直接之に答へる前に、その照應の伏線として簡單ながら露西亞共產主義の消長と、コミンテルンの成立と發達とに觸れることが必要である。更に日本に於ける共產黨首腦部の轉向は、充分に事實を檢討する材料を缺いてはゐるが、既に數年前より始まつた共產主義破綻の、世界的連環の一部を表現するものとして、之を本文の一部に挿入した。然し本文の首要部は、(四)の各國に於ける共產主義の沒落を語る所に在る。

## （二）露西亞に於ける共產主義の消長

露西亞共產主義の發達史を述べることは、今日の學徒にとつて興味ある問題であるが、こゝで私は本文の目的に必要な限りに於てのみ、約四十年間の素描を與へることに止めるであらう。詳細はマルトフ・ダンの「露西亞社會民主黨史」が社會民主主義の立場から、又ジノヴィエフの「露西亞共產主義史」が共產主義の立場から語つてゐるし、最近革命後の變遷に就てはローゼンベルグの「ボルシェビズム史」が述べてゐる(註)。

（註）J. Marlow und Th. Dan : Geschichte der russischen Sozialdemokratie, 1926.
G. Sinowjew : Geschichte der Kommunistischen Partei Russlands, 1923.
A. Rosenberg : Geschichte des Bolschewismus, 1932.

十九世紀末の露西亞を、時を同じくした西歐諸國と比較すると、數多の點に於て特殊性が見出された。第一は資本主義の發達が幼稚であると云ふことである。西歐諸國殊に英國は人口の大部分が都市に集中し、農業に從事するものは極めて少數であり、獨逸に於ても此の傾向は急速に現はれつゝあつた。然るに露西亞に於ては人口中の大部分は農業に從事し、革命後に於てすら、その割合は八七パーセントに及んでゐる。のみならず農村は大地主制度が支配して、中小農は尠く農業勞働者の數は多く、一八六一年の農奴解放以後と雖も、是等の勞働者の運命は實質的には異る所がなかつた。又當時の農村にはミール、アルテル、ツアドルガ等の名稱を以て呼ばれる一種の共產體があつた。之が私有制度を貫徹した西歐の所有關係と異る對立を爲してゐた。要するに農民が國內の壓倒的割合を占め、而も農村の中產階級に乏しかつたこと、その所有制度に異彩ある村落があつたこと、之が當時の露西亞の第一の特色であつた。第二には政治組織に於てロマノフ王朝の絕對專制主義が支配し、民衆の言論は極めて壓迫され、その代表者を送る議會を持たなかつた。當時西歐諸國に於ては、言論の自由が保證され普通選擧が布かれ、議會は政局の中心的位置を占めてゐた。西歐と露西亞との中間に位するのが獨逸であつたが、獨逸にすら憲法があり帝國議會があつた、然るに露西亞に至つては憲法なく議會すらなかつたのである。要するに露西亞の政治機構の上に、自由主義が何等の影響を及ぼすに至らなかつたこと、こゝに第二の特色があつた。

此の二個の特色を背景として、露西亞社會思想の變遷が理解されねばならない。之より先き

千八百六七十年に同國を支配した革命的思想として「人民の意志」主義（Narodnikitum）と稱するものがあつた。之を奉ずるもの丶間に一八七九年に分裂が起り、一は「人民の意志」黨となり他は「黑土新分割」黨となつた。一九〇一年に成立した「社會革命」黨（Sozialrevolutionäre）は、前者を承繼しナロドニキを代表するものであり、後者は一八九八年三月一日ミンスに第一回大會を開いて、露西亞社會民主黨となり、プレハーノフを中心としマルキシズムを信條とするものである。こゝに於て露西亞社會運動界には、後々までも對立する二つの信條と黨派とが出來た。一はナロドニキ主義の上に立つ社會革命黨であり、他はマルキシズムの上に立つ社會民主黨である。兩者抗爭の中心點と云ふべきものは、第一は露西亞と資本主義との關係である。ナロドニキは露西亞は西歐と異る發達過程を辿り、西歐の資本主義の先蹤を追ふことはあるまいと云ふに反し、マルキシストは露西亞も亦經濟發達の法則に從ひ、西歐と同じく資本主義へと發達すべく、唯目下その段階が幼稚なるに止まると云ふ。第二にナロドニキはミール、アルテル等の共產體は露西亞特有のもので、之を中心として將來の社會主義社會が實現される基礎たるべきものだと云ふが、マルキシストは是等の共產體は曾て西歐にも存在した原始共產體の殘滓で、やがては私有制度の下に解體すべき運命を持つと云ふ。第三にナロドニキは露西亞人口の大部分を占める農民に革命の重心點を置き、彼等を啓蒙して革命の負擔者たらしめんとするに反し、マルキシストはやがて資本主義の發達に伴ひ增加すべき工場勞働者に中心を置き、之をして制覇權を握らしめ、農民は單なる同盟者たらしめようとする。此の對立は時の經過と共に、資本主義が露西亞にも急速に侵入し、共產體が解體すると云ふ事實に直面して、理論的にはマルキシズムの勝利に歸したのであつたが、ナロドニキは露西亞の有する特殊性に立脚し、此の事實に即した改革を提供した所に、著しく國民主義的色彩を有し、マルキシストが各國特殊性を輕視して西歐と同一の準則を適用せんとしたのと對立する。吾々は最近の露西亞を眺めて、著しくナロドニキ的色彩を帶びてゐることに氣づくことを、こゝに附記せねばならない。

社會民主黨は外は社會革命黨と對立しつゝ、內部に互に抗爭する二陣營に分裂した、之がプレハーノフを中心とするメンシェビキとレーニンを中心とするボルシェビキであり、その分裂は一九〇三年のロンドンの大會に於て決定的となつた。兩者の對立の要點は、その當時の時事

問題に即して各種の異る表現に見出されるが、今日より之を大觀すれば、社會主義を實現するに議會主義を以てするか革命主義を以てするか、革命後に無產者獨裁政治を布くか否かの點にある。二十世紀初期に於てマルキシズムを標榜した世界最大の政黨たりし獨逸社會民主黨を見ると、吾々はその中に三つの潮流の存在してゐたことを見出すであらう。一はベーベルやカウツキーを中心とする中央派であり、二はベルンシュタインを代表者とする修正派であり、三は前二派の何れにも反對するローザ・ルクセンブルグを圍む少數の一群である。露西亞のマルキシストの中に之に照應するものを求めれば、メンシェビキは中央派に相當し、メンシェビキより脫落した經濟主義者、清算主義者等が修正派に當り、第三派に當るものにトロツキーがあるが、レーニン等のボルシェビキは獨逸マルキシスト內に見當らない一種特異のものであつた。蓋し獨逸のマルキシストはその派の何れを問はず、十九世紀後半に於ける西歐資本主義の發達と自由主義的政治組織の上に立脚し、一八四八年の革命動亂前のマルクス、エンゲルスの思想そのまゝを信奉してはゐなかつた。然し露西亞の二十世紀初期は、資本主義の發達の幼稚なると、專制政治の繼續してゐる點に於て、恰も一八四八年三月革命以前の獨逸に類似してゐる。



レーニンのボルシェビズムはマルクス、エンゲルス初期の思想所謂原始マルキシズム（Urmarxismus）を復活せんとするもので、之がそれに相當するものが獨逸に存在しない理由であり、それだけ露西亞の特殊性に即したものとも云ひ得る。此の現實の露西亞に立脚したと云ふ點に於て、ボルシェビズムはナロドニキ主義と一抹相通ずるものがある。

社會革命黨とメンシェビキとボルシェビキ、是等三者は夫々特色を持しつゝ卍字巴の如くに對峙して、一九一七年革命まで抗爭して來た。メンシェビキは西歐諸國のマルキシズムと同一步調を辿り、理論的水準に於ては高いが、露西亞の實情に副はないことの爲に、他の二者に一籌を輸した。一九一七年三月革命の首腦者は社會革命黨であり、ケレンスキーはその黨員であつた。又十月革命の中心はボルシェビキに在つた。三者には夫々特色があつたが、唯一つ共通の點があつた。それは專制治下の露西亞に於て、先づ自由主義的革命を起すと云ふことであつた。その方法に就てはナロドニキは個々的の爆彈襲擊によつて要路の首腦者を仆さんとし、マルキシストは之を排して大衆的の運動によらうとするの差異があり、自由主義的革命の後に來るものに就ては、後に事實が示した所によれば社會革命黨はそこに停止せんとし、メンシェビ

キとボルシェビキとはその後に次で社會主義的變革を爲さんとするが、メンシェビキは議會主義に依らんとし、ボルシェビキは暴力革命主義に依らんとする。是等の差異はあるにしても、先づ爲さるべきものが專制政治の打倒にあつたことには一致する。此の思想的雰圍氣の中に第一第二の革命は進行した。

第一次革命即ち一九〇五年の革命は、何れの信條、黨派によつたと云ふよりも、日露戰爭によつて生じた敗北、その當時の國內の窮乏、支配階級の威信の失墜が、民衆をして期せずして勃興せしめたのであつた。當初の一月の騷擾が軍隊の發砲により血を見るに及んで、その年を通じて暴動一揆相次ぎ、十二月に遂に終熄したが、政府は見る所あつて一九〇七年議會を開設し、或る意味の自由主義的改革への途に立つた。然しやがて議會は解散され彈壓政策が復活するや、再び往時の專制政治に還元し、自由主義革命への要望を殘して、一九一七年三月の第二次革命へと推移したのである。

第一次革命が突發的であつた如く、第二次革命も亦さうであつた。一九一七年一月二十二日瑞西に亡命中であつたレーニンは、瑞西青年勞働者に語つて、吾々老人は來らんとする革命の決定的鬪爭を體驗せぬだらうと云つた。それより二箇月の後ロマノフ王朝は倒壞して、民主共和國は成立したのである。革命が自由主義的革命であつたことは、第一次革命と異らない。だが革命政府には自由主義を以て停止せんとするものと、更にそれを推進せしめて社會主義革命へ導かんとするものとが對立し、疲弊と窮乏の中からパンと休戰とを渴望するものと、戰爭を繼續して勝利を占めて侵略慾を滿足せしめんとするものとが對立してゐた。此の對立の中に躊躇朦朧としてゐた革命政府は、七月遂に戰爭繼續に決定して墺太利國境に兵を進め、遂に一敗地に塗れた時は、最後の一擊を受けた時であつた。民衆の絕望と怨嗟の中に立つて、十一月七日の第三次革命即ちボルシェビキの革命は成功した。だがその革命は必ずしもボルシェビキの信條に據つて爲されたとは云へない。レーニンとトロツキーとは觀測した、何れにしろ民衆の騷擾は十二時に起るだらう、その五分前にボルシェビキが命令を發すれば、革命はボルシェビキの指導下に爲された如き印象を得るだらうと。果して民衆は勃起した、それに先つて彼等は宣言した、かくてこゝにボルシェビキ革命は成立したことゝなり、彼等は露西亞の將來の運命の負擔者となつたのである。

然し革命がよしボルシェビキによりその信條に基いて爲されたとしても、その革命は決して社會主義革命と云はるべき性質のものではなかつたらう。蓋しレーニンは露西亞に直ちに社會主義革命を行ふ意志がなかつたのである。例へば戰前一九一二年のプラーグのボルシェビキの大會に於て、民主共和國、八時間勞働制、地主の土地沒收の三箇條を主張するに止まり、戰爭勃發後一九一五年十月十三日の「若干のテーゼ」に於ても、單に所謂ブルジョアー革命を要請するに止まり、一九一七年三月の革命後に於てさへ、十箇條のテーゼを發表した中に、唯銀行の國家的管理を云ふに止まり、同年十一月の革命前夜に於けるレーニンの經濟綱領五箇條を見ても、單に銀行の國營、カルテル及びシンヂケートの國有、一般產業の强制組合化、消費組合の强制組織化等あるに過ぎないので、從前からの土地沒收と併せても、まだ私有財產の撤廢と云ふ所には言及してゐないからである。從つて革命遂行者の意志に於て、此の革命は社會主義革命ではなかつた。事實に於ても革命直後十一月八日大地主の土地所有は廢止されたが、それは農民に分與された、一の私有は廢されたが他の私有に置き代へられたに過ぎない。大工業國有の命令すら發布されたのは、翌年七月十一日であつた。

だが革命後の第一期には、一九一九年以來、その遂行者の意志に反して共產主義が實現した、人の所謂戰時共產主義（Kriegskommunismus）と稱するもの之である。都市に於ける工場は勞働者が各自企業家を放逐するか、企業の管理を企てた爲に、企業家自ら工場を放擲したので、資本家階級の私有から離れて、勞働者階級の所有に移つた。政府が私有を命令したのでなくて、勞働者のサンヂカリズム的行動が、此の結果を惹起したのである。政府は之に次で工場の國營を單に法律化することによりて共產主義を實現することが出來た。農村に於ては農民は多年憧れた土地を所有することが出來て、革命政府を謳歌し支持したが、打續く內亂と戰時中の產業の荒廢と飢饉とが、食糧原料品の不足を告げしめるに至つたので、政府は止むなく農民から收穫を强制徵收するの方法を採らざるを得ざるに至り、こゝに於て都市と農村とを通じて共產主義が實現するに至つた。之が第二次革命を目して共產主義革命なるかの如く思はせた理由であるが、事實は非常緊急の事態に應ずる臨時の處置であつたに過ぎない、之は革命前のボルシェビキの宣言に徵しても明かである。

戰時共產主義の時代に於て、反革命の內亂が相次いだ時に、革命を擁護することに最も熱心

なのは共産黨（一九一七年三月革命後ボルシェビキ黨をかく改名した）の黨員であつた。かくて革命と共産黨とは同一視され、勞働者と農民とが資本家階級に對立するのでなく、共産黨と非共産黨とが對立することゝなり、單に資本家階級のみならず一切の非共産黨員が、嚴重な監視の下に置かれ、全國民を代表する民主主義機關は廢止されたのみでなく、ブルジョアー・デモクラシーに代はると云はれた勞働者農民兵卒の評議會も亦有名無實となつて、共産黨員が獨裁政治を布くことゝなり、民衆と獨立した赤軍が構成され特別警察（ゲーペーウー）が新設され、勞働者農民の政府は、勞働者農民をば猜疑と不信とを以てする監視の下に置いた。戰時共産主義はやがて新たな政策に變化しようとも、此の制度だけは維持されて今日に至る。

農民は共産主義を要望したのではない、彼等が革命政府を支持したのは土地私有を欲する資本主義的心理からであつた。然るに今や戰時共産主義により事實に於て私有制度は廢止された。農民は勤勉に勞働するも何の得る所もない。かくて農民の懶惰が始まり、農村の生産力は激減し、都市の食糧と原料とは缺乏した。此の實狀に直面してレーニンは戰時共産主義を改變して、一九二一年七月所謂新經濟政策を採用し、貿易金融重要産業は依然國有を繼續するが、農村に對しては一定額の收穫を政府に納付する外は、自己の利益に於て自由に處分することを許した。農民は之に滿足し生産額は增加した、然し農村は私有制度に還元し、クラーケン（der Kulakon）と稱する新搾取階級は發生し、都市に自由商業は始まり、貨幣制度は復活した。之は決して共産主義ではない。レーニンは自ら正直に告白して、之を國家資本主義であると云ひ、然し國家資本主義は露西亞の現狀に於ては止むを得ざるものであり、やがて共産主義に至る道程であると云つた。かくて革命政府の第二期新經濟政策の時代は始まつたのである。

たへと新經濟政策が止むを得ないものではあるにしても、共産主義でないことは確かである。こゝに於て、共産黨の中に於て之に異論を唱へるものが現はれたことは當然である。レーニンの生前に於てトロツキーは之を直言して憚らなかつたが、唯レーニンの鐵腕が之を牽制することが出來た。然るに一九二四年レーニン死して後事はスターリン、ジノヴィエフ、カメネフの三人に托されたが、スターリン獨り政權をその手に收め、彼は新經濟政策を改めるの意なきのみか、却つてその方向を强める傾向あり、ルイコフ、ブハーリン、トムスキー、ウストルヤロフ等は盛んに農村の資本主義的心理を煽揚するの概があつた。こゝに於て一九二七年五月トロツ

キー、ジノヴィエフ、カメネフ等は檄を飛ばして、スターリンの政策に反對したが、スターリンは一九二七年十二月全露第十五回大會に於て新政策を聲明し、一方に於て農村に共同經營を慫慂して動力機械を使用せしめ、クラーケンの壓迫を行ふと共に、他方に於て西歐の援助を俟たずして露西亞一國のみの社會主義建設を計畫し、それが爲には重工業の發達の幼稚なるを補はんが爲に、一九二八年十月より始まる五箇年計畫を發表した。之が所謂新々經濟政策と稱されるもので、革命政府の第三期に相當し、今日に至るも繼續し、五箇年計畫は一九三二年に四箇年を以て完了し、次で輕工業の完成を目指して、第二次五箇年計畫を始め、目下その進行中に在る。

スターリンは獨自の政策に直進すると共に、トロツキー等の巨頭を黨籍より除名し、トロツキーは土耳古に放逐されたが、カメネフ、ジノヴィエフは復歸した。他方にルイコフ、ブハーリン等の右傾運動者も亦政局より追はれることゝなつた。新經濟政策はたとへ農村に共同經營を增加するに成功したにせよ、個人所有の農民が個人利得の爲にする共同經營を以て、共產主義と目することは出來ない。又重工業の發達は露西亞にとつて必要であり、共產主義確立の爲の前提ではあらうとも、それ自體は依然國家資本主義であつて共產主義ではない。戰時共產主義より離脫した新經濟政策の色彩は、新々經濟政策に於ても、決して淸算されてはゐないのである。

以上の露西亞共產主義史は、極めて粗雜な概觀的な素描であるが、その中から吾々は本文の目的の爲に、幾多の注意すべき點を摘記することが出來るであらう。私は次に之を列擧しよう。

第一に露西亞の三次の革命は、突發的な偶然の事情に支配された部分が多く、革命の可能性は之によつて普遍妥當性を獲ることにならない。固よりたとへ偶然の事情が働かうとも、革命と云ふ一定の方向を採る以上は、そこに何等かの思想的準備がなければならないが、それは極めて漠とした消極的のものたるに止まり、一定の信條の下に働いた革命と云ふよりも、暴動一揆と云ふに近い。是等の暴動を化して革命たらしめた少數の意識した運動者はあつたが、それが少數に止まつて多數は意識してゐないことに於て西歐の自覺した民衆と異ることが見出される。又革命を可能ならしめた事情は、戰敗の屈辱感、支配階級の威信の失墜、戰時に於ける軍隊警察の壓力の低下、戰時の疲弊困憊、休戰への渴望等であつて、是等の事情は飽くまで偶發性のもので、露西亞革命の實現を以て、何れの國にも適用される普遍性あるものと速斷すること

とは出來ない。

第二に第三次革命以後の政府の政策を顧るに、變幻百ならずと云ふ感に打たれざるを得まい。社會事情に即して之に適應した爲に變化のある事は當然であると辯ずるかも知れないが、問題はその政策に變化のあつたことに非ずして、その都度その政策を基礎付けた理論に變化があつた事である。露西亞革命者は比較的長期に妥當する理論を以て、その時々に變化すべき政策を裏づけて、理論的欲望を自他共に滿足せしめ、その次に政策の變更に際して跑きのつかぬ窮地に身を陷れてゐる觀がある。此の理論癖と傾向指摘癖は後述のコミンテルンの大會に於ても特出するのであるが、彼等は戰爭と小戰鬪とを混同し戰術（タクチーク）と戰略（ストラテギー）とを同視するの弊がある。レーニンとビスマルクとは共に鐵腕の實踐者であるが、ビスマルク默々として實踐し、マルクスは實踐せずして理論を語り、レーニンはビスマルクの實踐をマルクスの理論を以て說明し、その都度理論を變更したものと云へるだらう。

第三に曾てナロドニキは露西亞資本主義の幼稚なる發達と農民の壓倒的多數とに顧み、露西亞の實狀に即した國民特殊的な改革を提示した。ナロドニキの全理論の是非は今こゝに論ずるのではない。唯ナロドニキを排擊したマルキシストが自國の資本主義の幼稚さの爲に五箇年計畫を案出し、農民の運命を輕視することが出來ないで、之に適應したことに於て、最近の政策は往年のナロドニキに還元する傾向がないではない。露西亞共產主義者が曾ては一蹴したナロドニキに近づきつゝあるは、共產主義の理論の非現實的なりしことゝ、その變說改論の一例を示すものと云へるだらう。

第四にスターリンは他國の支援なしに一國社會主義の建設を計畫する。之が可能か否かは別の問題として、露西亞に於ける社會主義の成功に關するマルクス、エンゲルスの所說に反するのみならず、それならば萬國の勞働者が團結する必要は消滅することになるだらう。然るに尙第三インターナショナルを保存せしめることは、外國の社會主義建設にとつて無用の任務を爲しつゝあるのか、或は又露西亞の爲に社會主義建設以外の目的に使用する爲か、或は結局インターナショナルを廢止すると云ふ歸結に來るのかと云ふ幾多の疑問を湧起せしめることゝなる。

第五に今日の露西亞の政策は、露西亞自體の妥當な政策だと云ふことは云へるだらう。だが資本主義の發達が幼稚なるが爲に、國家資本主義を行ふに非されば、社會主義社會に入り得な

いと云ふならば、高度の資本主義に到達した國に於てのみ社會主義は可能だと云ふことになり、農村には土地私有を許して資本主義的心理に乘ずるに非ざれば、生産力を增加し得ないと云ふならば、かの社會主義に反對する資本主義者の論據を肯定したことゝなり、露西亞はその實狀に即した政策を採ることにより、社會主義社會建設の困難性を世界に明示したことゝなる。

第六に如何なる意味に於ても、今日の露西亞は共産主義社會ではなく社會主義社會でもない。固より都市に重要産業は國有に化され農村に國有農場はあるにしても、之は純資本主義に對照して社會主義に近似すると云ひ得るだけで、全社會が社會主義社會だと云ふことにはならない。なるほど第三次革命すら社會主義實行の意圖を持たなかつたことは前述した如くであり、戰時共産主義は飽くまで戰時の非常狀態であつたと云ふかも知れない。然し世界は第三次革命を以て共産主義革命と思ひ、露西亞を以て社會主義同盟國と云ふ。之は露西亞の責任を有せざる他人の錯覺かと云ふに、必ずしもさうではない。革命者は革命を共産主義革命と稱し、革命直後の共産主義の實行も、後日戰時と云ふ肩書を附けたので、當時は之をその意圖かの如くに誇稱したのである。その後の政策に變更があつた時、世界が之を變說と目するのは酷ではない。現に露西亞內部にすら批判者が現はれたではないか。一方では變說を辯するが爲に、始めより共産主義ではなかつたと云ひ、他方には今も尙出來得る限り共産主義國たるかの如く思はせようとする、此の兩刀を使ふ所に露西亞の政略がある。

第七に共産主義者は曾て無産者獨裁を唱へ今も尙それを唱へてゐる。然し今日露西亞に獨裁はあるが、その獨裁は無産者の獨裁ではなくて、共産黨の獨裁であり、黨員中の一握りの幹部の獨裁である。露西亞の實情がそれを餘儀なくするか否かは今の問題ではない。唯吾々にとつて重要なことは、曾ても今も稱するが如き無産者の獨裁ではないことである。政府は無産者の壓倒的多數をも不信と猜疑の下に置いてゐるのである。然るに尙獨裁と云ふことゝ無産者獨裁と云ふことゝを混同せしめ、無産者獨裁を標榜してゐるのは何故か。それは無産者獨裁と社會主義とが必然的に聯想され、今日の露西亞も尙社會主義國たるかの如き幻覺を與へしめんが爲である。

第八に若し五箇年計畫により、幼稚なる資本主義が補足し得ると云ふならば、今日の露西亞の爲しつゝあることは、各國が資本主義の力に依つて爲しつゝあることを、革命を經て始めて露西亞は爲しつゝあることゝなる。然らば露西亞政府は目下先進資本主義國に追從しつゝある

のであつて、敢て先進資本主義國よりも數歩前進しつゝあるのではない。然るに拘はらず先進資本主義國の勞働者が、露西亞を以て王道樂土の理想鄕と羨望するは何故か。それは露西亞專制政府が暴壓の模型として永く西歐諸國民の腦裡に强く印刻されてゐたのが、一朝にして此の專制政府を倒壞した英雄的偉業に感嘆するのである。若し果して然らば西歐勞働者が露西亞革命に嘆美するのはその共產主義的性質に在るに非ずして、自由主義的革命なるに在る。而も自ら嘆賞の對象が何たるかを識別することなしに、唯革命の非凡的性質に幻惑され、自らが要望する共產主義革命を之に投影して、その感傷に陶醉してゐるのである。

最後に之を總括すれば、露西亞を中心として自他共に一種の幻想に支配されてゐるのである。露西亞自身も共產主義革命を經過した共產主義國と思ひ、他國も亦露西亞に就て同一の錯覺に支配されてゐる、而も現實の露西亞は凡そ共產主義とは似もつかない。露西亞の支配者は或は正直に之を告白する、而も他方に於て共產主義との何等かの聯想を導き來つて、自他を滿足せしめようとしてゐる。凡そ現實と幻想との矛盾は今日の露西亞を包む一種の妖雲である。曾てエヴアルド・ベルンシュタインは獨逸社會民主黨內に修正運動を起した時に、社會民主黨は今あるがまゝの現實を直視せよ、それは決して革命主義の政黨ではない、革命主義は唯大會と小集會とに於て、演壇の辯士の口より出づる一片の修辭に過ぎないと喝破したが、十九世紀末の獨逸社會民主黨に就て云はれた言は、そのまゝに現在の露西亞に就て妥當する。而も重要な問題は、露西亞が現實と幻想とを識別し得ない不肖さを持つことではなくて、或る場合露西亞は之を知りつゝ故意に、現實を隱蔽して幻想にまで萬國の勞働者を陶醉させようとしてゐる跡があることである。それは何故であるか、之を語るには吾々はコミンテルンを語らねばならない。

## (三)　コミンテルンの成立と消長

各國內に於ける社會主義運動を、國際的に團結しようとする試みは、一八六四年マルクス、エンゲルス等によりて企てられ、所謂第一インターナシヨナルが成立したのであるが、マルクスとバクーニンとの抗爭の爲に、一八七二年遂に崩壞するに至つた。次で一八八九年獨逸社會民主黨が興隆の頂點に立つてゐた時にその復活が企てられ、所謂第二インターナシヨナルが成立した。元來マルキシズムの根本趣旨から云へば、資本主義は各國を一樣に支配し、經濟關係

が一切を制約するのであるから、各國社會事情には普遍性のみがあり、特殊性なるものが認められない筈である。此の趣意から來る一つの歸結は、各國社會運動の採る政策は普遍的であり、インターナショナルの中央部から發する指令が各國を拘束せねばならぬと云ふことである。又マルキシズムによれば、國民は資本家階級と勞働者階級とに分裂し、相互の利害は對立し矛盾する、國民なる共同一致の社會なるものはない、從つて勞働者はその利害から云へば國民の內部にある資本家階級に對するよりも、外國の同一階級に對してより濃厚な共同意識を持つのである、これ勞働者階級に祖國なしと云はれ、又敵は城內にあると云はれる所以である。此の趣意より來る歸結は、國家間の戰爭に對して勞働者階級は參加してはならないと云ふことでなければならない。マルキシズムの趣旨の上に成立し、獨逸社會民主黨を中心とした第二インターナショナルは、かくして各國社會運動の政策を統一し、戰爭反對を貫徹すべきであつたに拘はらず、第二インターナショナルはマルキシズムを信奉しない英國勞働黨の如きものを含むのみならず、マルキシズムを信奉してゐた獨逸社會民主黨に於てすら、此の點が明確ではなかつた。その爲に第二インターナショナルはその成立當時から各國の特殊性を認めて、各國がそれに應じて如何なる特殊の社會運動を企てるかは、全く各國の機關に一任する方針を採つた。又戰爭に就ても强固な反對を以て一貫してはゐなかつた。然し口には反對を標榜せねばならない立場に在つた。一九〇七年スツトガルトの大會に於て、正面からの戰爭反對の議案は否決されたが、レーニンとローザ・ルクセンブルグとの動議によつて、戰爭の發生は出來得る限り防止すること、而もそれが發生した場合には之を內亂にまで轉化せしむべしと云ふことが議決され、一九一二年のバーゼルの大會も同樣であつた。此の二回の決議は決して第二インターナショナルの多數の眞意を表現したものではなかつた。彼等は決して此の決議を實行する決意を抱いてはゐなかつたのである。然るに拘はらず少數派の動議を一蹴することも出來なかつた、何故なれば凡そインターナショナルの根本趣旨がそれを許さなかつたからである。インターナショナルと云ふことと參加者の多數の眞意との矛盾、多數の眞意と標榜された決議との矛盾、こゝに第二インターナショナルの根本的弱點が潛在してゐた、而してその潛在を化して顯在となしたのが歐洲の大戰であつた。

一九一四年八月戰爭の危險が目睫に迫つた時に、各國社會黨は夫々戰爭防止の手段を採つた。

然し戰爭の發生が既に阻止すべからざるに至るや、獨逸社會民主黨を始めとして各國の議會に於ける社會黨所屬議員は何れも軍事豫算の議決に贊成した。多大の期待を獨逸社會民主黨に抱いたレーニンは、その贊成の報道を耳にした時に、始めは官憲の捏造であるとして信じなかつたのであるが、その眞相が知られるに及んで、第二インターナショナルの背信を憤激した。後年彼がカウツキーを漫罵して措かなかつたのは、此の時の幻滅が基因をなしてゐるのであらう。露西亞のボルシェビキは戰爭に反對し、議員はシベリアに追放された。だが第二インターナショナル中に於て獨り主義に忠實であつたのはボルシェビキのみではなかつた。英國勞働黨中の獨立勞働協會に屬するケヤー・ハーディー、マクドーナルド、スノーデン、アレン等も亦非戰論を以て終始したのである。後年露西亞の共產主義者が第二インターナショナルを非難する場合に、ボルシェビキのみを例外として英國の非戰論者を看過するのは、公平を缺くものと云はねばならない。ともかくたとへ少數の例外はあつたとしても、第二インターナショナルの社會黨は世界大戰に參加し、各國勞働者階級は自國の資本家階級と共同戰線を布き、外國の勞働者階級と對立抗爭した。勞働者に祖國なしとの名題は事實の前に敗れた、第二インターナショナルはこゝに崩壞したのである。

大戰開始後間もなく十一月一日レーニンは、第二インターナショナルは崩壞したが故に第三インターナショナルは新に成立せねばならないと宣言したが、一九一五年九月瑞西のチンメルワルドに、十一箇國の社會黨の代表者三十一名が集まり、戰爭に關する會議を開いたが、その際新なるインターナショナルを成立することゝ、戰爭を利用して速に內亂を起すべしと云ふ動議が提出されたが、レーニン、ジノヴィエフ、ラデック、ボルハルト等十二代表者の贊成あるに止まり、十九代表の多數によつて敗北した。次で一九一六年春同じく瑞西のキーンタールに於て各國からの四十代表が集つて、チンメルワルドに於けると同樣の會議を開いたが、代表者間の空氣は前回の場合よりも稍々レーニン等に近づいたが、此の場合にも第二インターナショナルに代はるべき第三インターナショナルは成立するに至らなかつた。だが此の二回の會合は第三インターナショナル即ちコミンテルンの成立の導火線として役立つたことは否定出來ない。かくして一九一七年十一月露西亞革命成るや、今まで西歐社會主義界に於て輕視せられてゐたボルシェビキの名聲頓に昂揚し、大戰の進行に伴ひ各國の疲弊重なるに連れて、勞働者階

級の信望は露西亞に集中し、レーニン等の共産主義者は世界の局面を打破する救世主の如くに憧憬されるに至つた。

然し革命後の露西亞は國内を整理し獨逸との媾和を結ぶに急であつて、手を外國にまで伸すの餘力がなかつた。獨逸に於ける社會民主黨は一九一七年多數派と獨立社會民主黨とに分裂し、後者は戰爭休止に熱心であり、又獨立社會民主黨の一部最左翼に屬するものは、カール・リーブクネヒトやローザ・ルクセンブルグを中心としてスパルタクスブントを作るに至つたが、戰爭の前途は未だ俄に逆賭すべからざるものがあり、コミンテルンの成立には尙時間の經過を必要とした。然るに一九一八年十一月獨逸革命勃發し次で獨逸の敗北が確定するや、果然同盟諸國は混亂の渦中に捲き込まれた。同年十二月スパルタクスブントは獨逸共産黨と稱して、こゝに露西亞共産黨が西歐に活躍すべき足懸りは作られた。たとへ獨逸革命は自由主義の革命を以て結着し、社會主義革命にまで發展しなかつたとは云へ、又一九一九年一月の共産黨の暴動は敗北し首腦者リーブクネヒトとローザ・ルクセンブルグとは殺戮され、同年三月の暴動も亦失敗に歸したとは云へ、一九一八年末から一九二一年に至るまでは、西歐東歐を擧げて革命の波浪の頂點に達した時であつた。恰も露西亞内部では一應戰爭直後の整理を完了し、戰時共産主義の實施に着手しかけた時である。内外の狀勢は遂にコミンテルンの成立を可能ならしめるに至つた。かゝる雰圍氣の中に第一回コミンテルン大會は一九一九年三月四日モスコーに開かれたのである(註)。

(註) 第一回から第六回に至る大會の議事錄は獨逸譯としては Verlag Carl Hoym Nachfolger より Protokoll des Weltkongresses der Kommunistischen Internationale として出版されてゐる。又第六回大會のコミンテルンの綱領は同出版所から別に小冊子 Programm der Kommunistischen Internationale として出版され、コミンテルンの成立と發展とに就ては Christo Kabaktschieff: Die Entstehung und Entwicklung der Komintern, 1929. が簡單ながら概觀を與へてゐる。

第一回から第六回に至るコミンテルン大會の議事を詳細に述べることは本文の目的ではない。こゝにはコミンテルンの崩壞を說くに必要な限りに於てのみ之に觸れるに止めよう。第一回大會は歐洲を擧げての動搖の最中に開かれた、參加國はまだ十九國に止まり、代表は五十を數ふるに過ぎなかつたが、露西亞共産主義者の意氣は潑剌たるものがあつた。此の大會に於てコミンテルンの原則が確立された。世界を擧げての動亂の中に現存資本主義秩序は危機に瀕し

てゐる。支配階級は必死になつて仆れかけた支配權を再建せんと試みるだらう。プロレタリアはブルジョアジーの此の企圖を阻止し、政權を奪取し革命の勝利を確立し、人類解放の歴史時代を開かねばならない。革命の目的は私有生産手段の社會化と社會主義的生産の組織化とにある、コミンテルンは萬國の勞働者をして此の任務を遂行せしむる最後の而して決定的なる鬪爭にまで鼓舞激勵する、武器に對しては武器を以てし力に對しては力を以て報ひねばならない。彼のデモクラシーなるものはブルジョアー階級の爲のデモクラシーであつて、之を一般デモクラシーの名の中に隱蔽するに過ぎない。而してブルジョアーのデモクラシーとは畢竟ブルジョアーの獨裁を意味する、吾々は之に代はるにプロレタリアの獨裁を以てせねばならない。プロレタリアの獨裁は既存の政治機構を以てしては實現されない。勞働者と農民との評議會により、社會主義的評議會共和國によりてのみ實現されるのであると。大會は更に第二インターナショナルの不信を難詰し、戰前及び戰後に於ける第二インターナショナルの中には三潮流があつて、社會愛國主義と中央派と共産主義とがそれであつたが、社會愛國主義者は今や明白に反革命に轉化し、プロレタリアの公然たる敵である、中央派は之とは異るが如き隱蔽を敢てするが、勞働者階級の間に平和主義的幻想を鼓吹し、第二インターナショナルの統一を叫ぶことによつて、勞働者大衆の社會愛國主義者からの分離を妨げる、その故に中央派に對してもあらゆる顧慮なしに鬪爭が實行されねばならないと云ひ、後年コミンテルンを特徴づけた暴露戰術とプロレタリア戰線の攪亂との端緒を開いた。大會は最後に「萬國のプロレタリアに對する宣言」を公にし、コミンテルンの任務と根本信條と此の信條實現の爲の鬪爭方法とを述べたが、その結末に於て云つた、第一インターナショナルが將來の發展を豫見し行路を指示したとするならば、又第二インターナショナルが數百萬の勞働者を集合結成したとするならば、第三インターナショナルは公然たる大衆行動のインターナショナルであり、革命實現のインターナショナルであり、又行動のインターナショナルであると。

第二回大會は一九二〇年七月に開かれ、三十七國の二百十八代表が參加した。此の大會に於ては共産黨の黨員たるべき條件として二十一項を數へ、嚴重なる資格を要求して專ら共産主義者の純粹性を保持せんと努力した。更に前年の大會に於て試みたと同じく、改良主義者と稱される非共産主義者を忌憚なく解剖し、その反動性を暴露して、如何に共産主義と異るかを明白

にし、更に共產黨の內部に於て批判の自由は與へられねばならないが一旦所定の手續を以て決定された決議に對しては、無條件的なる遵守を要求し、之に服從せざる場合は直に黨籍より除名すると云ひ、黨コミンテルンの絕對命令權力を確立した。

第一回と第二回との大會の開かれたのは、戰爭直後の混亂に際して、今にも革命が露西亞から全歐洲に蔓延するかの如くに思はれた時であつた。然るに一九二〇年から二一年に亙つて、歐洲勞働界に一の轉機が到來した。革命的氣運は旣に頂點に達して、今や下り坂に向ひつゝあつたのである。一九一九年の一月と三月との獨逸共產黨の敗北は、露西亞が西歐に於ける要望の中心點たる獨逸に於けることだけに、期待を裏切られた失望を與へたとしても、尙革命の未來を斷念するには及ばなかつた。然るに一九一九年五月バイエルンに建設されてゐた評議會共和國（Räte-Republik）は顚覆し、ハンガリーも亦之と同一の運命を追ひ、一九二〇年トロツキーの率ゐた赤軍はポーランドのワルソーの城門を目睫の間に展望しつゝ、佛蘭西の應援軍の爲に敗北し、全歐洲に衝動を惹起した赤軍の國外進出は挫折し、一九二〇年九月今まで猖獗を極めて伊太利全土を席捲するの槪ありし共產黨は敗北し、事態はすべてコミンテルンに不利であつた。その連續せる失敗の最後の役割を果したのが、一九二一年三月の獨逸共產黨の中部獨逸に於ける暴動の失敗であつて、時期の未だ熟せざるに焦燥に驅られた共產黨は武裝蜂起を試みて一敗地に塗れたのであつた。是等の相次いでの失敗は、單に準備の不充分なりしが爲の失敗ではなかつた、共產黨そのものゝ內部的弱點に原因があり、その失敗は單に一時的の失敗ではなくして、革命動亂の時代は去つたと云ふ時代の轉換を暗示する表徵であつた。此の雰圍氣の中に一九二一年六月第三回大會は開かれた。

此の大會に列するものは五十二國を代表する六百名で、前二回に比して著しく參加國と代表者の數を增した、量的にみてコミンテルンの膨脹を物語るものと云へる。だがコミンテルンの指導政策は此の大會に於て方向變換したことを注意せねばならない。先づ大會に於ては世界狀勢が變化した事實を指摘し、前時代の革命の氣運は頓挫しブルジョアジーはその支配權を回復したことを承認し、そのこゝに至れる理由を點檢して、第一に社會民主主義政黨が著しく右傾して、資本家階級に接近し之と提携したこと、第二に共產黨が經驗の乏しきが爲に、その未熟さが到る處に於て革命的暴動に於て失敗せしめたのだと云ふことを正直に肯定し、第三に戰爭

による創痍は癒えて、資本主義は經濟的に回復しつゝあることを擧げた。而して狀勢のかく變化せる際に、徒らに共產主義者が所謂改良主義者と隔離して、之と對立し抗爭することが、勞働大衆より共產黨を阻隔するに役立つのみだとみて、所謂改良主義者の陣營に侵入し、之と共同の戰列を布くことによつて、ブルジョアジーに對抗すべしと唱へて「大衆へ」(zu den Massen) 又「統一戰線」(Einheitsfront) と云ふ新標語を標榜した。此の標語は必ずしも衷心から改良主義者と共同の意識を感じて、それと握手し提携しようと云ふのではなく、今まで改良主義者から異端者として排斥された共產黨が、外に於て改良主義者を批判して、大衆への接近を阻止されるよりも、寧ろ統一戰線の名の下に改良主義の陣營に侵入し、之によつて大衆へ接近する端緒を求め、かくて大衆の前に改良主義を批判しつゝ大衆を自己の陣營に捕捉せんとする內部攪亂の意圖が藏されてゐた。更に又プロレタリアの統一戰線を標榜するならば、改良主義者は若し之を拒否するならば、プロレタリアの團結に誠實を缺くと云ふ非難を大衆より喚起することが出來るし、若し之を受容するならば前述の意圖を遂行することが出來るから、社會民主黨と同系の勞働組合とを、此の標語への拒否か受諾かの二者擇一の窮境に置き、何れを選擇するも共產黨に取つて有利であらうと云ふ奸策も籠められてゐた。然し同時に、コミンテルンが革命動亂の最中に於てすら案外黨員の增加の少きこと、又大衆の所謂改良主義に對する執着の牢乎不拔なること、共產黨の暴動に對して大衆の支持の乏しいことを意識して、改良主義者の陣營に接近して、ブルジョアジーの彈壓を共同防止しようと云ふ意圖のあつたことも、亦否定することは出來ない。かくて前二回の大會に於て極力改良主義者との差別を强調し、その反動性を曝露することを以てコミンテルンの任務としたると比較するならば、隔世の感があると云はねばならない。若しコミンテルンの隱蔽したる意圖なきものとして、その標榜したる文字通りに解釋するならば、第三インターナショナルは第二インターナショナルと比較して、何れに差別ありや、その特殊的存在の理由如何と、和蘭の優れたるマルクス主義者ゴルテルを して嘆息せしめたのは宜なりと云はねばならない。尙一言附加する必要のあるのは、此の大會に於て露西亞の最近に採用した新經濟政策が是認されたと云ふことである。

第四回大會は一九二二年十一月より十二月に互つて開かれ、參加者は六十箇國の三百四十代表であつた。此の大會では前年大會の統一戰線の政策を是認しその繼續を欲したが、他方に於

て統一戰線の政策は色々の危險を伴ふことを注意し、此の政策の名の下に社會民主主義に接近することが、共產主義本來の立場を忘却して、機會主義者たらしめる事を擧げ、獨逸チェッコスロヴァキアに亦その例ありとし、他方には統一戰線を唱へながら黨派の差別に膠着するセクト主義を排斥し、伊太利、那威の共產黨にその例があると云つた。統一戰線時代の一事件として注意すべきは、之より先き一九二一年二月ウィーンに第三半インターナショナルが成立し、その主唱の下に一九二二年の始め、伯林に三つのインターナショナルの幹部の會合が行はれた事である。その時合同の議が提出されたが、コミンテルンの統一戰線の標語にして誠實なる協同を意圖せざる限り、合同は不可能なりとされた。當時の第二インターナショナルを代表したマクドーナルドと、第三インターナショナルを代表したラデックとの論戰は、目覺ましき國際的の太刀打ちであつた。一九二二年獨逸社會民主黨の多數派と獨立社會民主黨とは合同し、翌年第二インターナショナルと第二半インターナショナルとも合同した。此の事件はコミンテルンが統一戰線を標榜した時代に於てのみ起ることの可能であり、又その標語が戰略的たりしことの爲に、統一戰線の實現を阻止した經緯を物語る事件であつた。

一九二三年には大會は開かれずして、第五回大會は一九二四年六月、五十五國二百八十七代表により開かれた。此の大會は恰も第二回大會に照應するもので、前二回の大會に於ける統一戰線の政策とは異る傾向を現出し、共產黨のボルシェビキ化を力說し、レーニン主義の强化を唱へた。又社會民主黨の黨の組織は議會選擧に於ける住所を基礎とするが、共產黨の組織の中心は、職場に於ける黨細胞を基礎とすべしと云ひ、更に共產黨は批判の自由を與へて主義の發展に資せんとするが、批判も亦限界がなければならないとして、統制ある服從を强調した。而して資本主義の現勢を展望して、相對的安定期に入るものとし、その表徵として生產力の發展、貿易の增加、貨幣本位制度の安定を擧げた。だが資本主義は露西亞の發展と支那の革命とによつて、安定の破綻を包含するものとし、若し資本主義の窮局的安定を欲するならば、勞働大衆の消費力を引上げるか、又は第二の帝國主義戰爭に訴へるの外なしと述べた。

同年より三年間大會は停止し、一九二八年七月より八月に亙り第六回大會は、五十九國五百七十六代表により開かれた。而して之が最後の大會であつた。此の大會に於ても亦前回と同じくコミンテルンの膨脹に伴ひ、幾多の異分子の侵入したことを警戒して、淨化作用を行ふの必

要を力説した。又以て統一戰線標語に對する反動の一標徵と目すべきであらう。同大會は第二回大會で制定された黨の規約を改正し、更に主としてブハーリンの手になつた黨の綱領を制定した。此の綱領は資本主義の根本的分析から始まつて、資本主義の現勢の展望に及び、資本主義から社會主義への轉化の過渡時代に於けるプロレタリア獨裁の意義を述べ、コミンテルンの戰略と戰術とを論じ、恰もマルクスの共產黨宣言に照應するものとして興味あるものではあるが、本文の目的には直接關係がないから省略することゝする。コミンテルンに屬する黨員は第五回大會當時には一、二二二、〇三五名であつたが、第六回大會には一、七〇七、七六九名に增加したと云はれ、若し之に青年インターナショナルを加へるならば、總計四百萬となると云ふ。人は世界を震撼したコミンテルンの黨員としては、その數の案外に少いことを奇異に感ずるだらう。

以上のコミンテルン大會の經過を辿るならば、前後六回の大會を三個の段階に區別することが出來るであらう。第一期は一九一九年と一九二〇年の第一第二大會であり、此の時代には共產主義の特異性を力說し、反對思想殊に社會民主主義に對して漫罵を極めた。第二期は一九二一年と一九二二年の第三第四大會で、此の時代には統一戰線を唱へて、たとへ共產主義の特異性を忘却するのではないとしても、社會民主主義との共同戰線を布くことを要求し、共にブルジョアジーに對抗せんとした。第三期の一九二四年と一九二八年との大會に於て、再び第一期に還元した傾向があり、統一戰線よりもボルシェビキ化が强調された。人は此の三期を通じてのコミンテルンの政策の變化に注意せずにはゐられまい。先には共に坐すべからざる裏切者として排斥した社會民主主義に對して、後にはプロレタリアの共同代表者として、ブルジョアジーに對する統一戰線を布かんと云ふ。若し名目は異るも意圖は一貫して、反對黨の攪亂にあり、それを外部よりするか內部よりするかの差異に止まると云ふならば、端睨すべからざる術策に人は眉を顰めるの外はないが、必ずしも術策とのみ解し得られない政策の變化がその間に觀取されるのである。

然らばその政策の豹變は如何なる原因から來たのであらうか。直ちに提出される答へは、歐洲に於ける資本主義の狀勢が政策の豹變を餘儀なくせしめたのだと云ふことだらう。なるほど第一期は革命的氣運の昂揚した時であり、此の時に於て共產主義の使命を高調したことは不自然ではない。又第二期は各國に於ける革命失敗の後であり、當分革命が成功する可能性の乏し

きを觀取して、後退して共同戰線を提議したとも解釋出來ないではない。だがたとへ第二期に於て手近の革命を斷念して、恒久的の革命の準備に着手したのだとは云へ、先に度すべからざる裏切者として慢罵した社會民主主義者と同道して、プロレタリアの共同使命の遂行に當らうとしたことは、別に理由が擧げられねば充分に說明され盡せない。況んや第三期の資本主義安定期に於ては、前述の理由を以てすれば一層共同戰線が唱へられねばならないに拘はらず、却つてコミンテルンの特徵づけと淨化作用とが高調されたのは何故か。又一九二九年九月以來世界は未曾有の不景氣に襲はれ、世界を擧げて局面の打開に腐心しつゝある時に、資本主義の弊害を解除し得るものは、唯プロレタリア革命の一途あるのみと自信するコミンテルンが、殆んど袖手傍觀して革命運動を鼓舞する所なく、大會も一九二八年を以て停止し爾來五年間杳として消息を聞かないに就ては、一層別個の理由を必要ならしめるものと云はねばならない。

吾々はこゝで前節に述べた露西亞に於ける共產主義の歷史と、本節のコミンテルンの發展史とを比較する時に、何ものかをその間に發見するであらう。露西亞に於て一九一九年以來戰時共產主義が採られたのであるが、此の時はコミンテルンの第一期に相當し、一九二一年以來新經濟政策が採られて、一九二四年新々經濟政策の端緒が開かれたまではコミンテルンの第二期に相當し、第三期は恰も新々經濟政策の時代に照應するのである。かく露西亞內部の政策の變化とコミンテルンの政策とが符合することを發見する時に、その間に何等の因果關係がないと斷言し得るであらうか。私はその間に密接なる聯關の存在するものと思ふ。蓋し露西亞に於て新經濟政策を採用した時は、少くとも共產主義の軌道を脫したのであり、國內に於て各種の異論が起り得た、此の國內動搖の兆候の見える時に、若し外國の干涉にして來るならば、國內は一層動亂を刺戟されるし、國內に備へるに專らなる赤軍は、外國軍の侵入を防ぐ餘力に乏しい。當時の露西亞の最も恐怖したのは、外國の露西亞に對する干涉である、之を防止する最良の方法は、各國の共產黨が暫らくその銳鋒を收めて、改良主義者と妥協提携し、一致してブルジョアジーの露西亞干涉に對抗するに在る。曾て英國保守黨內閣の外相ウィンストン・チャーチルが露西亞に宣戰を布告した時に、英國勞働黨は非干涉を唱へて軍隊軍需品の輸送一切の同盟罷業を以て之に對抗し、流石傲岸のチャーチルをして屈服するの外なきに至らしめた。此の擧は露西亞當局の夢にも忘れ得ない教訓であつて、外國資本主義政府の干涉を排除するはプロレタリ

アの露西亞に對する同情に訴へるの外はない。而して共產黨のみを以てしてはその勢力は云ふに足りないから、統一戰線の名の下に全プロレタリアの結成の下に干涉を阻止せしめようとしたのである。況んや露西亞が新經濟政策を採用しつゝ、外國に於て共產主義を高調するならば、却つて自己矛盾を突かれる虛を作る事になる。之も亦共產主義の尖銳化を警めた一理由であらう。新々經濟政策採用の後に於て、コミンテルンのボルシェビキ化と絕對服從を力說したのは、國內に於てトロツキー、ジノヴィエフ等のスターリン反對派が擡頭した爲に、是等の異論を驅逐するの必要があり、それを合理化する爲にコミンテルンに於て世界一般の問題としてボルシェビキ化と無條件黨議服從とが唱へられたのである。之を敢て口にして憚らないのは、一九二四年以後の露西亞政局は安定し、一九二一年に於けるが如き國內動搖の危惧のないのと、國際政局上外國が露西亞に干涉するの危險が去つたからである。而して一九二八年以來コミンテルンの大會の開かれないのは、露西亞の政權が愈々安定したのと、國際關係が露西亞に有利に好轉し、コミンテルンを俟つて露西亞が外國干涉を阻止するの必要が旣に消滅したからである。

若し此の說明にして大過なしとすれば、コミンテルンの政策は露西亞の安全の爲に、露西亞の利害本位により左右されたものと云はねばならない。私は前節の末尾に於て、露西亞は今も尙自國が社會主義國たるかの如き幻想を、全世界のプロレタリアに抱かしむべく努力すると云つたが、之も亦かくすることによつて露西亞を王道樂土として憧憬せしめ、露西亞に對する外國の干涉を阻止せしめんが爲であつた。果して然らば各國の共產黨は露西亞の利害の爲めに驅使される傀儡となる。之が各國共產黨をして永久に滿足せしめるであらうか。況んや單に露西亞により驅使されると云ふ心理の外に、コミンテルンの政策は各國共產黨の行動を無條件に決定し、幾多の損害を各國のプロレタリアに惹起したのである。こゝに各國共產主義の沒落の一原因がある、かくて私は漸く本論に接することが出來た。

## （四）共產主義の各國に於ける沒落

本文の序論に一言したやうに、共產主義の各國に於ける沒落と云ふことには、二個の異る問題が包含される。一は各國共產黨が露西亞を本部とするコミンテルンの命令に不信の念を抱き始め、從つて共產黨の國際的紐帶に弛緩が生じたことを意味し、他は各國に於て共產主義と云

ふ思想が大衆の支持から見放され、昔日の勢力を失墜したことを意味する。此の二つに就て順序を追つて說明することゝする(註)。

(註) 此の點に關する參考文獻として私を助けて呉れたのは次の書である。

Arthur Rosenberg : Geschichte des Bolschewismus, 1932.
Fritz Sternberg : Der Niedergang des deutschen Kapitalismus, 1932.
Karl Korsch : Der Weg der Komintern, 1296.
Siegfried Marck : Reformismus und Radikalismus in der deutschen Sozialdemokratie, 1927.
Sigmund Neumann : Die deutschen Parteien, 1932.

何故にコミンテルンは各國共產黨から信望を失つたかと云ふならば、その理由として次の數點を擧げることが出來る。第一に前節に述べたるが如く、コミンテルンの政策としてモスコーの本部より命令されるのは、露西亞國內の狀勢を基礎として、それが安全か否かに係るものとすれば、各國共產黨支部の行動は、露西亞の利害を中心とし、各國それ自身に於けるプロレタリアの利害を中心とするものではなくなる譯である。此の場合に於て露西亞が世界唯一の社會主義國であり、その存在が結局世界に於けるプロレタリアの運命に關係する所多大なるが故に、露西亞の安全性は各國プロレタリアの安全を保證すると云ふ議論が立てられないことはない。

現に第六回コミンテルンの大會で制定された綱領の第五項は明白に此の點を述べてゐるのであるが、各國に於けるプロレタリアの利害は緊急の必要に迫られてゐて、遙に將來に於て自己の利害に關係する露西亞の安全性の爲に之を犧牲とすることは、餘りに因果の聯絡が隔絕してゐると云はねばならない。況んや前々節の末尾に述べたるが如く、露西亞は社會主義建設の途上に在るではあらうが、今現に社會主義を充全に實現してゐるのではない。社會主義實現の途上に在ると云ふ點から云へば、資本主義が爛熟すればするほど社會主義實現に近づくと云ふ理由よりして、今現に資本主義の爛熟期にある西歐諸國と露西亞とを比較して、果して何れがより社會主義國に近いかは俄かに判斷を許さない。露西亞が社會主義建設の途上にあると云ふことを以て、各國のプロレタリアが眼前の利害を犧牲にせねばならないと云ふ根據は薄弱であり、各國の共產黨が首肯しないのは當然だと云はねばならない。

第二に若しコミンテルンの命令が露西亞本位であり、各國プロレタリア本位でないならば、それが各國プロレタリアの利害と矛盾することあるは當然であるが、此の意識した各國事情の無視を暫らく考察の外に置くとしても、意識することなしにコミンテルンの本部は、各國事情

に適應せざる指令を發することが多いのである。蓋しコミンテルンの首腦部は主として露西亞の共產黨員であるが、元來露西亞は歐洲の僻陬に位し、露西亞の社會事情と西歐のそれとは著しき差異があり、露西亞は西歐の特殊事情を理解することが出來ないのである。のみならずコミンテルンの本部の構成が獨裁主義の上に立つて、能率を發揮し統制を遂行するには便宜であらうが、各方面の事情が敏活に報道され、その時その時の事情に適應した機宜の處置を採るには不適當である。況んやコミンテルンの幹部は半生を放浪の中に送り、落付いて西歐を研究する餘裕がなかつたのみでなく、露西亞それ自身すら充分に認識してゐたとは云へないのである。露西亞といふ僻陬の場所に位し露西亞共產黨員と云ふ特殊の人々を幹部として、全世界のプロレタリア運動を指令するのは、最も至難の任務を最も不適當なる人々に課するものと云はねばならない。此の點に於て世界勞働運動を命令するに稍々適當なるものを求めれば、英國勞働黨の人々であらう。彼等は倫敦と云ふ世界の中心に位し、世界的視野を惠まれてゐるからである。要するにコミンテルンの指令は各國の事情に適應せず、失態を釀した事が多い。例へば獨逸の事情が今こそはプロレタリア戰線の統一を要望してゐるに拘はらず、コミンテルンは社會民主主義との對立を高調せよと命令し、今は却つて獨逸の事情が武裝蜂起を可能ならしめる時に、統一戰線の名の下に自重を命令し、機宜の處置を逸したるが如きそれである。一九二一年の三月獨逸の事情は共產黨の妄動を許さなかつたに拘はらず、コミンテルンは蹶起を命令し、獨逸共產黨の首領パウル・レヴィーは頑として動かなかつた(註一)。コミンテルンは命令に違反するものとして彼を首領より除名したが、その後間もなく開かれた第三回大會に於ては、コミンテルン自體が統一戰線の政策に豹變し、全くレヴィーの足跡に追隨したのである。之とは反對に一九二三年の一月に獨逸のラインランドは佛白軍に占領され、マルク貨の相場は下落し、國民の窮乏と絕望とは頂點に立つてゐた。若し革命的運動を起すならば、此の時期こそ、好個の機會であつた。然るに既に二年前にコミンテルンは統一戰線の政策を採つてゐた爲に、折角の機を逸してしまつた。而も同年八月俄に暴動を起さんとしたが、準備が成らない爲に慘敗に終つた。此の時自重して動かなかつたのは、獨逸の事情を前にしては拙策ではあつたが、コミンテルンの政策は自重主義であつたのである。然るにコミンテルンの政策に忠實なりし獨逸共產黨の首領ブランドラーとタールハイマーは優柔不斷なりと云ふ理由を以て罷免された。然しコミ

ンテルン自身がその翌年の第五回の大會に於て始めてボルシェビキ化を唱へたるに止まつて、曲は獨逸共產黨首領にはなくて獨逸の事情に迂遠なりしコミンテルン自體にあるのであつた。かゝる數次の失態が各國共產黨支部をして、コミンテルンの命令の正當性を疑はしめたのみならず、各國共產黨は妥當を缺いたコミンテルンの指令の故に貧ひ難き失敗を甞めざるを得なかつたのである。獨逸共產黨が露西亞に次ぐ世界第二の共產黨たりしに拘はらず、爾來遂に國內に勢力を失つたのは、實に一九二一年と一九二三年との兩度の失敗に原因したのであつた。

（註一）當時の事情は Paul Levi: Unser Weg, Wider den Putschismus, 1921. に書かれてゐる。

第三に露西亞は革命後政策に幾多の變遷があり、新經濟政策以後は如何に强辯するも、社會主義を實施してゐるとは云はれない。又コミンテルンの政策にも幾段かの變化があつたが、要するに初期に唱へたやうな世界革命を斷念し、曾ての不信者社會民主主義と統一戰線を布かうとするならば、コミンテルンは第二インターナシヨナルと選ぶ所なきは、ゴルテルの嘆息した如くである。かゝる主義の變化に對して露西亞の共產主義者の間に於てすら、トロツキー始めカメネフ、ジノヴィエフ等の反對が起つたのは、極めて當然であつた。かくてコミンテルンの幹部の間に異る思想が對立し抗爭するに至り、始めはその鬪爭も何が社會主義であるか何が露西亞にとつて必要であるかと云ふ問題に就て眞劍に行はれたが、やがては政權を維持することに自體を目的として鬪爭が重ねられるに至り、互に異る黨派を驅逐追放するを以て能事とするに至つた。所謂セクト主義が支配すると云はれる所以である。此のこと自體がコミンテルンの爲に喜ぶべき事でないのは勿論であるが、コミンテルンの本部に於ける黨派の抗爭は、そのまゝに各國の共產黨の內部にも反影し、こゝにも小規模の同樣の抗爭が行はれた。而して或る黨派がコミンテルンの本部に於て勝を占めるや各國共產黨の支部にも同一黨派が幹部を獨占し、反對黨派はすべて首腦部より驅逐される。こゝに於て各國の支部の幹部は自己の運命を決定する契機が、モスコーの本部の黨爭にあるが故に、絕えずモスコーの狀勢を注意せざるを得ず、地位の不安は落付いてその能力を發揮することを許さない。恰も地方官吏が中央政局に於ける黨派の勝敗に一喜一憂すると類似する。かくて此のやうな不安な地位に滿足せざる硬骨漢は、奮然として共產黨を去つて、或るものは社會民主黨に復歸する、例へばパウル・レヴィーはその例であり、或るものは共產黨反對派を作る、タールハイマーはその例である。若し依然として

共産黨に殘留するとせば、その人は獨自の意見なく唯コミンテルン本部の傀儡を以て甘んずるものでなければならない。此の必然の結果として、各國共産黨は人材拂底の悲境に陷つたのである。

第四は前々節に述べたるが如く、今日の露西亞には無産者の獨裁が行はれるのでなくて、無産者の一小部分に過ぎない共産黨の獨裁が行はれるのであり、かの革命の初期に重要視された評議會制度なるものは、高閣に束ねられて何等の役割を果してゐない。否更に云ふならば共産黨の獨裁でもなく共産黨中の一握りの幹部の獨裁であり、或は單一人スターリンの獨裁である。かゝる獨裁者がコミンテルンの方針を決定するならば、先づコミンテルンの本部が凡そ獨裁に伴ふ弊害を受けるものと云はねばならない。又他方に於て各國共産黨の支部は、たとへ少數の代表者を大會に派遣し得るとしても、露西亞自身の代表者に比すれば數ふるに足らず、各國は事實に於て本部の獨裁下に在る、而して第二回第五回の大會は何れも、コミンテルンの指令を絶對不動の權威を持つものとして、一絲亂れざる統制を要求してゐる。此のことが一方に於て、前に述べたやうな各國事情に迂遠であるといふ結果を招くのであるが、他方に於て各國支部をして凡そ獨裁に伴ふ弊害を滿喫せしめてゐる。所謂獨裁の弊害とは異端の思想を排斥することによつて、囚はれたる一方的の思想にのみ存在を許すといふことである。人間の能力は有限であるが故に、一人又は數人の思想のみを支配的たらしめるならば、それが實際の要望に副ひ得ない事となるは當然である。又獨裁は少數者をして他よりの批判から隔離せしめるから、反省の機會を絶無ならしめる、たとへそれがよき思想であらうとも、反省なき時に化石し凝結し潑剌たる生氣を缺くに至るは當然である。以上は獨裁が獨裁者に與へる弊害であるが、他方に獨裁下にある被支配者に與へる弊害をみると、批判の自由が與へられてゐないから、自らの意見に口を閉ざして沈默を守る。その結果は良心と服從との矛盾を意としない阿諛追從の徒を作るか、絶望の投げやりに驅り立てるか、憤懣の結果叛逆を起さしめるかである。若し批判の能力さへないものがあれば、その人々は獨裁を苦痛とは感じまい。然しその人々の服從は唯機械的の盲從たるに止まつて、外界の刺戟に敏速に反應する潑剌さが缺けてゐる、而して世に革命的運動ほど、生氣ある新鮮性を必要とするものはない。然るに獨裁はかゝる必要條件を被支配者より驅逐するか、或は始めより育成しないのである。ローザ・ルクセンブルグが露西亞革命の直

後に書いた小冊子「露西亞革命論」(註二)に於て、獨裁が自由なる創意心を根絶することを喚じたのは、誠に至言だと云はねばならない。

之を要するに以上數點の理由は、各國共產黨をしてコミンテルンに不滿を感ぜしめ、たとへ共產主義は信奉しようとも、コミンテルンの統制下に立つを好まざるに至らしめるに充分であらう。

(註二) Rosa Luxemburg: Die russische Revolution, Eine kritische Würdigung, aus dem Nachlass herausgegeben von Paul Levi, 1922. S. 113.

翻つて各國に於て、何故に共產主義は大衆の支持を得ないのか、共產黨は勢力を失墜しつゝあるのかと云ふに、之にも數點の理由が擧げられねばならない。第一にマルキシズムによれば、國家とは資本家階級の勞働者階級よりの搾取を可能ならしめる强制權力の機關であると云ふ。然しながら帝制時代の露西亞の如く、民衆を代表する議會なく、少數の大地主軍部官僚が政權を行使してゐた場合には、此の種の階級國家觀は首肯されようとも、西歐諸國の如くに夙に議會制度が發達して、如何なる階級もその代表者を議會に送り、議會が政治の中心機關である場合には、國家を以て單に資本家階級の搾取機關であると云ふは當らない。況んや露西亞に於てこそ社會立法は殆んど無きに等しかつたが、西歐の國家は勞働者階級の爲にする社會政策の膨大なる體系を行つてゐるので、國家の政策を以て資本家階級の爲のみに左右されると云つても、現に勞働者階級が國家より幾多の恩惠を受けつゝある場合に、人を承認せしめ得ないのである。

エンゲルスは「家族、私有財產及び國家の起源」の中で、前述の階級國家觀を述べた後に、例外として帝國統一後のビスマルク時代の獨逸の國家は、勞資兩階級の何れにも屬せざる第三的の性質のものだと云つたが、エンゲルスの所謂第三的の性質と云ふことは、啻にビスマルク時代の獨逸のみならず、現に西歐諸國の全體に就て妥當することなのである。又マルキシズムによれば、國民又は祖國とは、勞資兩階級の夫々の利害を超越した共同社會ではなく、その中に兩階級が截然として分裂し、全然對立し矛盾する利害の上に立つとみるから、プロレタリアに祖國なしとか敵は城內にあるとか云ふのであるが、露西亞の如く大小百八十に餘る異る民族を包含する國に於ては、國民と云ふ共同社會を意識し得ないだらうし、又ナポレオン以來外國の侵略を受けたことのない國では、外國に對して祖國と云ふ意識はないかも知れない。然し暫ら

く英國を除くとして、西歐諸國の如く互に國境を接して、いついかなる時に外國軍の侵入を受けるかも知れず、過去に幾多の慘憺たる記憶を有する場合には、祖國と云ふ共同意識あらざるを得ないし、又西歐諸國にも國內に異る人種がないではないが、長年月の融和によつて既に國民と云ふ共同社會の意識を妨げるほどにはなつてゐない。かくてマルキシズムの祖國國民に關する觀念も、西歐諸國ではプロレタリアに於てすら納得が出來ないのである。

尙マルキシズムの中には共產主義のみならず社會民主主義をも含むのであるから、前述のことはマルキシズムの上に立つ社會民主主義に對しても云ひ得ることであるが、獨逸墺太利を始めとして西歐諸國の社會民主主義は、大體に於てマルキシズムを採用してゐるものゝ、共產主義とは違つて既にマルキシズムからは或る程度まで脫却し、殊に國家、祖國、國民等の觀念に就ては、大戰前からマルキシズムの觀念に反對してゐた。從つてマルキシズムが西歐諸國に容れられないといふ說明は、共產主義の沒落の說明にはなるが、社會民主主義が容れられてゐることゝ矛盾することにはならない。

第二に共產主義の特色は、社會主義を實現するに暴力革命と無產者獨裁の方法を以てするにあるが、帝制時代の露西亞の如く議會制度もなく言論の自由もなかつた國に於ては、社會主義の宣傳をする自由もなく、社會主義政黨員を議會に送ることも出來ないから、止むなく暴力革命を起すの外に路はあるまい。然し西歐諸國の如くに既に言論の相當の自由あり議會制度を持つ場合には、議會主義の上に立つ社會主義即ち社會民主主義が成立し得る根據がある。之は專制の政治の下にのみ在つた露西亞人には納得出來まいが、社會民主主義は架空の夢だと云つても、現に社會主義政黨が或は議會の第一黨であり、それほどでなくとも相當の勢力を以て政局を左右する西歐諸國にとつては、必ずしも描かれた餅だとは貶し去れないのである。

又言論の自由と議會制度即ち形式上の自由主義の實現されてゐる國に於ては、自由は各人の幸福の一要素を形成してゐる。自己の自由が侵害されることが堪へえないのみならず、他人の自由も亦侵害すべきものでないと信ずるのである。從つて暴力革命によつて一部少數のものが武力を以て、他人を强制して社會組織を變革することを承認し得ないし、又社會主義の實現された後に於て、無產者階級が他のものに獨裁權を揮つて、言論をも壓迫することは肯定し得ないのである。露西亞の如く自由主義の形跡すらもなかつた國に於ては、自己が自由を享有した

經驗がないから、自由に對する尊重の念も起らない。然し露西亞を以て西歐諸國を律するは誤りで、此の點では露西亞こそが歐洲に於ける中世的殘滓を有する後進國で、西歐諸國は先進國である。西歐の自由主義的心情を以てブルジョアーのイデオロギーと云ふが、單にブルジョアーのみならずプロレタリアに於てすら、自由主義は西歐諸階級の普遍的心情になつてゐるのである。

私は過去に自由主義が實現されたか否かによつて、その國の社會主義は色彩を決定されると思ふ。英國の如く自由主義が完全に實現された國に於ては、共產主義は殆んど存在の餘地がない、之が第一の型である。露西亞の如く自由主義の殆んど實現された經驗のない國に於ては、共產主義のみが存在する、之が第二の型である。佛白和の諸國は稍々英國に近いが、獨逸の如く或る程度まで自由主義が實現され、然し完全にではない國では、自由主義の實現され方が完全でない限りに於て共產主義が存在し、既に自由主義が實現された限りに於て、社會民主主義が繁榮する、之が第三の型である。要するに過去に於ける自由主義の存否が、共產主義と社會民主主義との勝敗を決定する、第二の型を以てすべての型を律しても、第一と第三との型の國では承認し得ないのが當然である。

以上の二點の理由は、共產主義の思想內容が西歐に容れられない理由であるが、次の二點の理由は一面に於て共產主義の社會分析が不完全であると云ふ點に於て思想內容に關するものであると共に、他面に於て共產主義の實行が西歐に於て容易でないと云ふ點に於て、共產主義が大衆を牽引し得ない理由になる。

第一に共產主義によれば、社會は利害相對立する資本家階級と勞働者階級との二大陣營に分裂すると云ふのであるが、露西亞の如く資本主義の發達が幼稚であり、今でも都市に於ける商工業が全人口の一三パーセントしか占めず、而も都市に於て中產階級が少く、一方農村では革命以前には少數の大地主が支配して、農業勞働者が壓倒的多數を占めて、中小農民が少い國では、結局都鄙を通じて中產階級と云ふものが社會層に於て無視し得るほどの勢力しか持たなかつたから、社會が勞資兩階級に分裂すると云ふ說明は當つてるかも知れない。一方英國の如く資本主義が高度に發達した國に於ては、中產階級は全人口の二〇パーセントを占めるに過ぎないほど減少してしまつた、勞働者階級は全人口の七六パーセントの多數を占めてゐる。前者は

資本主義の幼稚なることにより、後者は資本主義の高度なる事により、中產階級が少いのであるが、多數の西歐諸國は兩者の中間に在つて、獨逸の如きは勞働者階級は人口の五〇パーセントであり、中產階級は四三パーセントの多きを占めてゐる。元來資本主義の發達に伴ひ、中產階級は沒落して勞働者階級に沈澱するを原則とするのであるが、之は傾向としては誤りではないがその沒落の速度は十九世紀の中頃にマルクス、エンゲルスが豫言したほど急速ではない。之が各國に於て多數の中產階級の殘存する理由である。之は中小農商工等の所謂舊中產階級のことであるが、他方に於て資本主義の發達と共に官公吏會社員自由職業者等の新中產階級は增加するので、英國の二〇パーセントの大部分は新中產階級であり、獨逸の四三パーセントは新舊兩方を含めてゐる。かくの如くして露西亞や英國を除いた多數の西歐諸國では、中產階級はブチ・ブルジョアーとして一蹴するには餘りに輕視すべからざる人口層を占め、その向背は勞資兩階級の運命を左右するに足るのである。此の事實が露西亞共產主義の理解し得ないことであつた。

更に進んで是等の中產階級の內容を點檢すると、舊中產階級は大資本家階級の壓迫なかりし過去の資本主義の復活を要望し、新中產階級の一部は大資本家階級と利害を同一にし、現在の資本主義の存續を希望するが、他の新中產階級殊に官公吏自由職業者の如きは、將來の社會主義社會に期待する、かくして社會は複雜なる利害と方向とに分れ、多岐多彩を現出する。こゝに於て勞働者階級は獨力では全人口の半數にも達しないから、大衆の名を以て自己を主張し得ないし、中產階級の支持を求めねば、資本家階級に對抗することが出來ない。又新中產階級のあるものは自己に味方するが故に、中產階級の一切を擧げて敵視する必要もない譯である。かくして勞働者階級と中產階級との提携が可能又必要になる、こゝに改良主義又は社會民主主義——社會民主主義と改良主義とは區別されねばならない——の生命を維ぐ理由がある。一方に於て露西亞の都市勞働者は、莫大なる產業豫備軍を農村の勞働者に持つてゐるから、その壓迫によつて終始低賃銀に引き降されるのであるが、西歐諸國ではかくの如き事實なきのみならず、勞働立法、勞働組合、消費組合の力によつて生活條件は向上して、殆んど中產階級の列にさへ入つてゐる。そこで彼等はたとへ終局の目的は社會主義社會にありとするも、急速に革命手段に訴へてまでその實現を圖らねばならぬほど、急迫した事情に迫られてゐない。現存秩序の下

に於ても尙相當の向上をなし得ると云ふ希望を捨てない、之が社會民主主義が牢乎たる根據を持つ理由である。歐洲戰後殊に獨墺諸國では多少その狀勢に變化が生じたとは云へ、尙露西亞との差違が消滅するほどにはなつてゐないのである。

第二に共產主義では常に勞働者及び農民と稱して、兩者を同列に置くのであるが、私有財產の廢止を求める勞働者と土地私有を熱望する農民とを同一視すること、既に一個の矛盾であるが、暫らく之を問題外とするも、都市と農村とを區別しないことが、露西亞では可能ではあつても、西歐諸國に對しては適用しえない。露西亞では農村人口が八七パーセントといふ壓倒的多數を占めるが、英國では僅に八・五パーセントであり獨逸でも三一パーセントにしか過ぎない。此の點で露西亞では農民を無視することが出來ないが、西歐では佛國を除き露西亞の如くに勞働者農民と併稱せねばならないほど、農民を重要視しないでも濟む。一方でかく云へると共に他方には、露西亞では農民の數は大きいが、質的には無敎育の農民を無視することが不可能ではない。然し敎育の普及する西歐でたとへ少數とは云へ、農民の存在を無視することは出來ない。而して、露西亞は農產物の輸出國であるから、外國よりの輸入農產物に關稅を課すると云ふ問題が起らない。從つて都市と農村とが關稅を中心として利害衝突すると云ふことがないが、西歐諸國では農產物を輸入する必要があり、之に關稅を課して國內の農民を保護するかどうかと云ふことが重大な問題となる。若し之に關稅を課するならば、農產物の價格は上り、地代は上り地價が上る、土地の擔保價格が上る、之が地主の關稅を喜ぶ理由である。同時に農產物の價格の上ることは、農村勞働者の賃銀を引上げるから、彼等も亦關稅を喜ぶ。此の點で關稅を中心として農村では地主も勞働者も共同の利害の上に立つ、之が露西亞の如く農村の地主と勞働者とが必然的に對立抗爭するのと趣きを異にする所以である。それと同時に農產物の價格の騰貴することは、都市に於ける勞働者始め消費者全部の生活費を高めるから、彼等は關稅を喜ばない。此の點で都市と農村との利害が反對し、都市の勞働者と農民とが共同の戰線に就くことを困難にする、之が一概に勞働者農民と併稱することを許されない理由である。然し都市の勞働者のみの獨力では微力にして何事も爲し得ないから、農村の中產階級や勞働者に或る程度まで提携を求めねばならない。之が勞働者階級の政策の中に、現存國家に執着する改良主義の附き纏ふ理由である。

最後に以上總計四つの理由の外に、稍々是等と異る理由が略かれてはならない。即ち共産主義ではインテリゲンツィアなるものが輕視されるのであるが、露西亞の如く革命に際してインテリゲンツィアが首鼠兩端を持したと云ふ經驗を持つ國では彼等を蔑視してもよからう。又露西亞の如く教育が普及せず人口の僅少の率しか就學しなかつた國に於ては、インテリゲンツィアの社會的役割を無視してもよい。然し西歐諸國では自由主義革命以來インテリゲンツィアの爲した功績の記憶は鮮かであり、教育が普及してゐる爲にインテリゲンツィアの教育的任務は顯著である。此の事情を無視して共産主義はインテリゲンツィアを輕視した爲に、有力なる思想家が共産黨を去つたのみならず、共産主義の宣傳に從事する優れた學究を失つた爲に、共産主義の勢力はかなりの打擊を蒙つたと云はねばならない。更に一歩を進めれば、共産主義がインテリゲンツィアに對する輕視の中には、既存の哲學、宗教、藝術等の所謂意識形態がブルジョアーのイデオロギーであると云ふ解釋が含まれるのであらうが、露西亞に於てこそ是等の意識形態は、ブルジョアーの有閑階級の獨占的所有物であつたらうが、西歐諸國では教育が普及してゐる爲に、是等の所謂ブルジョアー・イデオロギーなるものは、單にブルジョアーのみならずプロレタリアにも共有財産と化してゐるのであつて、之を有閑階級と聯想せしむる何物もないのである。又是等のイデオロギーの中には、現存資本主義維持を根據づけるやうなものもあらうが、西歐の哲學、宗教、藝術は必ずしも保守主義と聯關せず、多分の進歩的役割が聯想されるのである。よし又資本主義維持を根據づける限りに於ても、その基礎强靱であり、民衆に根强く浸潤してゐて、一朝に之を淸算し得るものではない。露西亞共産主義は此の間の事情を理解し得ないのである。

之を要するに、共産主義は西歐に於て容易に突破し得ない障壁に逢着し、思想的に社會的に社會民主主義の根柢は意外に深いのである。曾てブハーリンは改良主義――彼は社會民主主義と改良主義とを混同する――と云ふ惡臭を發する屍はいかなれば尙ほ壽命があるのかと訝つたが、共産主義者に足りないのは、西歐の社會民主主義の社會學的研究だと云はねばならない。

かゝる幾多の理由によつて、共産黨は西歐に於て膨脹し得ないか、又は減少しつゝあるのである。世界第二の共産黨だと云はれる獨逸では、一九二一年には黨員五十萬だと云はれたが、同年三月の失敗後十八萬を失ひ、一九二八年に於て黨員は僅に十二萬一千を數ふるに過ぎない。

而して曾て首領たりしパウル・レヴィー、學者ローゼンベルグの如きは去つて社會民主黨に復歸し、又首領たりしブランドラーやターールハイマーは去つて、別に獨逸共產黨反對派（Kommunistische Partei Deutschland-Opposition 略して KPDO）を作り、カール・コルシュは去つて孤立してゐるが、フリッツ・シュテルンベルヒ等は去つて、共產黨と社會民主黨との中間に位する別派を作つてゐる。此の派は共產黨に加入した以前のローザ・ルクセンブルグを基礎としてゐるが、獨逸で注目すべきは共產主義と對立するトロツキー又はローザ・ルクセンブルグの思想的勢力である。是等共產黨を去つた人々は何れも有力な人々で、黨の損害は少くない。共產黨それ自體も從來の思想內容を變更する必要に迫られ、一九三〇年九月の總選擧に於ては、資本主義の變革よりも舊聯合國の獨逸に對する經濟的壓迫を排除することに重きを置いて、著しく國民主義的色彩を加へ、世界勞働界の注目を惹いた。佛國に於ける共產黨も、一九二四年には黨員六萬八千であつたが、一九二八年には五萬二千に減少し、共產黨內部に於て正統派に對する反對は、一九二四年から二五年にかけて擡頭し、一九三〇年頃には正統派を脅威する勢力となつた（註三）。英國に於ては始めより共產主義は微々として振はず、一九三一年の總選擧に於て全國を通じて僅に七萬四千の投票しか得られず、二十六名の候補者中二十一名は供託金すら沒收された。英國議會に列した共產黨議員は曾て一名あつたのみで、その後に於ては議席は皆無であつた。

（註三）佛國に就ては昨年八月號「經濟往來」田邊忠男氏の「轉向の一般性と離脫の特殊性」、英國に就ては本書第五の「英國社會運動の變調」參照。

共產黨の勢力は衰へつゝあるのみでない、現に有する黨員の限りに於ても、その質に於て他黨に比較して、著しく劣つてゐる。蓋し共產主義に魅力を感ずるものには、一種の性格型がある。その第一は焦燥にして冷靜さを缺き、情熱に支配されて粘り强さが乏しく、否定に急にして建設に迂である、これ共產黨に青年又は失業者の多い所以である。その結果として現はれるのは、共產黨の黨員に浮動性の多いことであり、これ人が通過黨（デユ・ヒガクスペルタイ）と稱する所以である。蓋し一度は加入して、永久には止まらないと云ふ意味である。又黨の選擧に於ける投票が散在投票にして、結成統一を缺くことであり、更にその票が共產黨を積極的に支持する投票でなくて、他の政黨を否定する消極投票たることである。第二の性格型は不平反抗の傾向を有する

もので、資本家階級に對しての此の傾向が現はれる限りに於て差支へないかも知れないが、同一の傾向は共產黨自體の內部に於ても、反目、抗爭、嫉妬、排擊と云ふ傾向となつて現はれ、不斷の對立分裂を繰返し、黨の結成統制を妨げてゐる。かくて共產黨に牽引される性格の多くは、黨を健實に强大ならしめるに適しない、これ獨逸共產黨が最近數回の總選擧に於て數百萬の投票を得るほどであつたに拘はらず、昨年ヒットラーの一擊の下に脆くも潰滅した所以であつた。

私は各國殊に西歐諸國の共產黨の中に、何故にコミンテルンに對する不信が增加したか、各國共產黨が何故に大衆の支持を得ないか、その弱性が奈邊にあるかを述べた。日本共產主義者の轉向は、此の世界的現象の一環として、最近始めて現はれたに過ぎないのである。

## （五）日本に於ける共產主義の轉向

吾が國に輸入された社會主義は、英國の勞働黨の社會主義ではなく、マルキシズムであつた。マルキシズムも獨逸の社會民主黨のそれではなくて、露西亞を通じた原始マルキシズム即ち共產主義であつた。共產主義は最近一、二年前まで思想界を支配し、社會運動界に於ては必ずしも支配的ではなかつたが、社會民主主義と匹敵する實力を有してゐた。何故に共產主義が日本に於てかくも勢力を揮つたかに就ては、思想界に於ける原因と實際界に於ける原因とに分けねばならないが、今こゝには後者に就てのみ觸れるならば(註一)、その原因を簡單に云へば、吾が國も亦所謂中間國家であつて、世界に於ける國家の英國型に屬せずして、露西亞型に類似するものを持ち、一八四八年以前の原始マルキシズムが妥當するかの如き社會狀勢が多分に存在してゐるからである。即ち第一に議會制度が不完全であつて、民衆の選擧したる代表者の議會は、僅に政治權力の一部を占めるに止まり、貴族院、樞密院、軍部の如きは、衆議院と伍して或はそれ以上に政局を左右する勢力を持つてゐる。又選擧法の不備は容易に民衆の意志を衆議院に反映せしめることを許さない。かくて此の國に於ては議會を通じて社會主義を實現することは、たとへ一場の夢ではないとしても百年河淸を待つに等しいと云ふ感を抱かしめる、これ暴力革命を以て社會主義の實現を圖るの外なしと云ふ共產主義に共鳴せしめる所以である。又議會主義が民衆の信念として浸潤してゐないから、社會組織の變革は必ず民衆の同意を俟つてのみ行は

るべしと云ふ要請が强烈でない。改革の內容にして善いならば、その實現の形式は多く問はれない。若し英國であるならば、共產主義は民衆の議會主義的信條に對立するが故に、必然に民衆の熾烈な反撥を受けねばならないのであるが、日本に於てはかゝる反撥を受くることなしに暴力革命主義は橫行濶步しうるのである。

第二に若し言論の自由が現在に於て確保されてゐるならば、支配階級の利益の爲に言論が壓迫されてゐると云ふ非難を免れうるであらう、然るに日本に於ては言論が完全な自由を持たないが爲に、今はブルジョアーが言論を壓迫する、次に革命後に於ては之に代はつて、プロレタリアがブルジョアーの言論を壓迫することは當然だと云ふ共產主義の無產者獨裁の思想を是認せしめ易い。のみならず若し言論は自由ならざるべからずと云ふ思想が民衆に普及してゐるならば、無產者獨裁と云ふことは强烈なる反感を惹起するであらうが、日本は英國に於けるが如き言論自由主義の思想が普及しない爲に、共產主義は此の點に就ても大なる障害なく容易に此の國に侵入しうるのである。第三に以上の議會主義と言論自由主義即ち所謂形式上の自由主義の發達せざる國に於ては、此の自由主義の上に立てる社會主義即ち社會民主主義は、民衆の根本に立脚した信條となりえない。況んや吾が國に於ける社會民主主義はマルキシズムの上に立つ社會民主主義であつて、英國勞働黨のそれではない、從つて自由主義と社會主義とが內的必然の聯關を有する渾然たる體系を爲してゐない、これその理論的に弱性を有する所以であり、社會民主主義の政黨は共產黨と對立して、充分拮抗すべき强固なる理論上及び實際上の地盤を持たない、之が共產主義をして唯一の社會主義たるかの如き觀を抱かしめるのであらう。最後に然し決して輕視すべからざる理由は、日本に於て社會改革の思想として、共產主義が魅力を有することである。日本が政治上、社會上、經濟上あらゆる方面に於て、根本的の改革を必要とすることは何人も疑を挿むまい。此の時に當り改革思想として、その理論とその綱領と實現の方策とを、日本の民衆の前に提示したのは唯マルキシズムのみであり、他に之に匹敵すべき網羅的の又體系的の思想がない、これ共產主義が牽引力を有する所以であり、又改革に焦慮するものは、その內容を克明に檢討する餘裕を持たず、その態度の中正穩健たることに滿足しえない。共產主義はその主張の鮮明なることに於て、その改革の大膽なることに於て、改革を要求するものゝ心理に投ずる恰當の條件を具備するのである。然し一方に於て日本に於ける共產主義

が、他に之と對立するものなしと云ふ消極的の理由によつて普及したならば、その共産主義は比較と檢討と批判との曲折の後に於て把握されたものではない。こゝに後年の轉向の可能性の伏在することは後に述べるが如くである。

（註一）思想界に於ける原因に就ては拙著「大學生活の反省」（日本評論社發行）中の「現代學生とマルキシズム」及び私と蠟山教授との共著「學生思想問題」（岩波書店發行）參照。

以上は日本に於ける共産主義が勢力を獲得した條件であるが、繙つて日本の狀勢を觀察するに、此の國に於て共産主義が容易に不拔の根柢を持ちえない幾多の理由を大別するならば、一は西歐に於けると同一の事情が日本にも存在して、共産主義は容易に突破しえざる障害に逢着することである。前項に述べたるが如く、共産主義は國家を以て資本家階級の利益擁護の機關と看做し、國民を以て利害を異にする兩階級に分裂するものとし、共同の利害の上に立つ社會と認めないのであるが、帝政時代の露西亞や一八四八年前後の西歐と異り、議會制度が與へられて、民衆の代表者が政權に參加する現今の日本に於ては、又國家が勞働者階級の爲にたとへ不充分なりとも各種の社會政策的立法を實施する日本に於ては、共産主義の階級國家觀は民衆の信念に合致しない。況んや外國からの侵略の危險に曝された經驗を有する日本では、祖國なるものは、資本家階級たると勞働者階級たるとを問はず、共同の運命を意識せしめることが多い、此の點に於てもプロレタリアは祖國を有せずとの言は、日本のプロレタリアのすべてには妥當しないのである。更に日本に於ては前述したやうに、言論の自由は完全ではなく、又議會が政局に於て占める地位は絶對的ではない、此のことが一面に於て共産主義を培養せしめた理由ではあるが、他面に於て帝政時代の露西亞と比較すれば、その間に顯著な差異が見出されるであらう、即ち言論の自由はたとへ完全ではなくとも、憲法に於て明文を以て保證され、唯法律によつてのみその制限を認めるに止まり、議會の地位はたとへ絶對的ではなからうとも、民衆はその意志を表現する機關として衆議院を與へられ、重要なる國家の政策はその同意なくして實施されえないのである。日本に於ける自由主義は歪曲されてゐるにしても、ともかくそれがある程度に制度の上に實現され、又その限りに於て自由主義的思想は、國民の腦裡に浸潤してゐる。英國の如く自由主義が完全でもなく、又露西亞の如く自由主義が皆無でもない、日本の如き中間國家に於ては、一方に共産主義を生ずると共に他方に於て自由主義的信條が共産主

義の暴力革命主義と無產者獨裁主義との思想に對して、ある程度の反感と拒否とを感ぜしめる。かくて共產主義は必ずしも無人の境を往くが如くに廣汎な社會層に蔓延しえないのである。

更に日本に於ては農村人口が全人口の五〇パーセントを占め、英國の如く農業を無視しえないと共に、露西亞の如く農業が絕對的の地位を占めてもゐない。從つて日本は農產物の輸出國ではなくて輸入國であり、農產物に關稅を課するか否かの問題を生じ、此の點から都市と農村とは必ずしも利害を同一にしない、勞農と併立して共同の戰線に立たしめえた露西亞と異る事情がこゝに在る。又日本の農民は一面に於ては未だ資本主義の洗禮を受けざる前資本主義の形態を有し、その思想に於ても都市勞働者の思想と同じくなく、保守主義の强固なる地盤がこゝに在るとも考へられる。又他面に於て日本の農民は教育の普及した結果として、自覺を有する點に於て露西亞農民の比ではない。彼等は都市の勞働者との利害の異同を洞察する頭腦を有し、都市勞働者のヘゲモニーを甘受するには餘りに進步してゐる。以上の日本農業の事情は、都市勞働者と共同して社會主義を實現することの障害であり、而して農民を除外した日本の勞働者のみの勢力は遂に論ずるに足りないのである。更に社會主義の實現を阻止する今一つの事情は、日本の中產階級の過剩なることに在る。資本主義が相當發達した爲に新中產階級を發生せしめたと共に、未だ資本主義が充分に發達しない爲に、舊中產階級は多分に殘存し、彼等は未だ勞働者階級に沈澱するには至らない。之等の新舊中產階級は勞資兩階級の中間に介在して、何れにも屬せず又何れかを支持して、有力なる率制權を掌握してゐる。之等の中產階級の前に、勞働者階級は未だ全人口の絕對多數を占めざるは勿論、大衆の名に於て自己を主張することさへが不可能なのである。今一つ日本に於てインテリゲンツィアは、嘗に中產階級として一社會層を形成するのみならず、知識を尊重し教育を重要視する此の國に於ては、社會動向を決定するに就て無視すべからざる勢力を持つ、勞働者、農民が生產上の勢力を持つと同じく、彼等は無形の知識と云ふ武器を以て社會に影響を及ぼしうるのである。以上日本の農業と日本の中產階級と日本のインテリゲンツィアとは、共產主義が看過した日本の特殊的事情であつて、之を看過したことに於て共產主義は理論的弱性を曝露し、之を看過するに於て共產主義は日本に於て實現の障害に逢着し、又之を看過して遠くモスコーより發したコミンテルンの命令が、日本の事情に適合せずと云ふ理由によつて信用を失墜せざるをえなかつた。

こゝまで述べた事情は、日本も亦中間國家の一つとして、西歐諸國と同じく共產主義に反撥する理由になるのである、況んや前項に述べた如きコミンテルンの內部的缺陷、即ちその政策が露西亞本位であること、各國の事情に迂遠であること、露西亞の本部にセクト主義が支配すること、獨裁制度が下よりの潑剌たる批判を阻止してゐること等を顧みるならば、日本に於ける共產主義的勢力の限界が分明するであらう、又コミンテルンからの脫離が免れえないことが理解されるであらう。だが日本には西歐諸國とも異る別種の特殊的事情があつて、此の障害の前に共產主義は遂に當つて碎けざるをえなくなる。吾々は之に一瞥を投する必要がある。

第一は天皇制に對する國民の信念である。日本に於ては萬世一系の皇統を戴き、君民相共同して二千數百年の久しきに及んだ、君主の臣民に對し臣民の君主に對するや、家族內に於ける親子の眞情に類似する。二千餘年間君主が臣民に虐政を布いた實例なく、國內に戰爭一揆があつても、臣民の君主に對するものではなく、臣民中の一部が他の臣民に對する權力の爭奪を目的とするものであつた。君主は之等の政爭の外に超越し政權を行使するものは君主の委任を受け、自ら意識することなしに立憲政治に於ける國務大臣の如く君主に責任を負うて來たのである。藤原氏、平氏、源氏、北條氏、足利氏、織田氏、豐臣氏、德川氏の如き何れもそれであつた。日本に於ける天皇を以て資本家階級の代表者と目し、之をツァーやカイザーと同一に律するは、日本の君主の特殊性と國民の君主に對する信念とを無視するものである。共產主義は外國に於ける君主を以て日本の君主を律し、天皇制を廢止することを以て重要なる綱領とした爲に、國民の不拔の信條と衝突し、國民の熾烈なる反感に出會せざるをえなかつた。

第二は日本の國際的地位である。明治の初期に日本は英佛露よりの侵略の危險に曝されてゐたのみならず、その後に於ても人口過剩にして富源の乏しい吾が國は、外國に對して勞働者を移住せしめうる自由と、外國よりの資本を輸入しうる自由と、自國の商品を外國に販賣しうる自由とを持つに非ざれば、諸外國と對等の地位に立つと云ふことは出來ない。然るに移民は禁止され、資本の自由移動は行はれず、商品の販路は關稅の障壁により阻止されるならば、自國の產業は萎靡沒落し、その結果として勞働者の失業を招來し、就業者の生活條件は低下する。かくて日本は國際團體內に於て既に多くを所有する諸外國に對して、何ものも持たざるプロレタリア國たるの意識を持つ。國內に於けるプロレタリアが生きんとする欲望の前に、現存秩序

を維持する法律と道德とに對し、懷疑的であり批判的たると同じく、只管に國際平和を維持せんとする平和主義は、持てるものを擁護し持たざるものを現狀に呪縛せんとする企圖だと云ふ猜疑心を持つ。なるほど海外領土の膨脹は、資本家階級に勞働者階級に對するよりもより多くの恩惠を與へるであらう。然し勞働者階級も亦最低生活條件に均霑することが出來るであらう。かくて日本の國民の領土への欲望は、資本家階級の獨占的欲求に非ずして、國民全體の生存權の主張を背景とする。更に有色人種は白色人種の壓迫搾取の下に在り、有色人種中白色人種に對して自己の獨立を主張しうるは日本のみであり、日本なかりせば有色人種への壓迫搾取は更に加速度を以て進んだかも知れない、たとへ日本自體が帝國主義を實行しつゝあるとは云へ、尙日本が世界の被壓迫人種の爲に白色人種に對する抵抗線を形成しつゝあると云ふ自己解釋は全然虛妄であるとは云へない。以上の國民の見解が果して正當であるか否かの批判は、今私のこゝに企てんとする所ではない、吾々は唯正當たると不當たるとを問はず、現に國民の間に行はれつゝある見解を認識することのみが必要である。此の見解は國際主義に對して國民主義を、平和主義に對してある場合の武力是認主義を生じ、斷じて敗戰主義を肯定せしめない。然るに共產主義は國際主義と平和主義と敗戰主義とを主張し、日本國民の信念と調和し難き矛盾に陷るのである。況んや日本國民の國民主義は外國より不羈獨立を要求する、然るに共產主義はコミンテルンの命令に絕對的服從を要請する、これ日本の國民主義が到底承認しえない所である。

第三は日本國民の全體主義である。こゝに全體主義とは個の集合たる社會を以て第一義的價値あるものとし、個は之に對して單に手段として第二義的價値あるに止まると云ふ思想である。之を小にしては家族と云ふ全體に對し、之を大にしては國家と云ふ全體に對して、かゝる絕對的神聖の地位を與へるは、日本國民の信條である。全體主義は吾が國民が古來大體同一人種より成り、外國に於けるが如く感情に於て利害に於て異る數人種より構成されてゐるのと違ふ爲に、全體を分解せねばならぬ理由が乏しかつたのと、明治以來前述したるが如き國際的地位が、內に統一と結束とを維持することを必要としたからであらう。全體主義は個人を以て第一義的價値あるものとする個人主義に對立すると共に、又階級を以て第一義的存在とし、ある階級の運命を以て至上價値あるものとする思想に對立する。今全體主義に對する批判は暫らく之を措き、共產主義のプロレタリア階級至上主義は、全體主義と必然に反撥し、國民の强固な信念に

當つて碎けざるをないのである。

第四は日本國民の中にある道德的觀念である。此の觀念の全貌を明かにすることは、容易な事ではないが、その一部として例へばたとへ目的は正當であらうとも、手段を選ばざるが如きは許しえないこと、又例へば敵に對しても同情と寬容とを表示することを喜ぶが如きことを擧げることが出來るだらう。單に勝利をえんが爲に狡猾なる方法を以て敵を欺くが如き、他人の信賴を裏切るが如き歷史上の人物に對して、憎惡嫌惡の感を抱くのは此の國民の通例である。又敵たる信玄に鹽を送れる謙信に對し、敵を討ちて吊ひの爲に佛道に入れる熊谷直實に對し、國民の抱く美感と共鳴とは、吾々の日常經驗する所である。共產主義は之を以てブルジョアジーの道德的意識形態として一笑に附するかも知れない、然し曾に之等の觀念がブルジョアー、プロレタリアの關係と沒交涉であるのみでなく、たとへ之がブルジョアー道德意識であらうとも、消すべからざる國民全般の通念である。かくて共產主義者が資金獲得の爲に銀行ギャングを行ひ、內部の裏切者に對して殘酷なる私刑を行ひ、反對思想家に對し中傷罵倒曝露至らざるなき橫暴は、共產主義の爲には有利な手段であらうとも、國民の道德的觀念に背馳し、資本主義に贊成すると社會主義に贊成するとは問はず、眉を顰めしめんずんば止まず、共產主義に不信と嫌惡とを齎らしてゐる。

以上數個の日本の特殊事情は、共產主義に對し、克服し難き障害となる、若し飽くまでも此の障害に衝突せんとするならば、共產主義は日本に於て遂に進展しえない限界に到達する。若し共產主義を進展せしめんとするならば、之等の特殊事情を考慮に置いて、順應すべく共產主義を修正せねばならない、これ轉向の由つて來る所以である。だが之れだけでは轉向が早晩來らねばならぬと云ふ說明にはならうが、轉向が昨年六月以來始まつたと云ふ說明としては充分ではない、之が爲には吾々は更に次の如き特殊的說明を附加せねばなるまいと思ふ。

第一は國家機關による彈壓の激化したことである。共產主義運動の始めて擡頭した當時には、その思想內容が充分に知られず、國家の之に對する研究調査も不充分であつた、從つていかに之を處すべきかゞ決定されずして時機を逸したのであらう、然るにその後に研究調査の進捗するに伴つてその全貌が明白となり、之に彈壓を加へんとする確信が成立した。又一方警察當局は共產黨の組織を知らなかつた爲に、黨員の逮捕に遺漏が多かつた、然しその後に經驗の

積むに伴ひ、今は殆んど間然する所なき捜査網を準備し、當局の對應工作は完成するに至つた。かゝる彈壓に對して共産黨は到底抗抗することが出來ず、全く潰滅して社會改革を拋棄するか、幾分なりとも社會改革を實現しうる爲に思想の訂正を行ふかと云ふ二者擇一の窮境に立たされた、而して彼等は此の儘に窮地に追ひつめられて潰滅するよりも、思想上の訂正によつて存在を繼續する方を得策と考へたであらう。

第二に滿洲事變後の國民の思想の變化である。滿洲事變自體が日本の國際上の地位より來る國民主義の結果であるが、同時に滿洲事變の發生が齎つて日本國民に國民主義と全體主義とを喚起せしめた。是等の信條は從前よりも存在してゐた、然し事變は之を潛在より顯在にまで、無意識より意識にまで變化せしめたのである。既に國民主義と全體主義とにして强力なる存在を前景に現はすならば、共産主義は國民の反感と反撥との對象に立たざるをえまい、若し國民の反感と反撥とを緩和せんとするならば、之に適應すべく內容を訂正せざるをえない。況んや事變後プロレタリア階級內に於てさへ、國民主義と全體主義とは勢力をえて、いかに此の主義が日本國民の牢固たる信條たるかを認識した共産主義者は、その主義を原形の儘に固守するならば、プロレタリアにさへ支持を失ふことを恐れたのである。

第三に滿洲事變以來擡頭したファッシズムは、從來共産主義が考へた如く、金融資本家が自己の勢力を維持する爲の保守的思想ではなかつた。たとへ中産階級的であり農民本位であるとは云へ、資本主義を打倒することを綱領とする點に於て、明かに反資本主義である。その將來の落付く前途は何であらうとも、少くとも擡頭の當初に於ては、現存社會機構に對する改革的反抗であつた。社會改革思想として獨占的地位を占めてゐた共産主義は、こゝに對立すべき別個の社會改革思想に出會して、改革思想として對抗せねばならなくなつた。ファッシズムの擡頭は或は共産主義者の中より、又或は共産主義に往くべかりし者より加入者を獲得したので、共産主義はその勢力の減退を感知し、共産主義者の脫離を喰止め更に勢力を擴張する爲に、新狀勢に適應するの必要に迫られた。

第四に既に轉向が現はれたならば、轉向は共産主義の無謬性に對する不信を喚起し、共産黨の勢力を失墜する。共産黨の勢力を以てしては、現存秩序に對する反抗を持續しえないことを悟り、轉向は更に轉向を生み、かくて停止する所なきに至る。元來主義そのものゝ持つ眞理性

に希望を維ぐよりも、希望實現の可能性を客觀的狀勢に置く彼等にとりては、客觀的狀勢の變化は、急速度を以て主義の訂正に反映して來るのである。かゝる一般的背景の下に昨年六月以來の日本共產主義の轉向なる現象は成立したのであつた。

所謂轉向なるものゝ中に、吾々は二つを區別せねばならない。一は河上肇によつて發表された轉向である。曾て書齋裡に研究と發表とを能事とした同氏が、共產黨に加盟するや、實踐に從事し之が爲に牢獄に繫がれたのであるが、氏は出獄後は實踐を拋棄し、從前の如く研究と發表とに還元せんと云ふ。實踐を以て眞理を把握する爲の唯一の手段とし、又主義實現の爲に實踐を黨員の不可缺の任務とする共產主義からみて、氏の決意は轉向と目すべきものであらう。だが氏は實踐至上主義の共產主義を訂正せんとはせずして、依然として共產主義の實踐至上主義の無謬性を信じて、その故に自己を共產主義者としての墮落であると云ふ。だが若し氏の實踐拋棄が氏個人にとり自然性と必然性とを持つならば、一人にとつて妥當することは氏以外の人にとつても妥當せねばならない、何故に氏は更に進んで共產主義の實踐至上主義の限界性を指摘して、その限りに於ける主義の訂正を試みなかつたのか。主義の實踐の前には啓蒙が必要であり、殊に日本の如くインテリゲンツィアの助力を借りるに非ざれば、社會主義の實現の望少き國に於ては、研究と宣傳とは一層必要でなければならない。而して各人の任務は各人の個性に應じて異らねばならない。然るに能力と境遇の如何を問はず、あらゆる人を同一の實踐的任務に置かんとするは共產主義の誤謬である。氏の轉向は何ぞ悟ることの遲かりしと云ふ嘆を發せしめると共に、その轉向を何故に主義の訂正にまで及ぼさずして、徒に自己を叱責すると云ふ半途に停止したかと云ふ嘆を發せしめる。

之に反して昨年六月發表された佐野、鍋山の轉向と、今年三月末の再建共產黨の田中清玄一派の轉向とは、河上氏の場合の如く主義を現狀に放任して、自己を主義より脫離せしめると異り、主義自體の批判を試みて自己を修正された主義の上に置かんとするものである。彼等の轉向の內容をこゝに詳細に紹介することは、本文の目的に必要なきのみならず、獄中に在る彼等の地位よりして未だ充分にその內容を知ることをえない。唯その要點のみを捉へるならば、恰も前項に述べたる西歐共產主義者と同じく、一はコミンテルンに對する批判に相當し、他は共產主義に對する批判に分類される。前者に於て(一)コミンテルン及び黨の宗教化された權威を

破らんと云ひ、(一)經典的公式主義と戰ふべく決意したと云ひ、(二)コミンテルンの露西亞性及び蘇聯邦機關化に反對し、(四)コミンテルンのセクト化官僚化に反對し、後者に於て、(一)天皇制は國民不拔の信念にして之に反對したるは誤りであつたといひ、(二)日本第一主義を唱へて國際主義に反對し、(三)國民主義を唱へて階級至上主義に反對し、(四)日本民族の能力とその特殊使命を認識せよと云ひ、(五)支那及び亞細亞に關する再認識を要求し、(六)民族自決主義に反對して日豪鮮の勞働者の結合を主張し、(七)敗戰主義に反對し、(八)日本農業の特殊性を力說し、(九)機械的なコミンテルン的プロレタリア・ヘゲモニーを排斥し、(十)小ブル、インテリゲンツィアを排して、大衆と生々と結合した非セクト的な實行的な人民的なプロレタリア黨を再編制せよと云ひ、(十一)非合法運動を改めて合法運動を採らうと云ふ(註三)。以上の要領を點檢して、前述した日本の特殊事情を顧みるならば、いかに轉向が日本の事情に適應すべく企てられたかゞ分るだらう。又前項に述べた西歐の共產黨沒落を讀み返すならば、日本共產主義者の轉向が世界に共通する現象の一部的表現たることが分るだらう。

(註三)　昭和八年八月號「改造」佐野學「コミンターンとの決別」、同九月號「改造」九津見房子「獄窓にて三田村四郎はかく語る」、昭和九年五月號「中央公論」佐野學「所謂轉向について」、同月「改造」同氏「民族と階級」、同三月三十日「東京朝日新聞」の再建共產黨の轉向に關する記事等參照。

世人は轉向を以て、果して眞實の信念に基くものか、或は又刑務所に於ける刑の量定を輕減せんとの策略より出でたるかに就て判斷に迷ふものゝ如くである。固より數多き轉向者の中には獄中生活の苦痛に堪へずして、心にもなき轉向を放言したものもあらう、然し私は轉向が必ずしも彼等の信念より出たものでないとは思はない。蓋し日本の共產主義者がその主義を捉へたのは、あらゆる思想と比較檢討した後に於てゞもなければ、靜かに日本の事情を考慮して、確信を以て之を把握したのでもない。早急に無批判的に受容したものが多い。而して實踐に狂奔するや、靜思反省の遑なく、又一旦官憲の迫害と世人の指彈とを受けたるものは、その思想を終始固守するの止むなきに陷り勝ちである。然るに獄中に於て獨坐瞑想の餘裕を持つや、始めて日本の特殊事情を考慮し、他の思想との比較檢討の機會を捉へることが出來た、かくして生じたのが轉向だと解することが可能である。轉向は日本に於て共產主義を受容する徑路の無批判的であつたことの結果であつて、早晩來るべきものが遂に到來したに過ぎないのである。

本文はコミンテルンの崩壞と云ふ現象を說明することを目的とし、その妥當か否かを價値批判することを目的とするものではない。だが唯一言批判を附加するならば、所謂轉向の批判は二方面から爲されうる。一は轉向と云ふ事柄自體に對する批判であり、他は轉向した新しき內容の批判である。元來社會運動を指導する社會思想の中には、普遍的恒久的の理論と場所的時間的に制約された妥當性を有するに過ぎない部分とがある。いかに社會運動の實踐を爲すべきかと云ふ政策綱領は、その時その社會の特殊的狀勢に適應すべきものであつて、此の部分が時時に變更することは、當然の事でもあり又いかなる社會運動に就ても從來なされた事でもあつた、之を一々轉向と稱して變說改論と目するは正當ではない。唯マルキシズムと云ふ特殊の社會思想は、その世界觀より綱領に至るまで必然的の內的聯關を有することを特徵とする爲に、綱領の末節の變更さへもが、その思想の中樞的部分に影響を及ぼさずんば止まないのである。又本文第二節に述べたるが如く、共產主義者は可變的の部分の變更をも一々理論付け、恰も恒久不動の眞理かの如き感を與へることを常習として來た。是等の事情が他の社會思想に就て轉向が起つたならば、さまで問題とならなかつたであらうのに、會々共產主義の轉向に就てのみ異常の注意を惹くに至らしめるのである。

コミンテルンへの盲目的服從から脫却し、日本の特殊的事情を認識して、之に適應すべく思想の修正を企てたと云ふ點に於て、私は轉向を正當とするものであり、寧ろその遲かりしを嘆するものである。今次の轉向は日本に於けるマルキシズムが自己の足の上に立つに至つたものとして、進步の道程へ乘り出したものとして喜ぶものである。然しそれにも拘はらず、此の轉向が吾々から滿腔の快感を買ひえないのは何故かと云ふならば、轉向して把握した新しき內容は、夙に他人のかくあるべきを豫言し、かくあるべきを指摘してゐたのであつた、それにも拘はらず是等の批判を一蹴して自說を固守して來て、今や漸く當然に來るべき所に落付いたに過ぎないので、新しき內容は待つにかほどの時間を必要とするものではなく、始めよりして明白なことであり、今日の轉向にして吾々を新に啓發すべき何物も認められないからである。夙に爲さるべかりし認識が、かくも時間を必要としたのは、彼等が他人の批評に傾聽する雅量なく、靜かに自己反省を試みる謙虛を缺いてゐたからである。是等の缺點にして矯められない限り、今後と云へども同一の誤謬を犯さないとは限らない。此の轉向は彼等が社會を指導する資格あ

るか否かに就て疑惑の念を抱かしめ、今後容易に之に追隨出來ないと云ふ不信を惹起したのは止むをえないと云はねばならない。而も是等の轉向者は、從來反對思想家に對して、單に思想を異にするが故に批判し反駁したと云ふのでなくて、敵に對して假借なき罵言罵倒を使用し盡し、之を反動と呼び資本家の走狗と稱し、敵を非難するに眞理に反すると云ふことを以てせずして、道德に反すると云ふことを以てさへしたのである、然るに一朝にして曾ての敵の思想に轉向したならば、曾て敵に對して加へた非難が今は自己の頭上に雨下するは、當然として甘受せねばなるまい、況んや非合法の實踐は幾多の青年子弟を導いて、その前途を誤りその家庭に悲劇を起さしめた。今や忽ちにして合法を唱へるのは、今後は人を誤たないと云ふ點に於て喜びうるに止まつて、曾て釀したる實害を遂に原狀に回復することは出來ないのである。非合法實踐の爲したる實害は、啻にかゝる個人的の損害のみではない、日本を化して今日の反動時代に至らしめた一因が、彼等の運動にあつたことを知るならば、その責任は決して輕微なものではない。人にして責任を解するならば、彼等は社會の前に叩頭陳謝せねばならないのである。要するに轉向は一進歩ではある、然し之ほどの進歩にかほどの時間と實害とを果して必要としたかどうか、問題は獲物と之が爲に支拂ひたる高價の犧牲との權衡の如何にある。

若しそれ轉向の內容に至つては、獄中よりの發表である爲に充分に委曲を盡してゐまいから、その內容を檢討するには今日はまだその時機とは云へない、然し吾々の理解する限りに於て大部分は贊成を躊躇しないが、必ずしも全部を是認することは出來ない。私が前に述べた日本の特殊的事情の中には、吾々は今後もそれが持續することを是認しうるものもあると共に、その中には單に現に存在することを認識する必要があるのみで、それを是認してよいとは云へないものもある。例へば日本の國際的地位より來る國民主義、ある場合の武力主義の如きは、之を充分に論評するには別に一文を草する必要があり、贊否何れにしても幾多說明の迂餘曲折がなければならないが、決して一括的に肯定し是認しうるものではない。又日本の全體主義も之を峻嚴なる批判の俎上に置くべきもので、全體と云ふ觀念上の概念を以て全體の中に行はれつゝある階級の對立や個人の衝突の事實を掩蔽すべきではなく、又全體の名に於て、爲さるべき改革を阻止する保守的役割を演出せしめてはならない。吾々は全體主義をその儘に是認すべきではなく、寧ろ之を神聖不可侵の聖壇より引き下して、價値の所在を全體より個に置くべきで

あると思ふ。然るに轉向者は從來日本の特殊的事情を無視してゐた極端より、今や反對に特殊的事情の一切を是認して、無批判的に之に適從した形跡がある。彼等の爲すべきは、特殊的事情の一々を批判檢討して之に適從すべきとすべからざるものとを整理すべきであつた。今一々轉向內容の細評を試みないが、日本第一主義と云ひ、日本民族の優秀性とその特殊的使命と云ひ、日臺鮮の勞働者の結合と云ひ、更に小ブル、インテリゲンツィアの排除の如き、何れも過ぎたるは尙及ばざるが如しとの感なきをえない。曾て彼等をして共產主義を絕對的に信奉せしめた彼の無批判性は、今やその轉向に就て再び姿を現はしてはゐないか。誤りの弊はそれが誤れることのみに非ずして、他の誤りを誘發することに在る。私は此の轉向を一瞥して、餘りに特殊的事情に阿附追從した爲に、他日再轉向の危險性がその中に伏在すると觀測するものである。

轉向者は轉向が單に列擧された諸點の轉向に止まつて、マルキシズムの根本原理たる世界觀にまで影響を及ぼすとは考へてゐないやうであるが、果して兩者は無交涉に放置されうるであらうか。例へば國民主義を唱へる時にマルキシズムの階級國家觀や國民階級分裂論は拋棄されてゐる譯であるが、マルクス、エンゲルスの階級國家觀は、人間を利己的なものだとする彼等の快樂主義の人間觀を受容する限り、當然に來るべき論理的歸結でなければならない。階級國家觀を排除することは、此の人間觀の排除とならざるをえないが、若し人間が自己の利益の爲に動かずして、自利を犧牲として正しきことの爲に動きうるものとせば、正しきことゝ云ふ概念はマルキシズムの模寫的認識論よりしていかにして導出しうるか、又彼の人間觀を排除するならば、意識形態は生產關係により決定されると云ふ唯物史觀の命題は成立しなくなる、何となれば人間が利己的なるが故に意識形態は自己の生產關係に有利なるべく決定されると說明することから唯物史觀の命題が成立しうるからである。かく階級國家觀を排除することの當然の結果は、マルキシズムの認識論を排除して唯物史觀の排除と云ふことゝなる、之がマルキシズムの世界觀の崩壞でなくて何であらう。今一つ他の例を引くならば、轉向者は非合法運動を改めて合法運動を採ると聲明するが、此の轉向が一時の權變であると云ふならば別であるが、若し之が眞理であるとの確信に基くならば、次に起るべき問題はマルキシズムの世界觀のどこから合法性を必然ならしめる命令が導き出されるかと云ふことである。所謂合法運動とは畢竟議

會主義を是認すると云ふことの外に考へられないが、議會主義は民衆の同意を俟つてのみ社會の變革は爲さるべきだとの主張の上に立ち、社會組織は民衆の意識の上にのみ存續する、故に意識の變革なくして組織の變革が爲されやうとも、その變革は恒久的なりえないと云ふ前提の上に立脚するのである。然しマルキシズムの世界觀によれば意識の獨自性を否定し、意識は存在によつて決定されると云ふのであるから、存在の變化なくして意識の變化はありえないので、存在を意識に依存せしめ、意識の變化を存在の變化の前提とする議會主義は、正にマルキシズムと正面的に對立するものでなくてはならない。然るにマルキシズムの世界觀に觸れることなしに、合法性を主張するならば、必然的に聯關あるべき兩者を矛盾の儘に放任すると云ふ理論的破綻を犯すことゝならう、又若し最後の歸結にまで論理を追窮するならば、轉向者はマルキシズムの世界觀を否定して、遂に理想主義の世界觀を採らざるをえないであらう。共產主義は行き詰つて轉向するの止むなきに至り、革命主義を拋棄して議會主義を採つた。やがて議會主義を通じて世界觀を理想主義に求むるの外なきに至るか。黎明の來ることは遲い、然し徐々として日本の思想界に黎明は來りつゝある。

## （六）結　論

以上數節に於て私は、露西亞の共產主義が當初とは似もつかぬ形態にまで變化したこと、コミンテルンも亦成立當時とは全く異る目的に使用されつゝあること、西歐各國に於ける共產黨がコミンテルン本部に對して不信の念を增し、その指令に批判的になつて來たこと、各國共產黨が民衆の支持を失ひて沒落に瀕し、あるものは社會民主黨に復歸し、あるものは共產主義の內容を修正しつゝあること、此の世界的現象の一部として最近に日本の共產主義者にも轉向の續出して來たことを說いた。

然らばコミンテルンの將來は如何。世界革命を指導せんとする成立當初の意圖は夙に拋棄されたが、將來も亦到底かゝる意圖を實行しえまい。それは既に各國共產黨を結合する弛緩した紐帶でしかありえないし、それ以上に各支部を强制せんとするも、支部は既に從前の如き服從を甘受しまい。若しそれが存續するとしても、恰も大戰以前に於ける第二インターナシヨナルが持てると似た程度の國際的結合に止まるであらう、況んや各國共產黨にして解消せばコミン

テルンの必要は當然に消滅するし、各共產黨にして轉向して社會民主黨に接近すれば、早晩コミンテルンは第二インターナショナルと提携し、或は之と合併するかも知れない。現今既にコミンテルンと第二インターナショナルとの提携は至る處に話題となりつゝあり、既に一部的には實現された所さへも存在するのである。かくて十餘年前世界を震動せしめたコミンテルンが今や獨自の存在價値を失ひつゝあることは、打消しえざる事實である。

各國內に於ける共產黨の運命は果して如何。共產主義にして各國の事情に適合せざる幾多の理論を包含する以上、共產黨は徐々として勢力を減少し、無視しうべき少數黨としてしか殘存しまい。若し此の運命を免れんと欲するならば、共產主義の內容を修正して、社會民主主義に接近するか或はそれに合併するの外はあるまい。かくて歐洲大戰前に社會民主黨の中に在つて、その後に之より脫退したる共產黨は、十數年の波瀾曲折の後に、元の古巢に舞ひ戻ると云ふ結末に終るだらう。だが共產黨が主義の內容を修正して獨立の黨として存續しようとも、或は社會民主黨に復歸しようとも、共產主義者の轉向はそれを以て萬事片付いたものとは云へない。前項の日本共產主義の轉向に就て述べたやうに、轉向は遡つてマルキシズムの根本原理を再檢討すべき課題に觸れてゐるのである。若し轉向者がマルキシズムの世界觀と轉向內容とを、論理的矛盾なき渾然たる一體系にまで整理しない限り、連絡なき二頭の馬を各々異る方向に驅る奔放に陷るの外はあるまい。獨逸社會民主黨は十九世紀末より二十世紀に亙りて、修正主義を採用しながら、マルキシズムの生くべき部分と死ぬべき部分との整理を怠り、夫々を矛盾に於て分裂に於て放任して置いた。獨逸社會民主黨が一時共產主義より缺陷を突かれ、現在に於ても頹廢萎靡して振はざるは、その原因實に此の理論的不統一に在る。共產黨にして之と同一の誤謬を犯さんか、社會民主黨の轍を踏むものとして、後人をして徒に嘆息せしめるだらう。

たとへ共產黨は沒落するとも、少數ながら黨としては存續しえないことはないし、又社會民主黨に復歸するとしても、黨中の左翼として反幹部派の一群を形成しうるだらう、蓋し社會に科學者の冷靜よりも藝術家の情熱を愛するものあり、不平と反抗と破壞とを喜ぶ性格の絕えない限り、共產主義はそれらを牽引する充分の魅力を持つからである。だが共產黨に牽引される是等の性格は、共產黨を構成する必要分子たると共に、凡そ黨としての結成を妨害する性格で

あるが故に、共產黨の構成要件が同時に共產主義の分裂內爭の條件として、黨の膨脹發展を阻止する役目を果すことは、誠に共產黨の負はされた悲劇的運命でなければならない。

もし世界第二の大戰が遠からざる時に始まるならば、共產黨にとつてはそれが一陽來復の時だらう、然し私は第二の大戰が容易に起ると思はないし、その戰爭に革命が起らうとも、それは唯革命たるに止まつて、共產主義の革命ではない、革命は共產主義を利用し共產黨は革命を利用するだらうが、やがて露西亞革命後の共產主義の如くに、漸次共產主義的要素を整理することゝなるだらう。資本主義の根蔕は案外に强固であり、社會主義の實現は決して急速に望まれない。徒に架空の希望を描いて自己陶醉に耽ることなしに、前途の多難を冷靜に認識して、健實の道程を踏み歩む決意のみが社會思想家にとつて最も必要でなければならない。

昭和九年三月四月五月號「社會政策時報」

# (四) 英國總選擧の批判

## (一) 緒言

二年前一九二九年の五月末の總選擧で、最大多數黨となつた英國勞働黨は、去る十月廿八日の總選擧で全議員の一割にも滿たないと云ふ悲慘な敗北を嘗めた。保守黨が大勝し自由黨が稍勢力を挽回し勞働黨が大敗したことは、數字の上で否定し難い事實である。然し此の數字は果して何を意味してゐるのか、勞働黨は往くべき正道を踏んで敗北したのか、ラムゼー・マクドーナルドは果して社會主義を裏切つたのか。新開雜誌に現はれた多くの人の批判に、必ずしも私は同意しえない、何故なれば之等の問題に答へることは、しかく容易なことではなく、解答はかなりの曲折した說明を必要とするからである。のみならず英國の總選擧の結果は、單に英國と云ふ國に就て何事かを語るだけではない、政治的自覺の最も發達した民衆を持ち、考へうる最高の言論の自由を惠まれ、買收その他の不正行爲の稀有である此の國の總選擧は、いかな

る國にも妥當する普遍的の暗示を投ずる、社會主義の前途は果して樂觀的であるか否か、社會主義と國家主義とは、いかなる交渉を持つものであらうか。今度の總選擧は此の二問を提出して、社會主義者の注意を喚起してゐる。英國總選擧を批判すると共に此の選擧の與へる普遍的意味を把握することが私が本文の目的とする所である。

## (二) 勞働黨の本質

英國勞働黨の發達は驚くべき短期間に爲されてゐる。「勞働代表委員會」なる名目の下に、保守自由兩黨に屬せざる政黨が成立したのは、一九〇〇年であり、それが「勞働黨」といふ現名に改められたのは、一九〇六年である。その成立以來の成績を擧げれば次の如くである。

| 選擧年 | 議員數 | 投票數 |
|---|---|---|
| 一九〇〇 | 二 | 六二、六九八 |
| 一九〇六 | 二九 | 三二三、一九五 |
| 一九一〇(一月) | 四〇 | 五〇五、六九〇 |
| 同　(十二月) | 四二 | 三七〇、八〇二 |
| 一九一八 | 五七 | 二、二四四、九四五 |
| 一九二二 | 一四二 | 四、二三六、七三三 |
| 一九二三 | 一九一 | 四、三四八、三七九 |
| 一九二四 | 一五一 | 五、四八七、六二〇 |
| 一九二九 | 二八七 | 八、三六二、五九四 |

勞働黨は始めよりして社會主義政黨ではなかつた。成立當時社會主義の政綱を揭げさせることとは黨の構成要素であつた「獨立勞働協會」「フェービアン協會」等の社會主義者團體の熱望であつたが、それは實現されなかつた。然し一九一八年大戰終了の前に黨規を改正し、第三條第四項に「生產手段の共同所有と、而して各產業又は勤務の民主的經營及び管理」を挿入することにより、始めて社會主義政黨たることを鮮明にした。それと共に差當り實現すべき綱領を說明した小冊子「勞働と新社會秩序」("Labour and the New Social Order") に於て、社會主義政策を標榜し、一九二八年の小冊子「勞働と國民」("Labour and the Nation") の序文に於てマクドーナルドは、「勞働黨は他の政黨と異り、惡制度內に於ける破綻の彌縫を事とするものでなく、資本主義を社會主義に變革することを任とする」と云つた。

かくして此の社會主義政黨は、一九二四年第一次内閣を組織し、更に一九二九年第二次内閣を組織した。何れも單獨で議會の絶對多數を占めてゐるのではないから、自由黨の援助に依らざるをえなかつた、從つて社會主義政策を實現することは不可能であつた。然し世界の資本主義國に於て、最も健實なる社會主義政黨として、而して政權を獨力で把握しうる可能性に富む社會主義政黨として、その存在と發達とは世界の勞働運動界に於ける注目すべき對象であつた。

英國勞働黨は社會主義政黨である、然しそれはマルキシズムを採る政黨ではない、社會主義は即ちマルキシズムだと速斷する我國に於て、社會主義政黨ではあるがマルキシズムを採らないと云ふことが、一見理解に苦しむやうであるが、勞働黨は生產手段の共同所有と共同經營とを主張する點に於て、眞正の社會主義政黨である、而してマルキシズムとは次の四點に於て相違がある。第一に勞働黨はその世界觀に於て、マルキシズムの如く唯物辨證法の哲學を採らずして、理想主義の哲學を採る。第二にマルキシズムの如くに勞働價値說を採らないで、リカアドーの地代論を擴張發展せしめて、資本主義の機構を說明する。第三に社會主義を實現する戰術として暴力革命主義を採らないで議會主義を採る。第四に社會主義實現の社會に於て、無產者獨裁を行使しないで、言論自由主義を主張する(註)。此の四點に於て勞働黨はマルキシズムの政黨殊に共產黨と截然と區別され、マルキシズムと對立するイデオロギーを持つ社會主義政黨として、世界の社會主義界に於て二大陣營を構成する。

(註) 此の差異の詳述は拙著「英國勞働黨のイデオロギー」(千倉書房發行) に讓る。

## (三) 第二次勞働黨内閣の崩壞

第二次勞働黨内閣の成立した當時に於て、英國政界の分野は次の如くであつた。

| | 議員數 | 投票數 |
|---|---|---|
| 勞働黨 | 二八七 | 八、三六二、五九四 |
| 保守黨 | 二六〇 | 八、六六四、二四三 |
| 自由黨 | 五九 | 五、三〇〇、九四七 |
| 共產黨 | 〇 | 五〇、六二二 |
| その他 | 九 | 二六〇、七一一 |
| 合計 | 六一五 | 二二、六三九、一一七 |

(有權者總數二八、八四四、七九六)

此の數字に於て注目すべきことは、議員數に於て勞働黨は第一位を占めるが投票數に於て保守黨に劣ることである、又勞働黨は最大多數黨ではあるが絶對多數三百八名には廿一名を不足してゐる、從つて自由黨五十九名に依賴し自由黨の許す限りに於てのみ政策を實現しうることである。自由黨首領ロイド・ジョージは豪語して云ふ、此の內閣は勞働黨內閣に非ずして自由黨內閣である、何となれば自由黨の信條の限りに於て彼等を援助するが、彼等が自由黨と兩立しえざる時は、直に內閣を崩壞せしめるのだと。

廿九年の總選擧は失業問題の解決を爭點として行はれた、從つて新內閣は此の問題を處理する責任を負はされてゐた。然し資本主義の存續を片手に提げ、失業問題の根本的解決を他の手に持つことは、兩立し得ざる矛盾である。而して資本主義を變革することは、自由黨に依存する勞働黨には不可能である。從つて勞働黨は社會主義政黨なるに拘はらず、その理想とは異る彌縫的對策を此の問題の爲に講ずるの外止むをえなかつた。だがそれに甘んずるとしても、更に彼等は不幸であつた、一九二九年秋米國を見舞つた不況は英國にも波及して、產業の不振は失業者の增加を示して、一九二九年六月に百十五萬千百六十七人であつた失業者は、今年七月には二百七十一萬三千三百五十人に激增した。それと共に失業者に對する手當も膨脹し、國庫と雇主と勞働者との三者の掛金より成る保險基金では支拂が不可能となり、國庫から臨時借入れするの止むなきに至り、借入限度は次の如くに增額されて來た。

| | | |
|---|---|---|
| 一九三〇年 | 三月 | 五〇百萬磅 |
| 同 | 八月 | 六〇 |
| 同 | 十二月 | 七〇 |
| 一九三一年 | 三月 | 九〇 |
| 同 | 七月 | 一一五 |

借入金の增額は啻に國庫にとつて負擔であるのみでなく、借入金に對しては失業保險基金は國庫に利子を支拂はねばならないから、保險基金にとつても亦負擔である。こゝに於てマクドーナルド內閣は昨年十二月グレゴリーを委員長とする失業保險委員會を任命して、失業保險制度を調査せしめると共に、他方今年三月メーを委員長とする節約委員會を任命して、一般國費の整理を調査せしめた。此の兩委員會の報告は共に七月末から八月にかけて提出されたのであるが、失業保險委員會は失業者手當を減額すること、失業手當の受領者に制限を加へること、

保險料を引上げることの必要を結論し、節約委員會は一九三二年の豫算に於ける收支の不足額を千二百萬磅と概算し、その内九百六十五萬磅を經費の節約により、更にその内六百六十萬磅を失業保險費の整理に依るべしと云ふ結論に達した。兩委員會の調査の歸結は何れも勞働者階級の負擔に到達したのであるが、勞働黨の多數が此の對策を甘受しえないのは勿論で、彼等は失業手當の減額に對しては毫も讓歩を肯じない、歳入の不足は勞働者階級の犧牲に於て爲さるべきに非ずして、他の方法例へば資本家に對する課税增加によるべしと主張した。

之だけが係爭の論點であるならば、國庫の不足を資本家階級が負擔すべきか勞働者階級が負擔すべきかといふ論爭であり、更に勞働者の失業は彼等自身の責任であるか資本主義の責任であるかと云ふ論爭であり、資本主義と社會主義とのイデオロギーの定石的の對立に止まるのであるが、此の論爭に紛糾を與へその故に此の總選擧に特異の色彩を與へたのは、別個の問題が介入して來たからである。之に吾々は一瞥を投ずる必要がある。

英國は一九二〇年金の輸出を禁止したが、一九二五年に輸出禁止を解いて金本位制に復歸した。然し英國が正貨の流出に放任しうる狀勢は永く繼續しなかつた。蓋し英國は由來貿易の輸入超過國である。が、それが大戰後に於て更に增加した。戰前即ち一九一三年に於ける入超は一億三千三百九十萬磅であつたのが、一九二六年に於て四億六千二百八十萬磅となり、一九二九年に三億八千百七十萬磅、昨年に於て三億八千七百三十萬磅となつた。此の輸入超過はそれだけ正貨を流出せしめる譯であるが、その入超を補充したのは貿易外の收入即ち海外投下資本の利子と海運の發達による運賃である。此の兩者により僅かに正貨の流出を阻止しえたに止まつて正貨を增加せしめるに至らない。此の狀勢に對して今年春の獨逸恐慌が起つた。英國の資金は獨逸に固定してゐる、之を英國は獨逸より引上げようとはしなかつた。英國が獨逸恐慌より來る影響を免れまいといふ不安と、英國の獨逸に對する援助とが、佛蘭西をして倫敦に在る短期資金の引上げを行はしめた。その渦中に失業保險委員會と節約委員會との報告が公表され、豫算の不足の驚くべき額に及ぶこと、之を補塡する方法に就て、勞働黨が頑として讓歩しないことが、一層外國の資本家をして英國の經濟的基礎に不安を感ぜしめた。政界の不安と政變の豫測とは英國資本家をして、資本を海外に逃避せしめさへした。七月中旬から二箇月の間に外資が倫敦から引上げられた額は二億磅に及び、英國の保有する正貨は一億三千萬磅以下に降ら

んとする形勢に陷つた。かくて磅の價値は下落し、磅貨は國際通貨たる役割から脱落し、倫敦が國際金融の中心たる地位は、重大な脅威を受けるに至つた。之が今年八月に於ける英國政治界の直面した狀勢である。

こゝに於て曩に國庫の不足を資本家階級が負擔すべきか勞働者階級が負擔すべきかと云ふ單純直截な形態に於て現はれた對立は、異る形態の對立に轉化せざるをえなくなつた。即ち英國は財政金融上の危機に直面しつゝある、その危機の一因は國庫の不足の補塡が難澁しつゝあることである、それは勞働者が失業手當の減額を讓歩しないからであると云ふ論理が推し進められ、それを逆に云へば、勞働者階級が失業手當の減額を讓歩しないから、國庫の不足は補塡されない、それが補塡されないから外資が引上げられ、英國は經濟國難の危機に當面したといふこととなる。英國の民衆に投ぜられた課題は、經濟國難の危機を救ふか、失業手當の減額を拒否するか、何れかの二者擇一であつた。英國の民衆に投ぜらるべき課題は、本當は此の形式の對立ではない筈である、然しかゝる形式の對立に問題を轉化せしめたことが、刻々に起る狀勢の推移であつた。此の對立に於て失業手當の減額に反對することは、勞働黨にとつて此の上なき不利であつた。

首相マクドーナルドと藏相スノーデンと自治領相トーマスとは、失業手當の減額を一時甘受すると共に同時に資本家に對する課稅を增加し、此の危機を通過しようとした。だが勞働黨の大多數は遂にその主張を曲げなかつた。かくして八月下旬第二次勞働黨內閣は瓦解し、八月廿四日マクドーナルドを首相とする協力內閣は成立し、スノーデンとトーマスとが之に加はり、少數の勞働黨員之を支持し、保守黨、自由黨は夫々閣僚を出して政府黨となつた。多年マクドーナルドを首領とした勞働黨は彼から別離してヘンダーソンを首領とする反對黨となり、マクドーナルドは社會主義と勞働黨とを裏切る不信者として汚辱の烙印を刻された。

## (四)　國民內閣の成立

それではマクドーナルドは何故に、多年の政友と別離して協力內閣を組織したのか。マクドーナルドの勞働黨に於ける地位は、ボルドウィンの保守黨に、ロイド・ジョージの自由黨に於けると同じではない。彼は一九〇〇年勞働黨の成立するや首領ケヤー・ハーディーを助けて幹事

長となり、一九〇六年には代はつて首領となり、大戰開始に際して非戰論を唱へた爲に首領を辭したが、一九二二年から再び首領の地位を占め、再度の勞働黨内閣の首班であつた。勞働黨の誕生から成長に至るまで、彼と勞働黨とは分離することが不可能であるほど二にして一であつた。啻にそれだけではない、彼は社會主義者として絶えず勞働黨を社會主義政黨たらしめることに努力し、勞働黨の中樞を占める勞働組合派が動もすれば資本主義内に於ける勞働條件の向上のみを心掛けて、資本主義自體の變革を忘れるのを刺戟して、遂に一九一八年の黨規改正に至るまで、勞働黨を指導した主動勢力である。彼は爾來勞働黨のイデオロギーを代辯する思想家であつた。既成の信條を有する政黨の指導者でなしに、彼は勞働黨に自らのイデオロギーを印刻した思想上の指導者であつた。更に彼は勞働黨首領として成功しつゝ、今や一政黨の首領でなしに、保守自由勞働の三黨を通じて、最も國民の信望を有する國民的政治家であり、その重望は英國を越えて歐洲と米國とに及び、英國は彼を代表者とすることにより、他の何人よりも英國に對する信頼を保持することが出來た。勞働黨は彼を首領とすることにより、政黨そのものが持つより以上の勢力を持つことが出來た。かゝる關係に在る勞働黨は何故彼と別れねばならなかつたか、彼は何故勞働黨を捨てねばならなかつたか。

思ふに彼は内閣首相として今年の經濟危機に直面するまで、國政を管理する衝に在つた。たとへいかに彼が努力したとしても、危機の襲來は避けえなかつたであらう。然し危機が到來した直前に内閣首班に在つた彼は、此の危機を前にして野に下ることは、彼れの責任心が許さなかつたのであらう。危機を通過した後に於て社會主義政策の實施に着手しようとも、危機のみは一先づ通過せねばならぬと考へたらう。のみならず彼にして新内閣を組織しなければ、保守黨は後繼内閣を引受けることを拒否した。自由黨は彼を首相とするに非ずんば、保守黨と協力することを承知しなかつた。こゝに於て彼が新内閣組織を拒否することは、後繼内閣を不成立ならしめることであり、政界をして望みなき混亂に驅ることであり、彼れの個人的信望のみがよく保守自由兩黨を携へて、危機の通過を可能ならしめた。彼れの進退は彼一人の進退に止まらずして、英國政界を左右する重要性を持つてゐた、之が彼をして協力内閣の組織を受諾せしめた理由の一つであらう。

次に彼は勞働黨の主張に好意を缺いてはゐなかつたらう、然し勞働黨が失業手當減額を拒否

するには、勞働黨が絶對多數を占めてゐない爲に成功しえない。それでは總選擧を行ふことが可能であるかといふに、眼前の緊急狀態は火急の處置を必要とするのでそれを許さない。假りに總選擧を行ふとしても、勞働黨が絶對多數を獲得することは絶望であり、もしそれが可能であるとしても、上院は一回は必ず勞働黨の法案を否決するだらう。かくして勞働黨はいかにするも自黨の主張を貫徹する路を持たないのみならず、若し保守黨が新内閣を組織するとせば、自由黨は少くとも失業手當減額を實行することに就ては保守黨を助け、更に資本家の課税を增加することは保守黨と共に反對し、勞働黨に更に以上の犧牲を要求するかも知れない。こゝに於て若しマクドーナルドがスノーデンと共に新内閣に在るならば、勞働者階級の犧牲を失業手當の減額の一點のみに阻止し、資本家階級にも犧牲を要求することが出來るだらう。彼等が野に下るも勞働黨の不利は實現を阻止しえない、新内閣に在らば不利の累增を阻止しうる。かゝる利害の考慮が彼を動かしたと解釋しえないではない。だが最大の原因は思ふに、彼れの社會主義が修正されて來たことに在らう。彼は第二次内閣中に於て自己の所屬社會主義團體なる「獨立勞働協會」の「生活賃銀」を標榜する社會主義政策を拒否して、多年首領たりし同協會を脱退した。二回の内閣首相の經驗は、善き意味に於ては勞働黨の政治家から國民的の政治家たるべく變化せしめ、悪しき意味に於ては社會主義の信條に疑惑を感ぜしめたのではないか。之に就て彼れの思想上の推移を辿るべき資料を、不幸にして私は持ち合さないが、意識的にか無意識的にか彼れの思想的變化が、始めよりして失業手當の減額が妥當なりと云ふ判斷を支へたのであらうと思ふ。玆に後述するが如く、彼れの行徑に對する批判の餘地がある。

協力内閣は九月八日新議會を召集し、十日藏相スノーデンは待たれた豫算演説を爲した、それに依れば今年度と明年度との歳入不足は、次の如くに補塡しようと云ふのであつた。

| | |
|---|---|
| 本年度歳入不足見積額 | 七四、七〇〇、〇〇〇磅 |
| 右に對する補塡額 | |
| 經費節約 | 七六、二〇〇、〇〇〇 |
| 減債基金減額 | 二二、〇〇〇、〇〇〇 |
| 新内地税 | 一三、七〇〇、〇〇〇 |
| 關税消費税 | 二九、〇〇〇、〇〇〇 |
| 剩餘額 | 一一、五〇〇、〇〇〇 |
| 明年度歳入不足見積額 | 一、五〇〇、〇〇〇 |
| | 一七、〇〇〇、〇〇〇 |

右に對する補塡額

| | |
|---|---|
| 經費節約 | 一七、一五〇、〇〇〇 |
| 減債基金減額 | 七、〇〇〇、〇〇〇 |
| 新稅 | 二、〇〇〇、〇〇〇 |
| | 八、一五〇、〇〇〇 |
| 剩餘額 | 一五〇、〇〇〇 |

本年度の補塡方法の中の經費節約には、官吏俸給の減額を含むが、大部分は失業手當の一割減と保險料の增額である。新內地稅と減債基金の減額とは、資本家階級の犧牲とならないではないが、勞働者が生活最低水準を引下げられたのと、資本家の課稅による犧牲とは同日に論ずることは出來ない。スノーデンの豫算はたとへ保守黨や自由黨の作るであらう豫算とは異つてゐようとも、勞働者の犧牲を要求する原理に於ては異らない、此に於て勞働黨は豫定の如く反對し、而して政府黨の多數の爲に敗北し、此の豫算案は成立した。

財政の危機は通過しえなかつた、正貨の流出は止まないので、遂に九月卅日英國の金塊兌換停止を行ひ、遂に金本位制を放擲した。金本位制實施の祖國はその名譽を捨てると共に英國が國際金融の中心的地位は去つた。問題はいつ此の地位を再び回復しうるかに在つた。政府は政權を確立せんが爲に、十月七日議會を解散して民意を問ふことにした。

## （五）政界の新分野

議會解散當時に於ける英國政界こそ、誠に混沌そのものであつた。保守黨は在野二年の間に多少の動搖があり、ボルドウィンの首領の地位は一度ならず危險に瀕したが、幸にして解散の前までに黨內の不安を除去することに成功してゐた。然し勞働黨は之より先きモズリー一派の獨裁內閣派の脫黨をみたのみならず、勞働黨內閣瓦解の當時に政府黨たる國民勞働黨と從來の勞働黨とに分裂した。議員の數に於てこそ兩者の間は比較にならない差等があるが、その質に於てはその數と比例しえなかつた。國民勞働黨に屬するマクドーナルドとスノーデンとトーマスとは、勞働黨を英國の內と外とに代表した有力な指導者であつた。ジェー・エッチ・トーマスは必ずしも社會主義者であるかどうか明言しえないほど思想上の立場は漠然としてゐる、のみならず彼は英帝國の結束を力說して來た正銘正心の帝國主義者であり、此の點が彼を自治領大

臣たるに資格付けると共に、一部潔癖なる社會主義者をして常に眉を顰めしめた。だが彼は鐵道從業員組合の代表者であり、產業的組合の典型として炭坑夫組合と兩々相竝んで、英國勞働運動界に於ける大勢力たる鐵道從業員組合は、彼れの下に永く强固な結束を維持して來た。彼により勞働黨は組合運動の大立物を失つた。マクドーナルドとスノーデンが勞働黨に於ける地位はトーマスのそれよりも更に重要である。勞働黨の兩氏か兩氏の勞働黨か、主客容易に判別し兼ねるほどに、彼等は勞働黨育成の恩人であつた。殊に進步的民衆の記憶に今も鮮かに殘るのは、歐洲大戰開始當時に於ける此の兩名の非戰論に對する殉情であつた。彼等は「獨立勞働協會」の代表者として、協會の多數と共に英國の參戰を非難し、之が爲に民衆の激怒を買ひ黨の排斥を受けることさへ甘受した。彼等がその操守に於て缺ける所あるとは云ひ切れない。之が協力內閣に對する批判を鈍らせ反省を難からしめたことは疑へない。

之に反して勞働黨に彼等に匹敵する何人の領袖があつたか、三人を除く凡ての前閣僚は勞働黨に殘つたが、政治界に水準を拔く代表者は遂に見出しえないのである。ヘンダーソン、クラインス始め領袖の殆ど凡ては勞働者階級の出身であり、勞働組合の幹部から擡頭した人々である。なるほど彼等は勞働者の卒伍（ワンシ エンド ファイル）との連絡を持つ、然しその人格の强さに於てその識見の高邁さに於てその政治的技能に於て、全國民の信任を博するには未だ足らない。首領ヘンダーソンは穩健着實を以て名をえて來た、彼がルビコンの河を渡る時は安全此の上ないことを證明するとさへ思はれた、此の首領を戴く勞働黨が急進黨と聯想されるには埋め難い間隙がある。況んや大戰開始に際して之等勞働黨の領袖はマクドーナルド、スノーデン等の非戰論を排斥して、逸早く大戰に參加して所謂國難の征服に努力したのである。若しあの戰爭を以て帝國主義戰爭と云ふならば、彼等は帝國主義者であつて、マクドーナルド、スノーデンは反帝國主義者であつた。若し國難に際しては協力することを是とするならば、今こそ協力內閣に反對する彼等は元來協力內閣主義者であり戰時內閣の閣僚であつた。かくて國民は分裂せる勞働黨を眺めて、その人材の比較に於て、何れが眞正の本體であるかの取捨に迷はざるをえなかつたらう。

更に自由黨に視點を轉ぜんか、玆にも勞働黨に劣らざる分裂と混亂とがある。自由黨は三派に分裂した、一はサー・ジョン・サイモンを中心とする一派であり、一はロイド・ジョージを首

領とするもの、他はサー・ハーバート・サミュエルを中心とするものである。サイモン派は國民自由黨として保守黨に近づき、サミュエル派は中間に在つて共に政府黨であるが、ロイド・ジョージ派は勞働黨に近づき政府反對黨に立つた。歐洲戰爭中に於てアスクィスを首領とする「獨立自由黨」は自由黨の左翼として、ロイド・ジョージ內閣に反對し、ロイド・ジョージは「國民自由黨」を組織して右翼自由黨として保守黨と提携してゐた。曩に「獨立自由黨」の領袖としてアスクィスを援助したサー・ジョン・サイモンは今は「國民自由黨」を組織して右翼を代表して保守黨に近く、以前に「國民自由黨」を率ゐたロイド・ジョージは今は左翼自由黨として勞働黨に近づくとは政界の分野の變轉に人は感慨なきをえまい。かゝる複雜な離合集散を演ぜしめつゝ、英國政界は總選擧に臨んだ。

政府黨は綱領を統一するには數黨の集合であるだけ困難があつた、こゝに於て非常緊急に處すべき「醫者への委任」を與へることを國民に要求した。勞働黨はスカーボローの大會に於て選擧に臨む綱領を決定したが、その中に重要產業の國有とか、金融信用貿易制度の國家管理とかの項目がある。勞働黨がかゝる社會主義的綱領を總選擧に鮮明に揭げたのは、寧ろ異例であるが之は勞働黨がかゝる綱領を提げるより外に反對黨たる存在の理由がないといふ殺急の必要からで、勞働黨が愼重に採用して板に付いた綱領とは考へられなかつた。かうして選擧は此の綱領彼の綱領に對する贊否を決すべく行はれたのではなくて、英國の經濟危機を救ふか失業手當の減額を拒否するかと云ふ對立を提出し、民衆はその何れを選ぶかの選擇に置かれた。此の對立は更に約言すれば「國民の利益」か「階級の利益」かの對立となり、民衆は何れかの二者擇一の地位に置かれた。而して十月廿八日行はれた總選擧は次の結果に於て、民衆の總意を表現した。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 保守黨 | 四七三名 | 勞働黨 | 五二名 |
| 自由黨 | 七〇 | ロイド・ジョージ派自由黨 | 四 |
| 國民勞働黨 | 一三 | 無所屬 | 一 |
| （政府黨總計 | 五五六） | （反對總計 | 五八） |

（外に何れにも屬せざる一名あつて總計六一五名となる）

## （六）總選擧の意味

然らば此の總選擧は何を語つてゐるのか。先づ何を語つてゐないのかといふことから語ることとしよう。

先づ此の選擧は保守黨の勝利ではない、なるほど形に於て保守黨は壓倒的の議員を獲得したが、民衆は保守黨の綱領に贊成したるが故に保守黨に投票したのではない。保守黨が政府黨なるが故に投票したのである、それは自由黨が政府黨なる限りに於て、勝利を占めたる事實に見ても明かである。從つて保守黨は政府黨に對する信任から反射的に利益を取得したので、之を以て英國が保守黨に壓倒的支持を與へたと見るは當らない。更によし保守黨の勝利だとしても、それは必ずしも普通に考へられる意味の保守主義の勝利ではない。英國の保守黨は他國に類例を見ない位の進歩的の政黨である。ヂスレリー以來彼等は勞働者階級の利益を保護する關心に於て決して自由黨に劣るものではなかつた。從つて之を以て保守主義が英國を支配したと速論することは許されない。又此の選擧は勞働黨の敗北に終つたが、必ずしもそれは急進主義の敗北ではない。なるほど勞働黨は社會主義的綱領を掲げたのではあるが、突嗟に掲げられたあの綱領は、急進主義を以て牽引する意味に於ても又不安を感ぜしめる意味に於ても、何れにも世人の注意を惹くの迚がなかつた。選擧は綱領の細目に就て行はれたのではないから、必ずしも勞働黨の社會主義が民衆の多數により拒否されたと見るべきではない。勿論後に述べるが如くに、結果に於て社會主義の敗北に歸着するのではあるが、それは推論の結果であつて、選擧の表面に表はれた數字が當然に急進主義の敗北を示すと判斷すべきではない。

次に此の選擧により獨裁主義が英國を支配したと考ふべきではない。成程マクドーナルドは「醫者への委任」を要求したに相違ない、然し變轉極まりなき歐洲の狀勢が、緊急の必要上かゝる委任を要求せしめたので、單に一時的の便宜に過ぎない。大戰當時ロイド・ジョージ內閣が實施したと同一に見るべきで、之を比較的長期に亙る獨裁政治への轉機と解釋するは當らない、戰爭遂行の任務が終了した後に、當正の狀勢に復歸したと同じやうに、日ならずしてかかる廣汎なる委任は終止するに相違ない。況んや獨裁主義とは通常の用語例に於ては、その開始の手續に於て革命を以て政權を掌握することを要件とする、然し此の選擧は何等の干涉も行はれずに、完全なる言論自由の下に、民衆の意志が表現されたのである、之を獨裁主義の勝利と見るは用語例に反する。從來の議會主義による政黨政治は、その定石を踏みはづしてはゐな

いのである。又此の選擧は自由貿易か保護貿易かを決定したのではない、なるほど保護貿易を主張する保守黨が勢力をえたことは、やがて保護貿易を實現せしめるかも知れない。然し係爭の論點は個々の問題に在つたのではないから、選擧が此の問題を直接決定したと見るべきではない。況んや自由貿易論は、十九世紀に於てこそ自由主義のイデオロギーの一構成要素を成し、その取捨は一つのイデオロギーの勝敗に關係したけれども、今日に於て貿易が自由か保護かは、單に技術的に利害の打算に於てのみ決せらるべき問題であつて、主義や原理に關係する重要性を所持してはゐないのである。

それでは此の選擧は何を語つてゐるのか。第一にそれは人物に對する信任を語つてゐる。平和な時代に於てこそ選擧民は、此の政黨か此の綱領かを判別して、投票を決定するだらう。然し今日の如く世界の狀勢が混沌として、觀測を許さざる不安裡に在る時は、政黨又は綱領に投票するよりも、信賴しうべき人物を選擇して、それに國政を委任するの外はない。危急の場合に於て民衆の仰望するは、智識に非ずイデオロギーでもなく融通のきかない綱領でもない、實に信任しうる人格に在る。固より人格とは單に人の良さを意味するのではない、寧ろ人間の強固と高邁の識見と政治家的指導力とを內容とするのであるが、之等を渾然として調和した人間を求めて之に依り之に賴らんとする。而してかゝる人格を政界に求めて、マクドーナルドほどに拔群の地位を持つものはない。保守黨のボルドウィンやネヴィール・チェーンバーレーンや自由黨のサミュエルの如き稍之に近きものではあるが、到底マクドーナルドに及ばない、況んや勞働黨の領袖は及ばざる頗る遠きものがある。政府黨の勝利はマクドーナルド個人の勝利であり、それは非常の場合に於ける人格の勝利である。

次に此の選擧の語ることは、民衆が多數黨を支持して少數黨を捨てたと云ふことである。之は英國民が事大主義に囚はれて多數黨に阿附したと云ふことではない。政府黨は多數であり勞働黨は少數であつた、而してマクドーナルドの人格は、政府黨を敗北させはしまいと云ふ觀測が爲されたらう。非常の場合には安定が望まれる、不安なき政界の分野を構成することが必要である。選擧の結果によつてこそ何れが多數黨になるかが決せられるのではあるが、何れが多數黨になるかと云ふ觀測が、此の場合には選擧民の心理を決定する。たとへ勞働黨がかくの如き慘敗をするとは豫想されなかつたとは云へ、同黨が絕對多數黨となるとは豫想されない。と

こに於て安定を第一とする心理は多數黨となる希望性の多い政府黨に壓倒的支持を與へたのであらう。

最後に國民は「國民的利益」を採つて「階級的利益」を捨てたと云ふことである。此の選擧が國家の危機を救ふか失業手當を維持するかと云ふ對立に於て行はれ、國家か階級か、國民的利益か階級的利益かの選擇を民衆に要請したことは前に述べた。之に對して民衆は國家と國民とに「然り」と答へ、階級と階級的利益とに「否」と答へたのである。かゝる對立の形式に於て決定を要請したならば、大多數の民衆は何れの國に於ても、此の選擧の語るが如き結果を現出するの外はなからう。唯問題はかゝる對立の形式に於て當局の問題を處理せしめるのが妥當であつたか、かゝる形式で提出された問題を更に檢討することなしに單純に受容して、國家と國民との名に壓倒的支持を與へたことが正當であつたか否かに在る。此のことを語ることに此の選擧の批判の核心が存在する、然し吾々は之を述べる前に今一つ語るべき事がある、それは選擧後の政界將來の豫測である。

## （七）政界の將來の觀測

將來を觀測することは困難である、だが私の可能の限りに於て敢て大膽に之を試みよう。

先づ保守黨はどうなるか、保守黨は政府黨なるが故又マクドーナルド內閣なるが故にと云ふ理由で、思ひがけない反射的利益をえた。由來「國家」又は「國民」といふ名目を以て民衆に訴へることは保守黨の傳統であるが、保守黨が「國家」や「國民」を唱へる時に、保守黨自身が唱へたのでは民衆が胸躍らない。民衆はその名に隱れて保守黨の利益が圖られることを疑惑するからである、從つて保守黨は常に自由黨又は勞働黨の政治家を借りなければ、「國家」や「國民」の標語に民衆を動かしえない。大戰當時には自由黨のロイド・ジョージを借り、今度は勞働黨のマクドーナルドを借りた。而してそれらの人の蔭に隱れて自黨の膨脹に成功した。若し所謂國家の危機が通過すれば、そこで始めて保守黨は自己の姿を前面に現出する。それがいつであるかは危機の通過の時機に係る譯であるが、一九二二年保守黨中の「不死身派」がロイド・ジョージを驅逐してボーナー・ロー內閣を組織せしめたやうに、早晩マクドーナルドと保守

黨とは分離して、保守黨が內閣を作る時が來るだらう、そして保護貿易その他を實施するのではないかと思ふ。

勞働黨は確かに大敗したけれども、それは當正の勞働黨が大敗したのではなくて、「國家」か「階級」か「國民的利益」か「階級的利益」かといふ對立を提出され、危急の際に階級に膠着して國家と國民とを忘却する非愛國者だと云ふ汚名の下に大敗したのである。然し平靜に事態を反省する餘裕が來るならば、此の對立が決して正當でなかつたことを國民は納得するだらう。一九〇〇年の南阿戰爭當時の自由黨の大敗、一九一八年の自由黨の大敗は、その次によく償はれてゐる。此の大敗は非常臨時の大敗に過ぎないので、勞働黨の前途を卜せしめるものではない。殊に此の選擧に於てさへ勞働黨の投票は六百萬票を越えてゐて、一九二四年に百五十一名をえた時よりも投票に於ては多いのである。票數の比例から云へば優に二百名を獲得しうる筈である。唯比例代表制を採らない爲にかゝる大敗を受けたに止まる。今勞働黨に投票した六百萬は永久に勞働黨を離れない確固不拔の黨員である、之を所有することは政黨として非常な財產でなければならない。更に勞働黨は協力內閣又は保守黨內閣がいかに今後の難局を打開するかを批判しうる立場に在る、而していかなる政黨も今日の難局を無過失に處理しえないから、その過失は當然に反對黨に有利に働く譯である。勞働黨は次の總選擧に於て一九二三年の戰績を必ず回復し、强力なる反對黨として現はれ、更にその次の選擧には一九二九年の戰績を回復すると思ふ。

以上の觀測は勞働黨が之からいかなる進路を採るかと云ふ觀測と多少は關係してゐる。彼等の進路に就ては二樣に考へられる、一は急進的に轉回して、社會主義政黨たる色彩をより鮮明にするだらうといふことであり、他は此の大敗を喫せしめた國民心理を考察して、徐ろに民衆の不安を一掃し信任を回復するに努めるだらうと云ふのである。マクドーナルドが勞働黨を指導して來た方針は後者であつて、主義は黨規に明定するに止め、先づ統治能力ありと云ふ國民の信賴を勞働黨に獲得することに在つた。多くの人は勞働黨が大敗に憤激し未來を絕望して前者を步むだらうと考へるが、私は大敗の後には寧ろ後者の路を步むのが定石で、若し勞働黨が前者の路を採るならば、それは此の大敗の直後ではなくて、强力なる反對黨として自信を回復した後であると思ふ。殊に勞働黨が現在最も必要を感ずるのは、マクドーナルドやスノーデンに

匹敵しうる指導者である。今の領袖では此の要求が滿たされまい、隱れた人材が若い所から擡頭するのを俟つの外ないと思ふが、それには少くとも二期の選擧を通過して、議會に於ける政府黨との應酬を經驗することが必要である。勞働黨が確信を以て急進化するには、有力なる指導的勢力が必要であるが、まだその條件が具はつてゐない。然しマクドーナルドに引率されてゐた勞働黨よりも、目下の勞働黨は新人材の崛起する機會が增したから、長期間を觀測すれば、未來の勞働黨は今までの勞働黨よりも急進化する可能性が增加したと見るべきである。然しいかなる意味に於ても勞働黨が革命主義に轉化するとは考へられない。彼等がいかに急進化するとも議會主義の地盤から離れることはなからう。トロツキーが英國勞働運動が革命主義を採る場合は唯一つしかない、それは勞働黨が絕對多數黨として社會主義法案を通過させた時に、資本家階級が革命を以て法の實施を拒否した場合だと云つてゐるが、之は革命といふべきではない。政府が合法の權力を行使するに過ぎないのである。他のいかなる場合にも英國に革命が起らないと云つたトロツキーは、流石に英國をよく洞察してゐる。

自由黨の將來は協力內閣の將來と密接の關係がある。若し保守黨が穩當に自由黨と提携して協力內閣を持續すれば、サイモンを首領とする自由黨の大多數は保守黨と接近する程度が强まり、保守黨と合體する可能性もないことはない、然し保守黨が協力內閣を崩壞させる仕方如何によつては、自由黨は次の保守黨內閣の反對黨として依然獨自の存在を續けるだらう。ロイド・ジョージ派の自由黨は勞働黨と接近し、勞働黨の將來の進路如何によつては人材拂底の勞働黨がロイド・ジョージを歡迎するかも知れないが、若し勞働黨が正道を步むならば、彼を受容すべきではない、ロイド・ジョージと社會主義とは到底調和しえないからである。

マクドーナルドは今日政黨政派を超越した聲望を國民の上に把持してゐる。十三名の國民勞働黨を以て五百五十名の保守黨を引率してゐることは、確かに一つの驚異である。彼にして若し協力內閣が使命を果した後、政界を隱退するとしても、道德的指導者(モーラル・リーダー)として筆と辯とを以て國民を指導する偉大な社會的勢力として殘るだらう。若し彼が政界に止まるとしたら、保守黨に參加することは絕對にありえないが、勞働黨と合體することはありえないではない、それは今度の進退に關する彼れ自身の批判と說明とにより、又勞働黨の未來の進路如何に係るであらう。然し恐らく之が實現するよりも寧ろ、自由黨と合流した第三黨の組織が可能性に富むと思

はれる。彼れの如き信賴しうる政治家を持ち、その名の下に國民が協力しうることは、一國民の貴重なる財産である。英國は此の點に於て惠まれてゐる。然し彼個人としては今が生涯の絶頂であり、多年の苦節の酬ひを滿喫しつゝあるが、彼れの現在は過去の集積ではあるが、未來を創造する現在ではない、彼れの生涯は之で幕を閉ぢるのである。

## （八）各政黨の批判

以上に於て私は、今度の總選擧を「事實の問題」として扱ひ、「權利の問題」としては扱はなかつた。いかにしてかくの如き事實が起つたか又起るであらうかを叙述したに止まり、起つた事實の當否を批判しなかつた。今私に殘された問題は之をいかに批判するかに在る。

幾度か述べたやうに、選擧は「國家」か「階級」か、「國民的利益」か「階級的利益」かと云ふ形式の對立で爭はれた。然しかゝる對立の形式で問題を提出することが果して妥當だと云へるであらうか。たとへ七月以來の客觀的狀勢の推移は、いかにも問題の決定點を以上のやうな形式に餘儀なくしたであらう。然したとへ英國國家の經濟的危機が到來しようとも、結局政府黨と勞働黨との對立する爭點は、國庫の不足を勞働者階級が負擔すべきか、資本家階級が負擔すべきか、或はいかなる割合に於て兩階級が互に負擔すべきかに在つて、對立は資本家階級の利益か勞働者階級の利益かの點に在つて、國家の利益か勞働者階級の利益かの點に在るのではない。若し對立の一方に國家を置き他方に階級を置くならば、その階級は決して勞働者階級のみを置くべきに非ずして、寧ろ資本家階級を置いても然るべきである。之を國家か勞働者階級かと云ふ形式の對立にしたことは、勞働黨を不當な不利の立場に置き、反對に政府黨を不當に利益したことで、決して公明正大な問題の提出とは考へられない。之は政府の責任であり、マクドーナルドがその責任の一半を負はねばならないと思ふ。

次に暫らく「國家」か「階級」かと云ふ對立の形式で、選擇を餘儀なくされたとして、國家の名に於て勞働者階級の犧牲を要請したマクドーナルドは正當なりしか、「國家」の名にも拘はらず、勞働者階級の犧牲を拒否した勞働黨が正當であつたか。マルクス主義者は簡單に勞働黨を正當とし、マクドーナルドを以て社會主義の裏切者と云ふであらう。蓋しマルキシズムによれば國家は階級國家であり、資本家階級の搾取機關である。國家の名に於て實は資本家階級の

利益が企圖されてゐるのだと解釋する。從つて「國家」の名に於て資本家階級の利益を圖るマクドーナルドは勞働者を裏切るものであり、資本家階級の利益に反對して勞働者階級の利益を主張した勞働黨は正當であることとなる。然し此の議論はマクドーナルド及び勞働黨を以てマルキシズムを信條とするものと前提しての批判であつて、彼等は獨自の社會主義を所有し、マルキシズムの唯物辯證法及び唯物史觀を採らないから、彼等の國家觀はマルクス主義者の國家觀と同一ではない。そこで彼等の進退を批判するには、彼等のイデオロギーを前提として、その前提と矛盾したか一貫したかと云ふことを檢討せねばならない。彼等の採らざるマルキシズムを前提として批判することは、彼等のイデオロギーの批判にはならうが、彼等の進退の批判にはならない。

英國社會主義の國家觀によれば、一面に於て國家は階級國家であると共に、他面に於て國家は超階級的な文化國家であると云ふ。國民は二階級に分裂してゐる場合があると共に、又階級を超越して利害共通な共同社會たる場合があると考へる。從つて「國家」と「國民」との名に於て叫ばれることが、必ずしも資本家階級の利益でなくて、勞働者階級の利益も亦共に包含されることあるを肯定するのである。私も亦彼等と共にマルキシズムの國家觀を採らないで、彼等の國家觀を大體に於て是認するものであるが、彼等はかゝる「國家」「國民」觀を採るから、マクドーナルドが「國家」の名に於て起つたからと云つて、必ずしも資本家階級の利益を代表したことにならないし、之を以て直に彼を勞働者の裏切者とするは速斷である。同時に「國家」に反抗した勞働黨が必ずしも正當だとも云へない、何故なれば「國家」の名に於て勞働者階級の利益が圖られる場合があることを彼等自らが認めてゐるからである。

だが然し、之だけではマクドーナルドが必ずしも過つたとは云へないと云ふに止まつて、まだマクドーナルドが正當であつたと云ふことにはならない。英國社會主義によれば、ある場合に「國家」「國民」は資本家階級的たると共に、他の場合に超階級的だと云ふのであるから、個々の場合に於て「國家」「國民」の名に於て叫ばれることが、果して資本家階級の利益を隱蔽してゐるのか、或は超階級的であるのかを、具體的に檢討して、それに基いて進退を決せねばならないこととなる。こゝに於てマクドーナルドの進退を批判することは、結局彼が一九三一年の八月英國が直面した「國家」の危機がいかなる階級的利益と關係あるかを檢討したか否か

に歸着する。磅の價値の下落、磅貨の國際通貨からの脫落、英國の國際金融中心の喪失、之等はなるほど國家の危機と云へるであらう。然し此の危機を通過することが、單に資本家階級の爲のみに非ずして、全民衆の幸福の爲であるか否かを彼は果して檢討したか。若し檢討したならば彼は全民衆の爲なりとして勞働黨に訴へたか。不幸にして私は材料を持合せないが、或は彼は之を試みたかも知れない、然し彼が玆まで國家の危機の實體を檢討したならば、恐らく彼は「國家」か「階級」かと云ふ形式の對立を置かなかつたらう、寧ろ勞働者階級の爲に失業手當の減額と金融危機の通過と何れが利であるかと云ふ形式の對立を採つたであらう。保守黨は「國家」「國民」の名目を假りて民衆に訴へても宜しい、然し社會主義者は徒に「國家」「國民」の美名に隱れて、民衆を眩惑してはならなかつた。英國社會主義の國家觀よりすれば「國家」「國民」の實體を檢討すべき義務を課せられてゐるのである。之を怠つた所に、マクドーナルドは社會主義の信條を裏切つたと云へないか。

思ふに彼は無意識の裡に國家の危機を通過することが、全民衆の幸福の爲だと判斷したのであらう、而して資本家に課稅增額をすると共に勞働者も亦失業手當を犧牲とすべしと考へた。

然し資本家と勞働者とに犧牲を對等に與へること、既に社會主義者として過失であるが、彼は失業手當が過當の浪費だと考へたのではあるまいか、それならば失業が資本主義自體より來る結果であつて、個人の責任に基づくものでないと考へる社會主義者として奇怪な見解である。若し失業手當が失當であるならば、敢て國家の危機を俟つまでもなく、平時に於ても削減すべかりしであつた。此の場合にも彼は社會主義の信條に忠なりしとは云へまい。若し彼が最近一二年間に社會主義より脫却したと云ふ思想上の變化があつたら、以上の批判は當らないことにはなる。然しその變說が明白に示されない限りに於て、彼は社會主義に叛いたといふ汚名を受けねばならない、大戰開始に際して彼が非戰論を唱へて賣國奴と云はれた時は彼は正しかつた、だが今日彼が愛國者と讃へられる時に、彼は正道を踏み外した。英國は國民的政治家マクドーナルドをえた代りに、勞働黨政治家マクドーナルドを失つた。彼は勞働黨政治家たることにより國民的政治家たるべかりしであつた。だがフランスのミルラン、ブリアン等が曾ては社會主義政治家として出立しながら、やがてそれを踏臺として國民的政治家として轉身したことは非難されたに拘はらず、彼れの進退が具眼者の批判を受けようとも、さまで非難の的とならない

のは、彼れの過去六十年間の生涯の賜物であらう。

マクドーナルドの進退が否定されるならば、反面に勞働黨の進退が肯定されることとなる。國家の危機が全民衆の幸福の危機だと明白に立證されない限り、彼等は失業手當の減額を甘受しなかつた。失業が資本主義の所産だと考へるから、手當を受けることは讓歩を必要とせざる權利であると考へた。「國家」「國民」の名に囚はれずして、一路勞働者階級の利益を主張したことに於て、彼等は正道を直進したことにはなる。然し彼等は果して外觀の示すが如くに、確信を以て社會主義の大道を歩むだのかと云ふに、私は少しく疑なきをえない。マクドーナルドの過失を冒さずに濟みえたほどに、彼等がマクドーナルド以上であつたとは考へられない。彼等は主として勞働者階級出身の人々である、從つて失業手當は彼等にとつては致命的の生活條件である。元來イデオロギーに於てはマクドーナルドよりも右翼たりし彼等が、此の生活條件に觸れた時に頑强に主張を固執したに過ぎない。その結果がいかにも急進的なるかの如き外觀を呈した。彼等にとつて此の戰は資本主義か社會主義かの對立ではなかつた、此の對立であつたなら案外資本主義に加擔したかも知れない、唯彼等は資本主義内のゲリラ戰を闘つたのが、偶然にも社會主義に忠なりしかの如き結果となつた。彼等は正道を踏んだ、だがそれは偶然の僥倖が然らしめたので、確信を以て踏んだのではない、彼等はマクドーナルドを社會主義の裏切者と罵るほどに、社會主義に殉じたといふ名譽を擔ふ資格はない。

保守黨はその信條の命ずる儘に行つた。批判は保守黨の信條が正しいか否かに在つて、その信條と實踐との間には矛盾は認められない。自由黨は勞働黨と共に、「國家」「國民」の名に於て叫ばれるものの實體を具に檢討すべきであつた。之が自由主義の基礎としての個人主義が爲すべき任務であつた。たとへそれを檢討した後に於て、何が全民衆の爲であるかに就て社會主義と自由主義とは別離しようとも、徒に「國家」「國民」の美名に囚はれて、自らを陶醉せしめ民衆の足を浚はしむべきではなかつた。自由黨も亦自由主義の信條に忠なりしと云ふことが出來ない。世に非なるはそのイデオロギーの非なるに非ずして、そのイデオロギーに殉ぜざることに在る、自由黨に於てその一例を見るは遺憾だと云はねばならない。

## （九）總選擧の教訓

此の總選擧は單に英國に就てのみでなく、他のあらゆる國に妥當する普遍的意味がありはしないか、私は之を考へて次の二點を求めえた。その第一は社會主義の前途は遠いと云ふことである。此の選擧は社會主義を採るか否かで爭はれたのではない。然し「國家」か「階級」かと云ふ問題の提出が既に非社會主義的である點に於て、「國家」を採つて「階級」を捨てた點に於て、民衆の最大多數が社會主義に反對であることは明白である。勞働黨の六百萬票も亦必ずしも社會主義者であるとは云へない。若し社會主義か否かを決定させたなら、六百萬票は減少することあるとも決して增加することはありえない。政治的自覺の發達した英國の民衆が、完全な言論の自由の下に、壓倒的に非社會主義を表現してゐるのを見て社會主義の影は漂然として寂しいと思ふ。實にプロレタリアの間に於てさへ社會主義者は少數に過ぎないのである。之は決して英國のプロレタリアが植民地の勞働を搾取する勞働者貴族だからではない。プロレタリア自體が現存社會を變革せんとする欲求に乏しいからである。

總選擧の投票に於てかくも少數派と明示された社會主義者は、議會主義に絶望して革命主義に走るの外なきかの如くであるが、民衆の意志が明白に社會主義と非社會主義との分野を表現してゐる時に、革命は多數の民衆の名に於て行はれえない、何故なれば民衆の多數は社會主義を否定してゐるからである。若し社會主義を否定する民衆は、自らを知らざる愚者だと云ふならば、それはその人の主觀的の判斷で、之を客觀的の判斷とすることは、自己の權限を超越した專制だと云ふことになる。のみならずかくも千數百萬の多數の非社會主義者を敵として、革命を成功させることは不可能であり、可能であるとしても革命政府を維持することは至難である。政治的自由の惠まれない國に於てこそ、どれ丈が社會主義者であるかが明示されてゐないから、革命の合理性と可能性とが考へられようとも、民衆の總意の自由に表現されてゐる國に於て革命を正當化する根據は乏しい。革命を肯定するには、文明國は既に餘り遠く歩み過ぎてゐるのである。社會主義者は資本主義の經濟的進化と併行して、言論により同志を獲得する外實現への路はありえない。それは決して絶望ではないが、然し實現の前途は遼遠である。社會の大多數は常に保守的である、彼等は現狀の變革を好まない、それはブルジョアーとプロレタリアとを問はない。默せる大衆は常に保守的であり、その故に社會主義に反對である、此の厳かなる事實を忘れる社會主義者のみが小異を楯に相爭ふ愚を敢てする。若し大衆が社會主義的

だと考へるなら、それは痴人の夢であり幻影である。その幻影が滅びる時に、世は既に反動の波に流されてゐる。吾々社會主義者は、社會主義が今も尙荒野に於ける孤客の聲だといふことを忘れてはならない。

第二に此の選擧の與へた教訓は、社會主義が「國家」と「國民」と云ふ概念に對して、思想を整理し態度を明確にして置かねばならないと思ふ。マルキシズムに於ては「國家」を階級國家（クラッセンシュタート）とみ、資本家階級の國家とみる、此の見解はサン・シモンに淵源して、「哲學の貧困」「共產黨宣言」「反デューリーング論」等に表はれてゐる。之と正面に對立して國家を國民國家（ナチオナルシュタート）又は文化國家とみる見解があり、國家は超階級的に全民衆の利益を考慮すると云ふ。私は之等二個の見解が、何れも一面の眞理を捉へてゐると共に、全面の眞理を逸してゐると思ふ。國家は一面に於て階級的たると共に、他面に於て超階級的である。自己の一面を以て全面の眞理なりとする所に、此の兩者の誤謬がある。而して文化國家論者が國家階級性を看過するが爲に、それのみを强調する階級國家論を擡頭せしめ、階級國家論者が國家の超階級性を看過することの故に、之を矯める爲に超階級性を力說する文化國家論を擡頭せしめ、之等の對立する國家論は互に他を刺戟しつつ、他によつて自らを刺戟しつゝある。

文化國家論者に於ては、「國家」又は「國民」は批判檢討を許さざる不可侵の聖壇に祭られてゐる。その名に於て服從を求められた時、個人は無批判的に命令に應ずる義務ありとされてゐる。「國家」又は「國民」をかゝる聖壇から下らしめて、批判檢討の俎上に立たしめたのは、個人主義の功績であつた。啓蒙哲學、功利主義、理想主義の樣々の姿を着たにしても、之等に共通する個人主義は「國家」「國民」の名に於て叫ばれる要求を、盲目的に受容せずして、解剖し分析して、合理的と不合理的との要求に判別した。英米の如き國は個人主義の洗禮を受ける一時代を持つた、それでさへ英國の總選擧は今も尙「國家」と「國民」との名目が、いかに大衆を魅了する魔力を有するかを示してゐるではないか。曾ての獨逸や現今の日本の如きは、未だ多分に國家主義的色彩を殘してゐる爲に、社會の實情に於ても「國家」「國民」は多分に超階級的の色彩を保持してゐる。況んや文化國家觀は驚くべきほどに大衆の間に浸潤してゐる。社會主義者が若し「國家」「國民」の持つ超階級的一面を看過して、一括的に階級國家を唱へるならば、

階級國家論も亦一面の眞理を有するに拘はらず、大衆の間に牢乎不拔なる文化國家論は猛然として反擊を社會主義に加へ、致命的の損失を與へないとは云へない。社會主義は階級國家論の限界を辨じて、進むべきに進み止まるべきに止まる思慮を持たねばならない。

他方に於て文化國家觀も亦限界を有する。自ら意識すると否とを問はず、「國家」「國民」の名に於て、いかに多くの階級の利益が圖られてゐることであらう。而もそれが一括的に「國家」「國民」の美名の下に隱蔽されてゐることは、反動的に「國家」に眉を顰ましめ却て國家の神聖性に墓穴を掘ることとなり易い。國家の名に於て合理的の要求が爲されることがある。その場合國家は大衆を牽引する魅力を持つてゐなければならないに拘はらず、幾度か國家の名に幻滅を經驗したならば、一朝國家の危急が叫ばれた時に、人は奮起すべく餘りに鈍感になるだらう。

社會主義は「國家」「國民」の絶對性が、民衆の間に不拔の勢力を占めてゐることと、之等の標語が社會主義の成長に至大の脅威を加へることを、常に打算の中に置かねばならない。而して此の文化國家觀は潛在的に感情生活に根柢を深めてゐるが爲に、容易に理論を以て克服し難い特質がある。然しそれが克服されない限りに於て、國家絶對論は非常の場合に擡頭し、猛然として社會主義に叛逆する。社會主義はいかに之を處理すべきかを配慮して、不斷の啓蒙を怠るべきではない。今や擡頭しつゝあるファッシストの思想は、吾々の身邊に迫りつゝ吾々がいかなる態度を採るべきかの決定を要請しつゝある。社會主義は今や重大な試練の前に立たされてゐる。

昭和六年十二月號「中央公論」

# (五) 英國社會運動の變調

## (一) 緒言

一九〇〇年「勞働代表委員會」の名に於て成立し、後「勞働黨」と名稱を改めた英國勞働者政黨は、その後着々として黨勢を擴張し、一九二三年に「名譽ある陛下の反對黨」となり、翌年絶對多數黨ではないが第一次勞働内閣を組織し、更に一九二九年に第二次内閣を作るに至つた。その黨勢膨脹の迅速なることに於て、正に驚異に値するものがあつた。然るに一昨年七月の恐慌に伴ふ内閣の瓦解、十月の總選擧に於ける大敗によつて、政府黨として二百六十五名の代議士を持つた勞働黨は僅に五十二名となり、政府黨の五百五十四名に比して實に一割に足らない少數黨にまで沒落した。之も亦英國政黨史上稀有の現象だと云はれてゐる。

然し吾々にとつて注目すべき問題は、勞働黨の數量上の減少のみではない。一九三一年の事件は、單に英國勞働黨といふ特殊の政黨に關してのみ重要性を持つのでなく、凡そ社會思想研究の學徒にとつて、注意を喚起すべき普遍的の重要性がある、その一つは同年の總選擧は階級の爲か國家の爲かと云ふ標語に於て爭はれ、「階級の爲」に起つ勞働黨はあの大敗を蒙るに至つたことである。社會主義は國家主義と對立させられる時に、常に打ち越え難き障害に際會する、國家主義をいかに處理すべきかは社會主義政黨が、常時不斷に考慮して置かねばならぬ問題である。私は此の點に就て總選擧直後に卑見の一端を洩らしたことがある（前章の「英國總選擧の批判」）。

だが一九三一年の事件が提示する問題は之だけではない。私は今年二月八年振りに英國に渡り、幾多の社會思想家と會談し、又最近に現はれた文獻を讀んで、英國社會運動に或は公然と或は隱然と動きつゝある傾向を觀取することが出來た。その一つは勞働黨が社會主義政黨たることを、決然として宣明すべく餘儀なくされて來たことである。同黨は一九一八年以來社會主義を綱領とする政黨ではあつた、然し未だ議會に於ける絶對多數黨になつたことはないので、社會主義を實現する能力もなく、從つて社會主義黨か社會改良主義黨かを明白にする必要に迫られずに今日に至つたのである。然るに一昨年の恐慌前後に於ける經濟界の不況は、從來國家の社會施設の費用を負擔して來た資本家階級の利潤を減少せしめ、啻に今日以上の施設を爲す

餘力ないのみならず、從來の施設をさへ削減する必要に迫つた。簡言すれば資本主義を維持してその限界内に於てする社會施設は、今日に於て既に飽和點に到達したのである。一九三一年の事件は明白に此のことを物語つた。こゝに於て勞働黨は資本主義を維持するか、之を根本的に改造するか、若し前者を採れば之れ以上の社會施設を斷念するは勿論、既存の戰線よりも後退することを甘受せねばならない、之を甘受しないならば、資本主義の根本的改造に一路直進せねばならない。別言すれば社會改良主義か、社會主義か何れを採るかの分岐點に立たされた。既に過去に於て此の分岐點に立つたのではある、然し情勢の逼迫は、決然たる去就を促すに至つたのである。

第二に觀取さるべき傾向は、社會主義界に於て議會主義に對する懷疑が擡頭しつゝあることである。社會主義の實現が議會を通して行はれる可能性があるか、議會を離れて暴力革命によりてのみ行はれるかにより、社會主義界は別れて一は社會民主主義となり他は共產主義となる譯であるが、英國勞働黨は今日まで殆ど寸分の疑念を抱かずに、社會民主主義を以て終始して來た。然るに一九三一年の事件は、議會主義に對して一抹の疑惑を投ぜしめ、「革命主義的方法」が各方面より叫ばれるに至つた。固より千九百十年代のサンヂカリズムの勃興や、一九二六年の總同盟罷業は、議會主義に對する反抗ではあつた、然し此の二つは何れも一部の勞働界の現象であるか、或は突嗟の狂熱的現象であつて、その故に日ならずして議會主義に壓倒されて結末を告げたのであつた。然し現今の反議會主義的傾向は、一昨年の恐慌の際にまのあたり體驗した事實に出發し、冷靜に議會主義を理論的に檢討してゐるので、之を從來の事例と同一視することは出來ない。

社會改良主義か社會主義か。議會主義か革命主義か。凡そ此の對立は學徒により年久しく論議された問題であつて、英國勞働界が今漸く此の對立の前に立たされたことをみて、人は「何ぞそれ來ることの遲かりし」との嘆聲を洩らすかも知れない。だが然し英國國民は他國の事例により、學者の理論により容易に動かうとしない國民である。獨自の體驗により自己の納得した場合にのみ動かうとする、同時に一旦動向を決した後には、困苦を排して着實に前進する。曾てエンゲルスにより重厚にして巨人の如くに歩むと禮讃された此の國の勞働運動は、それ丈に吾々の注目に値する。殊にその反議會主義的傾向は、英國が世界に於ける議會主義の祖國で

あり、その社會主義者は曾て議會主義に微少の動搖さへも示さなかつた國の傾向であるだけに、露西亞共產主義者のデモクラシー批判とは別個に摘出する必要がある。而も興味あることは英國の反議會主義が共產主義よりの影響によるのではなく、その革命的方法なるものも共產主義の革命とは異るものを意味して、英國共產黨と對立して英國特有の路を採らんとしてゐることである。

以上二つの傾向と之に伴ふ附隨的傾向とを併せて、私は英國社會運動に一變調が現出したと思ふ。此の變調が一時的のものか永續的のものかの觀測は別として、世界の社會思想界の注目すべき現象として、その經過とその將來性とを述べることが、本文筆者の目的とする所である。

## （二）英國社會主義の特異性

後段に述べる所に對する照應の伏線として、話は先づ英國社會主義の特徵から始まらねばならない。此の社會主義は先づ「フェビアン協會」と「獨立勞働協會」とから起り、次で一九一八年に勞働黨により綱領にまで掲げられるに至つたのであるが、同じ社會主義ではあるが歐洲大陸の社會主義即ちマルキシズムとは全く別個の體系に屬する。人若し英國に渡り思想家又は勞働運動者に就て、君の國の社會主義はどの點でマルキシズムと違ふかと質問するならば、その答は符節を合するが如くに一致してゐる、即ち第一は理想主義の哲學の上に立つこと、第二は立憲的方法又は議會主義により實現を希圖するといふであらう。之等の特異性は卒伍の勞働者に至るまで認識されてゐる。だが今少し仔細に點檢する時にその差は單に此の二點だけではない、私からみれば次の四點に在ると思ふ。

私は凡そ一切の思想の體系に對して、四つの問題を提起する、即ち第一はその思想はいかなる哲學を持つか、第二は現存社會をいかに解剖するか、その經濟學その他の社會科學は何かといふことである、第三は將來の社會をいかに考へるかと云ふ社會思想であり、第四はその社會思想を實現するにいかなる方法を以てするかと云ふことである。此の四點に分けて英國社會主義の特徵を擧げるならば、次の如くにマルキシズムと對立する。

第一にマルキシズムが唯物論の哲學を採るに對して、英國社會主義は理想主義の哲學を採る。此の理想主義は常識的には基督教から來てゐるのであるが、稍體系的のものとしてはグリーン、

ケヤード等の「新カント派」又は「新ヘーゲル派」の理想主義から源する。辯證法は採らないが、ダーウィン、スペンサー、ハックスレー等より來る進化論は採り入れられてゐる。

第二にマルキシズムは勞働價値說と餘剩價値說とを以て資本主義を說明するのであるが、英國ではジェボンスの限界效用說を採り、リカルドーの地代論を展開させて一種の搾取說を建設する。

第三にマルキシズムでは社會主義社會は必然に到來すると說明し、之に階級鬪爭說を加味してはゐるが、一抹の必然論的色彩を拭ひえないが、英國では必然論は微少だも姿を現はさず、社會主義社會は實現せざるべからざる理想として、徹頭徹尾目的論に終始してゐる。

第四にマルキシズムは社會主義實現の方法として、議會主義を採る社會民主主義と、革命主義と無產者獨裁とを主張する共產主義とに分裂するが、英國社會主義は議會主義を採ることに於て終始一貫してゐた(註)。

(註)　此の差異の詳述は拙著「英國勞働黨のイデオロギー」(千倉書房發行)に讓る。

問題は之等の特異性が何故に生じたかといふに在る。凡そ社會主義は私有財產の廢止を主張する點に於ては同一の內容を持つのであるが、各國の社會主義は此の共通性以外に於て夫々獨特の色彩を持つてゐる。而してその特徵は各種の點から說明することは出來るが、最も重要な說明は自由主義との關係を明かにするに在ると思ふ。露西亞は自由主義が皆無なりし國として、その社會主義は革命獨裁主義を特徵付けられ、獨逸は自由主義がある程度まで實現され而も完全に實現されなかつた故に、一方で社會民主主義を生ずると共に他方で共產主義を生ずる。又自由主義なかりし國に於て、社會主義が對立すべく置かれた敵は、封建的イデオロギーである。此のイデオロギーが露西亞に於てギリシア神敎であり、獨逸に於てはヘーゲル哲學であつた爲に、之と對立して起つた社會主義の哲學は唯物論の形態を採つた。かゝる觀點に立つて英國社會主義をみると、なるほど十八世紀末から十九世紀始めにかけて、空想的社會主義とリカルドー派社會主義とはあつたが、何れも大を爲すに至らずして消滅し、眞に社會主義が擡頭したのは千八百八十年代だと云ふことが出來る。その擡頭と封建的イデオロギーとの間には、確然として自由主義の時代が存在し、此の國に於ては自由主義はその使命を殆ど完全に果して、社會主義の爲に進路を開くべく用意して吳れたのである。こゝに於て英國社會主義が擡頭した時は、

自由主義と封建的イデオロギーとの決戰は略々完了し、社會主義の對立したものは封建的イデオロギーではなくて自由主義であつた。自由主義との對立から英國社會主義に二つの特徴が與へられた、その一つは自由主義に對立すべき哲學を持つことであり、その二は自由主義の果した業績をその儘に相續することである。前者から理想主義の哲學と目的論的傾向とが由來し、後者からその經濟學と議會主義とが由來したのである。

だが之が爲には少しく遡つて、自由主義と云ふ思想の體系を吟味する必要がある。自由主義は先づ宗教改革の當時に、宗教上の自由と云ふ主張に於て姿を現はしたのであるが、各種の要求さるべき自由を組織的に整備して、一個の渾然たる體系を爲すに至つたのは十八世紀の後半である。前述した私の觀點からその內容を點檢すると次の如きものとなる。第一にその哲學は始めはロック、ルッソー等の自然法說によつたのであるが、後にジェレミー・ベンサムの哲學により、經驗主義の認識論と快樂主義（ユーティリタリアニズム）の人間觀と功利主義（ユーティリタリアニズム）の倫理觀と社會哲學とを採つた。第二にその經濟學はアダム・スミスからマルサス、リカルドーに至る所謂正統派經濟學說を採り、第三に自由放任の社會を理想の社會となし、第四にその主張を實現する爲に言論の自由と代表議會とを要求した。而して此の全體を打つて一丸とし、茫大なる體系を建設したのが、ジェレミー・ベンサムの偉業であり、之が正に今日資本主義の中に躍動しつゝあるイデオロギーである。

此のイデオロギーの負擔者は自由黨であり、保守黨と對立して一八三二年以來殆ど政權を獨占して、十九世紀後半に及んだ。所が自由放任主義が實現されるに伴ひ、社會上の害惡各方面に現はれ、遂に自由主義に對する自己批判が、自由黨の中から擡頭するに至つた。その批判は自由放任主義を拋棄して、社會改良主義を以て之に代へんとするのであり、それと伴つてベンサムの哲學を根本的に改訂しようとする。その先驅者はジョン・スチュアート・ミルであるが、ミルの爲さんと欲して半途に停止したのを完成したのが、オックスフォードの哲人トーマス・ヒル・グリーンであつた。彼は社會改良主義を主張すると共に、資本主義の弊害の由つて來る所が、遠くベンサムの哲學に在ることを觀破して、之に代へるに理想主義の哲學を以てし、言論の自由と代表議會制度とを此の哲學の上に基礎付け、かくして理想主義の哲學の上に茫大なる思想體系を構成した。こゝに於て自由主義は分裂して、從來の自由主義者は資本主義の現狀

を維持するものとなり、新な自由主義者は資本主義を必要の限りに於て改訂せんとする進歩派となつた。自由黨は久しく此の兩者の取捨に躊躇してゐたが、遂に一八九一年正に獨逸社會民主黨がエルフルト綱領を採用した同年に、ニューカッスル・オン・タインの大會に於て社會改良主義政黨へと轉向したのであり、此の轉向に主として活躍したのは、ジョン・モーレー及びハーバート・アスクイスの兩氏で、共にグリーンの思想的影響を受けた人々である。舊自由主義者は保守黨の中に流入し、英國政界は資本主義の維持政黨と改革政黨とに兩分されたのである。

自由黨の轉向は九十一年であるが、グリーン等の社會改良主義は既に八十年代の初期から各方面に浸潤してゐた。所がグリーンは哲人であつて社會科學者ではなかつた爲に、資本主義を説明する點に於て不充分たるを免れえなかた。そこで資本主義への批判に於て社會改良主義者と歩調を共にしながら、その足らざる社會科學をミル、ジェボンス、マーシャル等より補ひ、遂に社會改良主義を以てしては資本主義の害惡を根絶することが不可能だとし、生産資本の私有廢止を主張する一派を生ずるに至つた、之が英國社會主義である。こゝまで説くならば、英國社會主義の特異性が何れより由來するかは明かである。先づ資本主義のイデオロギーたる自由主義に對立して、社會改良主義の思想體系が成立し、それは哲學に於て理想主義を採り、理想の社會を改革されたる資本主義に置き、その實現を議會主義に求めた。之と出發を同じくしながら、正統派經濟學説を展開して資本主義を説明し、社會改良主義を社會主義にまで發展させたのが、英國社會主義である。要するに此の社會主義の特異性は、自由主義を批判した社會改良主義をある所まで遺産として相續し、更にその足らざるを論理的歸結にまで發展させた所から由來する。

かゝる社會主義が存在してゐた爲に、マルキシズムは英國に於て遂に何等の勢力をうるに至らなかつた。その唯物論の哲學は獨逸に於てはヘーゲル哲學と對照の妙を發揮しようが、英國に於ては資本主義の哲學たるベンサム主義と同巧異曲とみられ、既に前世紀後半に於て清算されたものとされた。その革命獨裁主義は獨逸露西亞に於てこそ必要あれ、英國に於ては自由主義以前の封建的イデオロギーだと看做された。啻にマルクス、エンゲルスの文獻が殆ど注意されないのみならず、大戰後共産黨の支部が設けられても、勞働界に呼びかける力は殆ど微々たるものであり、僅にある議會に於てニューボルト、サックラトバラの各一名宛が列したことが

ある丈で、それすら前後數年間に限られてゐた。要するに世界資本主義の中心たる英國に於て、マルキシズムは荒野に於ける孤客の聲であつた。

## （三）英國勞働黨と社會主義

「フェビアン協會」は一八八四年に、「獨立勞働協會」は一八九三年に成立し、英國社會主義の二大支柱は整備した譯であるが、社會主義の負擔者たる勞働黨が成立するには、尙多くの時日を必要とした。勞働組合は依然として資本主義の埒内に於て、「高き賃銀と短き時間」を以て滿足してゐたので、結局社會改良主義を採つてゐた。勞働者を代表する議員は自由黨の中に於て單に一グループを作るに止まつた。之等の議員を結成して別個の獨立の勞働者政黨を作り、それを社會主義黨たらしめることが、「獨立勞働協會」の目的であつたが、その目的の一半は達せられて一九〇〇年の、「勞働代表委員會」の構成となり、自由黨より獨立した政黨となり、之が後の勞働黨の前身である。然し同時に之を社會主義黨たらしめることは遂に不成功に終り、勞働黨は自由黨、保守黨、愛蘭自治黨と並んだ獨立の政黨とはなつたが、單なる社會改良主義黨として、自由黨とその信條に於て異る所なく、自由黨を援助し鞭韃して社會政策的施設を爲すことに全力を注ぐに止つた。一九〇六年以來のアスクイス内閣が社會政策に於て多大の業績を殘したことは確かであり、之が勞働黨の激勵によることも確かであるが、勞働黨は依然として資本主義の根本を改造せんとする社會主義黨ではなかつた。

所が歐洲大戰の酣なる頃即ち一九一八年二月、勞働黨は遂に社會主義を綱領として採用した。即ち同黨規約第三條第四項に於て、生産手段の共同所有と、而して各産業又は勤務の民主的經營及び管理」云々と規定し、「フエビアン協會」と「獨立勞働協會」の二十年間の努力は漸くにして報いられたのである。戰後に於ける自由黨の内紛沒落と反比例して勞働黨は逐年黨勢を擴張し一九一〇年十二月に議員四十二名なりしものが、一九一八年には五十七名、一九二二年には百四十二名、一九二三年には百九十一名となり、一九二四年には百五十一名となつたが、一九二九年には二百八十七名となつた。かくして廿四年初當に第一次内閣廿九年に第二次内閣を作つたのであるが、第一次の時は保守自由兩黨を合すれば四百十名となり、第二次の場合にも兩黨は三百十九名となり、何れも勞働黨獨自の力を以て議會の絶對多數を制することが出來な

いので、自由黨の援助ある場合にのみ政策を行ふことが出來、從つて主として外交上に平和主義を實現する外はなく、若し一度資本主義の原則に指を染めんか、忽に自由黨は保守黨と結んで內閣倒壞の擧に出たであらう。從つて社會主義黨ではありながら實際は自由黨と同じく社會改良主義黨たるの外なき地位に置かれ、社會主義黨らしき活動を爲したのは、第一次內閣成立の直後藏相スノーデンが「資本主義彈劾」の決議案を提出した時だけで、之は當然に百廿一對三百六十八の數に於て否決されたのであつた。

固より社會政策的施設を行ふことは、社會主義黨の本質に矛盾することにはならない。然し同じく社會施設を行ひながら、社會改良主義黨と社會主義黨とは、異るものがなければならない。前者は社會改良自體を以て起點とし同時に終點とし、之を以て能事了れりとするが、後者は社會改良自體を目的とするのでなくして、之を以てある目的への過程とし、別に終局の目的が存在せねばならない。之のみが社會主義黨たる勞働黨をして社會改良主義黨たる自由黨から區別せしめる所以であらねばならない。勞働黨は社會改良を營みつゝ果して何を終局に考慮してゐたのであるか。首領マクドーナルドは之に對して次の如くに答へてゐた。英國人は勞働者階級の人々でさへ、社會主義よりも資本主義を好むものである、輕卒に資本主義に突擊を試みて危險を冒すよりも寧ろ資本主義の滑に運轉することをより歡迎する。若し勞働黨が選擧民の大多數を自己に牽引せんと欲するならば、出來うる限り穩健なる綱領の上に立ち、徐々として社會施設を行はしめつゝ、社會主義的の機構と政策を現存經濟秩序の中に浸潤せしめ、資本主義維持者の抵抗力の餘りに强大ならざるに至つた時、始めて社會主義の實現を圖るべきである。然らば資本主義より社會主義社會への推移は、漸進的で苦痛なくして完成しうると云ふのである。マクドーナルドの見解に私をして補足的說明を爲さしめるならば、第一に英國人はプロレタリアでさへ社會主義に熱心でない、之に對して社會主義を正面より振翳すことは選擧政策上得策ではない。第二に暫らく社會主義と直接關係なき方面に於て業績を擧げるならば、勞働黨に對する疑念を一掃すると共に、黨の爲に政治を行ふ能力が充分だとの信用を高めることとなる。之により黨勢を擴張すべきである。第三に社會施設により勞働者の生活を向上せしめ將來の戰鬪力を蓄積せしめる。第四に資本家の利潤に喰込んで社會施設を行はしめ、資本家の戰鬪力を減殺せしめる。第五に現存秩序の機構に改革を加へて、將來の社會主義社會への條件を用

意する。第六にかくして彼我戰鬪力の比較に於て勝味の多い時に、最後に社會主義の實現を意圖しようと云ふのであらう。

だが之に對しては勞働黨内にも異論がないではない、殊に「獨立勞働協會」から批判の聲が高かつた。之によれば現狀を以て贏ちえたる黨勢は、結局社會主義黨としての勢力でないから、社會主義か資本主義かの決勝戰に於ては脱落する分子である、寧ろ正面より社會主義黨として得るべき分子を收め失ふべきものを整理するに如くはない。又資本家の利潤に喰込むことは早晩一定の限界點に達するので、資本家は戰鬪力を減殺する迄自己の戰線を後退せしめる筈がない。又未來の社會への條件を用意することは、資本家と雖之を氣付かぬ筈なく、必ず之を拒否するであらうし、又現實に拒否して來た。最後に資本主義より社會主義への推移は、いかなる場合に於ても平和的たり得ないので、苦痛なき漸進的推移を豫期するは餘りに樂觀的である。要するに結局勞働黨はその心事に於て何を期さうとも、事實に於ては社會改良は社會改良に終り、一歩たりとも社會主義に接近する所なく、無限の追求に終るだらうと云ふ。此の批判は確かに勞働黨政府の急所を突いてゐる。殊に首相マクドーナルドを始め最高幹部が臺閣に列して責任ある地位に即くや、英國民の政治家たることを知つて、勞働黨の代表者たることの念より遠さかり、勞働者の卒（ランク・アンド・ファイル）伍との接觸疏通を缺くに至り、遙かに社會主義を期すると云ひつゝ、現在の社會改良に滿腹する弊に陷つてゐたことは疑へない。マクドーナルドが「生活賃銀法」制定の問題に關して、永く首領たりし「獨立勞働協會」を脱退した時に、特にその感を深からしめたのであつた。

それと同時に勞働黨をして社會主義黨として邁進を躊躇せしめる黨内の弱性がある。之が爲には勞働黨の構成分子を點檢する必要が起るであらう。英國勞働者の總數の中で勞働黨に投票するものは、約六割に過ぎないので、殘る三割は保守黨に一割は自由黨に投票すると云はれてゐる。言論に完全なる自由を持ちあれだけ宣傳の可能なる英國に於てすら、勞働者階級自體の勞働黨に對する關心が之に過ぎないのである。更に黨自身をみると、勞働黨は大體二種の分子から成立する。一は勞働組合員であり、他は社會主義團體員である。後者は「フェビアン協會」「獨立勞働協會」「社會民主聯盟」の三つの會員に分れる。「フェビアン協會」は中產の智識階級より成り、最近の會員は千八百六十七名であり、「獨立勞働協會」は智識階級と勞働者階級とか

ら成り、之が黨中の最も急進的分子である。「社會民主聯盟」は元來はマルキシズムの團體であるが今はその色彩薄らぎ、智識階級と勞働者階級とより成るが、その黨内の勢力は前二者に遠く及ばない。之等の社會主義團體員だけは明白に社會主義者であるが、その數に於ては殆ど云ふに足りないのである。結局勞働黨員の大部分を占めるものは勞働組合員である（之が社會主義團體員と資格に於て競合することは可能である）。人之を稱して勞働黨の調査研究の任に當る「頭腦（ウヅ）」は「フェビアン協會」で、熱情を鼓吹する「心臟（ハート）」は「獨立勞働協會」であり、胴體に當るものは勞働組合だと云ふ。

所が勞働組合員は數に於て巨大であるが徒に團體の大なるのみで、實は最も反社會主義的の傾向の顯著なるものである。ヂー・ディー・エッチ・コールによれば、彼等は或は協同組合の中に或は郵便局貯金銀行の中に少額ながら貯蓄を持つて居り、自己の住宅を所有することは固より、安全なる證券に投資さへしてゐる。たとへ失業する場合と雖政府より不滿足ながら失業手當を支給されてゐる。英國勞働者がかゝる生活條件を持ちえたのは、同國が永く國際市場に於て保持した獨占的地位の賜物であり、資本家が過剰の利潤の中から勞働者の賃銀の爲に充分の額を支拂ひえたのと、その利潤の中から莫大なる失業保險の負擔を割愛しえたからである。かくして英國勞働組合員は固より、失業勞働者と雖、現存社會秩序の中に於て既に何ものかを「所有する」ものである。未來の社會が適確に自己に今よりもより良き社會たることが保證されるならば、喜んで社會主義者たるであらう。然し未來社會が不安定のものであり、尠くとも未來社會への過渡期に於て混亂が豫想され、その際持てるものをも失ふの虞ある場合には、社會主義よりも資本主義維持論に傾かんとするのである。之を要するに彼等は「失ふべきものは鐵鎖の外何物もなき階級」ではない。マルクスが「資本論」第一卷第七篇第廿四章に於て述べた「窮乏や壓迫や壞頽や搾取などの量が益々增大して來る」プロレタリアではないのである。かくて英國勞働黨は一九一八年に社會主義政黨たることを規定し、數次の宣言に於てもその具體案さへも發表しながら、その黨員の胸奥を點檢するならば、少數の社會主義團體員を除いては、眞實には社會主義者ではなかつたのである。ロンドン大學の教授にして有力なる黨員たるアール・エッチ・トウネーが「一九一八年に勞働黨は遂に社會主義政黨たるべく宣言した。黨はそれによつて一體となつたと想像したし又してゐる。然しその事は誤つてゐた。黨は一の希望を記

錄に止めた。唯それだけであつた。その希望は未だ曾て實現されたことはなかつた」と云つたのは、眞相を穿つた言である。

之を要するに英國勞働黨は、無產政黨發達途上に於て必然に出會すべき難關の前に立つてゐだのである。即ち若し黨が無視しえらるべき少數黨であるならば、急激なる政綱を揭げて反抗黨たることを以て甘んじうる。又若し破り難き絕對多數黨ならば、何物をも恐るゝ所なく所信に直進しうるだらう。少數黨にも非ず絕對多數黨にも非ずして、今暫らくにして絕對多數黨たりうる希望ある場合には、急進と穩健との間に進退に窮することがありうる、恰も獨逸社會民主黨が千九百十年代に經驗した所と類似する。だが當時勞働黨の前に與へられたのは、社會主義か、社會改良主義かの二者擇一であつた。然し若し社會改良が可能の限界點に到達して、既成の線よりも後退せざるをえないとするならば、二者擇一は社會改良の拋棄か社會主義かと云ふこととなる。此の窮地に陷れる時、勞働黨は社會主義の路を選ぶの外はあるまい。一九二九年以來の世界恐慌は、徐々として勞働黨を此の窮地に驅り立てた、而してそのクライマックスが一九三一年夏の恐慌であつた。

## （四）一九三一年の恐慌

此の恐慌自體に就てこゝには詳細に述べることは必要ではない、又本書の前章は之を語つてゐる。こゝには唯本文の目的に必要な限りに於てのみ之を述べることとする。一九三一年の七月獨逸金融界に恐慌が起るや、獨逸に多額の貸付をしてゐた英國も亦その影響を受けるであらうといふ不安が、外國殊に佛蘭西の金融界に多かつた。こゝに於て外國は英國に對して爲してゐた短期貸付を引出すこととなり、爲に英蘭銀行の金の流出が增加して來た。元來英國は慢性的の貿易入超國であつたが、從來その輸入超過額は海外に投下した資本の利子や船舶の運賃や保險料等によつて補足してゐたのであり、之によつて僅に正貨の流出を阻止しえたに止まつて、正貨を增加せしむるに至らなかつた。之に對して前述の貸付が引出された爲に金の兌換準備額が危險に瀕して來て、或は兌換停止を行ふの止むなきに至ると云ふ狀勢に陷つた。

恰も此の時に之より先に任命されてゐたグレゴリーの失業保險調査委員會とメーの節約委員會との報告が公表され、後者は英國の財政狀態が極めて不良であり、その年度に於て千二百萬

磅の收支不足額を生ずると概算し、その內の九百六十五萬磅を經費の節約により、更にその內の六百六十萬磅を失業保險費の整理に依るべしと云ふのである。而して前者の報告も亦失業者の手當を減額すること、保險料を引上げることの必要を結論したので、兩委員會の報告は英國財政の基礎の不安を公衆に知らしめたと共に、その補塡の方法を勞働者の負擔に於て講ずべしとするに在り、而も勞働黨政府は容易に此の方法を甘んじまいから、當然に政界は混亂を生ずるだらうと云ふ豫測を生み、さらでだに外國資本家の不安を煽つたのみでなく、英國自身の資本家すらも資本を海外に逃避せしむるに至つた。七月中旬から二箇月の間に外資が倫敦から引上げられた額は二億磅に及び、英國の保有する正貨は一億三千萬磅以下に降らんとするに及んだのである。若し兌換停止を行ふならば、磅の價値は下落し、それは國內に於ける物價の騰貴を意味するのみならず、磅貨は永く國際通貨として果してゐた役割より脫落し、英國は國際金融の中心たる地位を失ふと云ふ重大の脅威を受けるに至つた。

かゝる運命への到達を回避するものとして、二つの方法が考へられた。一は外國金融家より資本を借入れることである。而して佛蘭西よりは以前に既に借款が行はれてそれが使用し盡されてゐたので、米國に望を囑するの外はない。第二の方法は元來正貨流出の原因が財政上の收支の不足に存するのだから、その不足を整理することが必要であり、それには勞働者階級の負擔に於て失業手當の減額によるか、又は資本家階級への新なる課稅によるか何れかによらうとするのである。所が米國の金融家より借款する場合にも、財政上の整理をすることが前提條件となることも考へられるので、結局此の難局を切拔ける方法は失業手當の減額か資本家への課稅かと云ふ二者擇一の問題に歸着することとなる。こゝに於て私は一應失業保險費に就て一瞥を投ずる必要が起るであらう。

一九二九年秋の米國恐慌以來英國產業界は益々不振に陷り、同年六月には失業者數百十五萬千百六十七であつたのが、一九三一年七月即ち英國恐慌の直前には、二百七十一萬三千三百五十となつた。之等の失業者に對しては失業保險法によつて失業手當を支給するのであり、それには特別の會計として失業基金なるものが設けられてゐた。然るに失業者の激增するにつれ、失業基金からのみでは支拂が不能となるので、國庫から臨時借入の止むなきに至り、借入額も逐次增加して恐慌の際の七月には一億千五百萬磅の多きに及び、之に對しては失業基金から國

庫に利子を支拂はねばならない。かくして一九三一年の八月に英國政府が失業手當として支出する金額は，總豫算上に於て驚くべき割合を示してゐた，資本家階級よりみて此の巨額の失業手當に何等かの削減を加へることが，財政整理の捷徑だと考へたことは，決して不合理のことではない。

元來失業なるものは資本主義維持論者にとつては，處理に窮する難問である。勞働の意志を有して而も勞働の機會が與へられないものに對しては，怠惰を以て責めることは出來ない。然し失業の增加する時は產業界の不況の時であり，資本家の利潤も減少し租稅收入の減少する時である。國家の支出の必要の增加と反比例して歲入は減少する，のみならずこれ以上の課稅の增徵は最も苦痛を感ずる時である。かゝる巨額の負擔を甘んじて資本主義を維持することが，果して打算的に償ふか否かをさへ問題とせしめるに至るであらう。穩つて勞働者の側よりみれば，賃銀の減額や時間の延長と異り，失業は全生活の根柢に觸れる災害である。その災害の由つて來る所は個人に在るのではなくて，實に資本主義の無政府的生產組織に在る。それならば失業に對する負擔は，資本主義を維持することにより利益する階級に歸せねばならない。眞に失業を絕滅しようと思ふならば資本主義自體を根本的に改造するの外なく，その埒內に於ては如何ともすべからざることである。若し資本主義を維持せんとするならば，その代償として當然に失業手當の負擔を甘んじねばならない。かくして失業手當に關する問題は，窮局に於て資本主義維持か社會主義かの選擇にまで人を驅り立てる決定的の問題である。

首相マクドーナルドと藏相スノーデンとは，勞働黨が失業手當の減額に就ていかなる態度を採るかは，略々察知しえたので，前述した第一の方法，即ち米國金融家よりの借款の方法を望んだ。然るに米國の金融界は借款成立の條件として，英國政府が財政上の整理を爲すこと，その整理は失業手當の減額に依るべきことを提言して來た。此の條件が果して米國から來たか或はその代辯人として倫敦シチーの首腦者から來たかは，明瞭ではない。のみならず政府はかゝる提言のあつたことを否定したのであるが，英國に於てはそれが事實であることを一般に信じてゐる。若しさうなれば外國金融家が英國の財政に就て，殊にその財政整理の方法に就て容喙したことになる。若しその提言を聽かないならば，兌換停止磅貨の價値下落を甘んずるの外ない事情に陷る，之を甘んずるか外國金融界の內政容喙を甘受するかと云ふ二者擇一の場合に立

たされたこととなる。金融界の勢力誠に驚くべきものがあり、こゝに私共の看過すべからざる問題が伏在するのである。

外國よりの借款が無條件に成立しえないのをみて、問題は再び立返つて失業手當減額か資本家課税かの選擇となつた。マクドーナルド、スノーデン、自治領相トーマスを除き、他のすべての勞働黨の閣僚は手當減額を拒否した。こゝに於て勞働黨内閣は瓦解し、マクドーナルドは保守黨自由黨と共に國民内閣を組織し、彼は勞働黨より除名されると同時に、行を共にした同志と「國民勞働黨」を作つたが、黨員僅に十五名であつた。此の急轉直下の政情を叙述しマクドーナルドの進退を論ずることは、一面に於て極めて興味ある事柄である。多年彼を首領として來た勞働黨が痛烈に彼を批判したことは當然であるが、一方で彼を辯護したものに「獨立勞働協會」の前首領クリッフォード・アレンがある、その小冊子「危機に瀕する勞働黨の將來」(註)は、その所説に對する贊否は別として必讀の値がある。だが本文の主目的から云へば傍系に屬するので、こゝには略くこととする。

國民内閣は失業手當の一割減と保險料の引上げと、少額の新内地税と減債基金の減額とによつて、同年度の歳入不足を補塡した。だが正貨の國外流出は止まないので、九月廿一日遂に兌換停止を行ひ、英國は國際金融の中心たる地位を斷念した。それと共に十月七日議會を解散して、廿八日の總選擧が行はれ、その結果は本文の冒頭に述べた如くであつた。

(註) Clifford Allen: Labour's Future at Stake, 1932.

此の選擧戰の過程に於て、吾々の看過しえない二つの事實がある。その第一は國民政府が選擧の標語を「國家か階級か」と云ふ點に置いて、失業手當の減額を承諾しない勞働黨を以て階級利益を主張するものとし、手當の減額によつて財政の整理をなし、以て金本位制を維持せんとする國民政府黨を以て國家利益を主張するものとして、兩者を對照させたことである。此の對立は民衆をして政府黨に靡かしめるに與かつたやうである。誠に社會主義黨にとつて打越え難き難關は、國家の名に於て民衆の感情に訴へる反對黨の戰術である。だが眞正の對立は國家か階級かではなくて、資本家階級か勞働者階級かである。財政の整理をなして金本位制を維持することに就ては、勞働黨も亦終始一貫して支持して來たのである。唯整理の手段を失業手當の減額にとるか或は資本家の課税にとるかに就てのみ意見が分れたのである。若し階級利益と

云ふならば、兩者の何れもが階級利益を主張する。對立を國家か階級かに置くは、尠くとも前勞働黨首領にして社會主義者たるマクドーナルドやスノーデンの爲すべきことではなかつた。

その第二は本文の主題にとつて更により重要である。選擧戰の行はれた最中に資本家階級の政黨は、單に自己の政綱が勞働黨の政綱よりも合理的であることを訴へて選擧民を納得させようとはしないで、若し勞働黨にして勝利を占めるならば、經濟界にいかなる變動が起るやも圖られないと云ふ不安が、外國よりの借款を不可能ならしめ、國内資本家の資本の逃避を惹起し、爲に貨幣價値は益々下落するだらう、かくなると勞働黨は失業手當の一割減を反對したに拘はらず、結果は從前の手當の實質的價値を喪失することとなる。一割減是か手當の實質の數割の暴落が是か、選擧民は宜しく利害得失を考慮せねばならないと稱して、政府黨の爲に投票を集めようとした。選擧民は政府黨か勞働黨かの何れの政綱が正しきかによつて投票を決定することとは出來なくて、政府・勞働何れの政黨の政綱にも關係なき金融家の資本の運用如何によつて生ずる經濟界の混亂を豫想して、何れの政黨に投票すべきかを決定せねばならなくなつた。その結果として勞働黨をして内閣の瓦解を賭してまで爭はしめた失業者自身は、却て勞働黨の候補者に投票しないで、政府黨に投票すると云ふ奇怪な現象さへみられた、蓋し失業者にとつては勞働黨は失業手當の一割減を反對して呉れたが、政府黨の勝利は九割の價値を崩落より救濟すると考へたからである。此の問題に含蓄せられた重要性に就ては、後段に於て再び觸れるであらう。

扨恐慌及びそれに伴つた總選擧の結果は、二樣の觀點から扱ふことが出來る。一は英國勞働界全體に對していかなる波動を惹起したかと云ふ現象的の觀察であり、第二は英國勞働界のイデオロギーにいかなる影響を與へたかと云ふ思想上の觀察である。後者に就ては次の二章が之を扱ふこととして、こゝには唯第一の結果のみを擧げることとする。此の方面に於て次の諸點が注目すべきことであらう。

（一）勞働黨は解散當時の議席二百六十五から五十二に沒落した、此の數量を以てすれば議會に於ける勞働黨は、殆ど無視さるべき存在である。だが勞働黨の損失は單に數量上のみではなく、多年黨を内外に代表した有力なる指導者マクドーナルド、スノーデン、トーマス等を失ひ、之に匹敵すべき首領を見出しえない。のみならず首領が閣僚の大多數と意見

を異にし反對黨を率ゐて後繼內閣の首相となつたことは、勞働黨の領袖相互の間に又領袖と卒伍との間に意志の疏通を缺く連絡上の不備があつたに違ひない。又恐慌に直面して勞働黨の閣僚に充分の成案がなかつたことは否定し難い事實であつて、勞働黨は依然として實行する黨員でなく喋る黨員より成ると思はしめた、反對黨たるには適するが政府黨としては建設的能力に乏しいと評價された。要するに勞働黨は多年伏在せる弱性を曝露して、心機一轉更生せざるべからざる危機に立つたのである。

(二) マクドーナルド等の國民勞働黨は廿名の候補者を立てゝ十三名の議員をえた。彼が勞働黨內閣の首相として失業手當の減額を認めたことと、國民內閣の首相となつたこととは、クリッフォード・アレンの云ふ樣にそれが與へられた政情の下に於ては、勞働者階級にとり最も有利な方法であつたと解釋出來ないことはない。然しあの狀勢の下にマクドーナルドの行動を是認することと、彼がその行動を採つた時の思想を是認することとは別問題である。社會主義に終始して而も資本家兩政黨が連合すれば絕對多數となる狀勢となる時に於て、涙を流してあの行動を採つたならば是認しうる。然し彼は國家非常の時に際しては、すべてを拋つて危機を克服し、事情の常正に復するを俟つて、社會主義運動に歸るべしと考へたやうである。これ彼が選擧に於て國家か階級かの對立を置いた所以であらう。だが凡そ社會主義を實現しようとする場合には、必ず何等かの經濟上の混亂のなからう筈はない、それを國家非常の時と稱して、「城內平和(ブルグ・フリーデン)」を唱へるならば、何の時に於て社會主義が實現されようか。私の彼に遺憾とするは此の一條である。私は曾て彼は早晩勞働黨に復歸するのではないかと想像したが、勞働黨と彼との間には旣に容易に越ゆべからざる間隙を生じたので、彼は勞働右翼として自由黨左翼と近い地位を占めるの外はあるまい。

(三) 最も注目すべきことは「獨立勞働協會」が昨年勞働黨より脫退したことである。「獨立勞働協會」は勞働黨成立に最も功績ある社會主義團體であり、黨內に於ける急進分子を糾合してゐた。從來勞働黨幹部の決定した議案に對しても、「獨立勞働協會」系の議員は院內に於て反對投票を爲すことを慣習上認められて來た。然るに總選擧後の勞働黨が黨內統制を嚴格にする爲か、黨員の反對投票を許さないと云ふ規定を設けた。「獨立勞働協會」は急進黨として微溫的なる勞働黨を鞭撻する爲に、此の自由投票の條件あればこそ黨內に止ま

つたが、自由の剝奪された今日に於ては黨内に留まる理由なしとして脱退し從つて協會員の議員六名は別れたので、勞働黨は四十六名に減少した。「獨立勞働協會」の脱退は形式上は勞働黨の規則改正に原因するのであるが、その實質は勞働黨の社會主義に不滿を感ずることにあり、「獨立勞働協會」が最近に於て著しく急進的となつたことに由來する。此のことに就ては別に次の章に於て詳述するであらう。

（四）共產黨は廿六名の候補者を立て七萬四千八百廿四票をえたが、一名の當選者なきのみならず、廿一名は所定の投票數にも達しないので供託金を沒收された。此の黨の英國に於ける勢力は依然として微々たるものであるが、前項記載の「獨立勞働協會」が勞働黨より脱退して、綱領を新たにすると共に、之にも不滿なるものが多少共產黨に參じたやうである。結局に於て此の黨は政局に於て無視しうべきものではあるが、社會主義界の混亂により多少の增勢を示したことを記せば足る。

要するに今や英國の勞働界は、以上四種の戰線に分裂して來た。だが此の現象上の變化よりもより重要なのは英國社會運動界に於ける思想上の變化である。之を二つに分けて私は次々に語らねばならない。

## （五）社會主義の確立

英國勞働黨は綱領として社會主義を標榜してゐたとは云ひながら、その實は巨大なる胴體に當る勞働組合員は、少數の急進的な勞働者又は智識階級に曳かれたのであつて、眞劍に社會改良主義か社會主義かの決定を完了してはゐないのであつた。然るに勞働黨內閣の瓦解、之に次ぐ總選擧に大敗してから後、徐々として此の問題を解決すべき必要に迫られ、遂に社會改良主義に斷然たる袂別を告げるに至つた。之が最近の英國勞働運動に於ける顯著なる傾向の一つである。此の傾向は先づ「獨立勞働協會」が從來保持し來れる社會主義を一層明確にしたことに現はれ、次で勞働黨にも亦それが觀取されるに及んだ。

然し勞働黨に社會主義が確立されたといふ人が、若しあの恐慌の際に勞働黨が失業手當の減額を拒否したことや、總選擧の綱領に於て金融機關の公有や重要產業の公有を主張したことに根據を置くならば、その判斷は誤てりと云はねばならない。何故なれば勞働黨の政綱に重要產

業の公有が掲げられたのは、一九一八年以來のことであり、金融機關の公有が掲げられたのも一九二八年以來のことである。而も尙同黨が社會主義黨たることは明確ではなかつたからである。更にあの恐慌の際に採つた態度は、一應急進的なるかの如き外觀を呈するが、私は事實は必ずしもさうではなかつたと思ふ。失業手當の多少は勞働者階級にとつては現實に響く重大の問題である。從つて勞働組合から選ばれた代議士であり關係たるものは、自己の選擧區の關係から云つて是非とも減額を拒否せざるをえない立場に在る。のみならず失業者及びその家族の數百萬の投票を失ふことは黨略上容易ならざる問題である。かゝる利害關係が偶然にも勞働黨の多數をして減額を拒否せしめたので、このことは彼等が社會改良主義者たると社會主義者たるとに毫も關係がないのである。此の問題のみから云へば、減額を拒絶した勞働黨よりも贊成したマクドーナルドやスノーデンの方が反動的だとは云へない。要するに失業手當減額に對する態度は唯偶然の現象に止まるので、之を以て恐慌當時既に勞働黨が社會主義的になつたと云ふ根據にはならないのである。私は黨の綱領や黨の行動等の如き公に表はれた點よりも寧ろ、勞働黨の領袖や卒伍の間に隱然として湧きつゝある思想に、私の斷言の根據を置かうと思ふ。

勞働黨の黨員は今彼等が置かれてゐる地位を漸く感得したのである。即ち社會改良施設は實行し得べき限界點に到達して、之より後は社會改良を拋棄するは勿論從來の戰線よりも後退するか、若し之を甘受しえないならば社會主義に直進するの外ない袋地に追ひ立てられたのである。而して彼等に此の事を悟得せしめたのは、あの失業手當減額の爭論を回顧することによつてであつた。失業手當を減少することにより浮び出る金額は六百六十萬磅である。此の金額自體は決して少額ではないが、英國政府が失業者の爲に負擔した年額一億二千萬磅に比すれば決して巨額ではない。それにも拘はらず保守自由兩黨は六百六十萬磅を課稅によることを承知せず、勞働者の負擔に於て浮かせようとしたのは何故であらうか、何故に之丈の金額に就て、勞働黨內閣の瓦解さへも惹起せねばならなかつたのであらうか。それは資本家階級の負擔しうる能力が既に飽和狀態に到達したからである。それが爲には少しく社會改良費に就て說明せねばならない。

今全社會を資本家階級と勞働者階級とに兩分するとして、資本家階級の手に入る總收入は、一は工場機械器具等の原價償却費と原料品の費用とに宛てられ、二は勞働者の爲に賃銀として

支拂はれる、之は彼等の生活資料の爲に消費されるのであるが、英國勞働者に於ては少額ながら貯金又は證券等に宛てられるから、此の一小部分は投資の爲に使用されるものとみて差支ない。以上二つの費用を控除した殘額が純收入であり所謂利潤である。利潤は資本家階級の間に分配され、地代、利子、商業利潤、企業利潤の形態を採るが、暫らく全資本家階級の總利潤の使用方法を考へるに、第一は生活資料に宛てられ、第二は普通の生活程度以上の奢侈逸樂に宛てられ、第三に資本の再投下の爲に使用され、第四が租稅その他の公課に宛てられる。所謂社會改良施設即ち工場法、最低賃銀法、住宅、社會保健、教育、職業紹介、疾病老廢災害失業の保險等は何れも巨額の經費を要し、その爲には勞働者が保險料を負擔し又は若干の消費稅を支拂ふが如きことがないではないが、大部分は資本家階級の負擔に屬し、之が前掲第四の項目公課の部分から支拂はれるのである。

「フェビアン協會」の調査によれば、一九二三年の總計を基礎とすれば、一年間の英國の所得は總額三十四億磅であり、その內譯は次の如くである（Facts for Socialists, 1926）。

| | |
|---|---|
| 地　代 | 三八〇、〇〇〇、〇〇〇磅 |
| 利　子 | 八四〇、〇〇〇、〇〇〇 |
| 利潤及び俸給 | 八二〇、〇〇〇、〇〇〇 |
| 賃　銀 | 一、三六〇、〇〇〇、〇〇〇 |
| 總　計 | 三、四〇〇、〇〇〇、〇〇〇 |

こゝに俸給とは特殊の技能を有することから生ずる報酬を意味するもので、賃銀は普通の筋肉勞働者の所得である。從つて俸給受領者の中に勞働者階級の一部を含むことになるので、利潤及び俸給の八億二千萬磅からその部分を控除した殘額のみが利潤に相當し、地代利子と併せて資本家階級の總利潤を構成し、社會施設費は主として之から支出されるのである。

今若し社會改良施設の經費が增加するならば、資本家階級の總利潤中の公課の部分を突破して、その餘波は第二の奢侈逸樂の部分か第三の投資の部分に喰込むこととなるだらう。その喰込み方が餘りに多ければ、逸樂の爲にも投資の爲にも殘らないで、殘るは唯彼等が不勞にして生活しうる第一の部分のみとなる。之丈でも資本家階級は勞働者階級よりも有利な地位に在る譯であるが、若し眞に之丈ならば生產手段の私有制度を拋棄して、極めて少額の利子拂を受けると異る所なきに至るであらう。資本主義を維持せんとする必死の努力は、かゝる地位に陷る

を欲しないからで、苟くも資本家階級として資本主義の中にその地位を維持せんとする以上は、第二の奢侈逸樂と第三の投資の部分を拋棄することを甘んずる筈がない。こゝに於て社會改良は資本家のそれ以上を甘受しえない線に於て停止するの外はない。之れ即ち吾々が社會改良主義は早晩限界點に到達して、再びそこで社會主義に往くか現狀維持に終るかと云ふ分岐點に立たされ、社會問題の窮局的の解決でありえないと稱する所以である。

一九二九年秋の米國恐慌以來、打ち續く英國産業界の不況により、資本家階級の利潤は減少した、それとは反比例して失業者の數は激增した。そこで資本家階級はこれ以上社會改善の爲に公課を負擔することに耐へえない限界點に來たのである。その故にこそ六百六十萬磅の經費の捻出にあれほどの必死の反對を敢てしたのである。三一年以後の狀勢は益々國庫の負擔を多くした、即ち各國軍備の競爭がそれである。又産業界の不振は累增した、英國が過去永く占めて來た獨占的地位は失はれ、各國は夫々英國の競爭國として現はれたのみならず、關稅の障壁を高くして英國の商品を輸入しない。印度支那は昔日の如くに英國の驅使に甘んじない。之に加へて米國に支拂ふべき戰債がある。英國の資本家階級は從來の賃銀を低下し、從來の社會施設を削減する外には、利潤の減少を償ひえない。之以上利潤の減少を甘受するならば、資本主義を維持するの所詮がない事となつた。こゝに於て資本家階級にとつては、資本主義を維持するか拋棄するかの決定點に到達し、勞働者階級は、現在の社會改良線より後退するか社會主義に直進するかの分岐點に來た。既に二者擇一は改良主義か社會主義ではなくなつたのである。勞働黨は當然に社會主義に向ふの外なき地位に立たされたのである。「獨立勞働協會」は勞働黨より脫退した後、その綱領を改正して社會主義を明確にし、「資本主義政黨との一切の協調政策を排擊し、改良主義の政策を拋棄する」と云ひ、勞働黨も亦單に黨規の上に於てのみならず、その信念に於て社會主義黨となりつゝある。

之と附隨して注目すべきは、マルクス、レーニンへの興味が擡頭して來たことである。學究的研究に於ては露西亞、獨逸、日本には未だ遠く及ばないが、彼等の英譯書とマルキシズムに關する小冊子は盛に市場に現出しつゝある。英國社會主義の特徵がリカルドーの地代說の展開にあることは冒頭に述べたが、その缺點は資本主義の最近狀勢に關する科學的檢討を忽緒に附したことである。此の缺陷をマルキシズムにより補足しようとするのであらう。勞働黨の思想家に

して倫敦大學の教授ハロルド・ラスキーは云ふ「一世紀以前ベンサムをして英國法律の改造の根據を指示せしめたる時の、あの餘す所なく假借する所なき精細なる吟味性のあるものを、今吾々は必要とする。又それにも劣らず、吾々の機會の到達することに對してレーニンの有した不動の信念と、機會の至るや之に對應すべく爲した彼れの不休の準備とを、吾々は必要とする。英國社會主義は、青年の無頓着の夢に耽りえた階段を既に經過した。成人の智識的責任を負ふべき時は到來したのである」(註) と。マルキシズムの研究の擡頭と共に、實在論の哲學者によりマルキシズムが批判されつゝあることも亦看過してはならない。グリーン、ケヤード等の理想主義哲學がオックスフォードより生れたのと反對に、實在論の哲學はケムブリッヂから生れた。而してケムブリッヂはニュートン以來自然科學の研究を以て誇りとする、此土地に生れた實在論者からみて、マルキシズムの哲學は一世紀時代に遲れたものであり、レーニンの哲學の背後に在る自然科學は、時代錯誤であると批判されてゐる。かくて理想主義と實在論とマルキシズムとは卍字巴の如くに混線してゐるが、批判の對象となつたこと、既にマルキシズム擡頭の一證左と云ふべきであらう。

(註) H. J. Laski: The Crisis and the Constitution: 1931 and After. 1932, p. 58.

## (六) 反議會主義と共產黨

最近英國に於て議會に關して二樣の批判が公にされつゝある。その一は議會制度自體の改革であり、その二は議會主義に對する懷疑又は失望である。前者は複雜多岐なる現代の問題は、專門家ならざる議員が多數集合して討論によつて決定することに適當しないので、議會はその大綱を論議するに止め、細目の規定は別個の機關に依らしむべしと云ひ、英國議會の實狀も亦漸次此の傾向に向ひつゝあると云ふのである。此の意見は議會改造論としては興味あるものであるが、本文の目的には直接關係がないから省くこととする。第二の議會主義に對する再批判は、勞働黨が社會主義を確立すると同時に、勞働界に擡頭して來た現象であつて、こゝに特筆すべき値がある。

議會主義とは議會を通してのみ一切の社會制度の改革を行はんとする思想であり、總選擧に於て大多數の民衆を說破し納得せしめて社會主義政黨に投票せしめ、之により議會內の絕對多

數黨を作り、社會主義法案を通過せしめて、資本主義の改造を行ふと云ふのである。之に對立するのが、暴力革命主義であり、少數者の暴力により政權を奪取し、社會主義を實現しようとする。英國では議會が政治的勢力の唯一の中心であり、一九一〇年以來上院は下院を通過した法案を二回引續き否決しえないことになつてゐるから、若し下院に於て絶對多數を獲得するならば、何事も成らざるなき勢力を持つであらう。議會主義は永く英國の傳統として神聖視され、政黨の如何を問はず之に拘束されて來た。廿世紀に入つて以來議會主義に反した事例が二つある、一は大戰前自由黨政府が勞働黨と愛蘭自治黨と協力して、愛蘭自治法案を可決した時で、保守黨はたとへ議會に於て敗北しようとも、英國陸軍は政府を助けて自治實現を助けてはならないと云ふ檄を飛ばしたことがある。その結果は議會の絶對多數に服しない勢力を認めることになるので、正に内亂に至るまでの危險に瀕したが、大戰の爲に協議を中止し、戰後多少の留保を附して愛蘭自治は認められた。次は一九二六年の總同盟罷業であるが、之も議會内の勞働黨の活動に絶望して、議會外の勢力により目的を達しようとしたことで、明かに反議會主義の表象ではあるが、輿論の議會主義に壓倒されて、敗北の止むなきに至つた。かくて今日迄多少の異例はあるにしても、それが成功しなかつたのは却て英國民の牢乎不拔の議會主義を裏書するものと考へられ、マルクスの所謂平和的主義により政權を掌握し社會主義を實現しうる例外國の一として、英國社會主義は共産主義と對立して社會主義を分つ二大陣營を形成してゐた。

だがあの恐慌と總選擧とを回顧する時に議會主義は動搖せざるをえなくなつた。勞働黨政府が米國より借款をしようとした時に、米國の金融家は失業手當の減額をするならばと云ふ條件を附したと云はれてゐる。若しさうならば英國の政策を決定するものは、英國議會の絶對多數黨ではなくて、外國の金融家であると云はねばならない。然し此の場合は外國よりの借款であるから、まだ默止することが出來るが、總選擧の最中に保守黨自由黨は、若し勞働黨が多數を占めるならば、經濟界の不安を惹起し、外國資本は倫敦より引上げられ、國内の資本も海外に逃避し、その結果貨幣價値は下落し、勞働者階級は更に困難になるだらうと宣傳し、勞働者階級さへもの投票を左右した。若しかゝる宣傳が今後も繰返されるならば、選擧民は保守黨と勞働黨との政綱自體の合理性を判斷して投票を決定するのでなく、たとへ勞働黨の政綱がより合理的ならうとも、差當り現實に起るべき自己の生活惡化を考慮して、保守黨に投票するの

止むなきに至るだらう。その結果は英國の總選擧で勝利をうべきものは保守黨に限られるか、又は社會主義の綱領を全然削除した場合の勞働黨かと云ふこととなり、現在の勞働黨を以てしては永久に絶對多數黨たる見込がないこととなる。これ議會以外の金融界の勢力により、英國の政策が決定されることを意味する。

かくして勞働黨と資本家との關係を點檢すると、次の三つの場合が考へられる。第一は金融界の態度により、勞働黨は永久に政權を掌握しえない。第二に若し勞働黨が絶對多數黨となるべき形勢が見えた時は、選擧最中に金融界は經濟界の混亂を惹起し、勞働黨が政權を執つた時は、在野當時とは似もつかぬ經濟界を引繼ぎ、政策實行に多大の障害を見出すだらう。第三に勞働黨政府が下院の絶對多數を以て社會主義法案を通過せしめ上院が否決する形勢ならば、貴族の多數を任命して上院を多數を以て通過せしめるか、或は更に議會を解散して總選擧に再び絶對多數を獲得し、前同樣の社會主義法案を通過させた時は、上院は二回は之を否決しえないから、上下兩院を經た法律となるだらう。然し此の場合にも資本家は生産手段の私有を拋棄することを、强力を以て鬪爭するだらう。此の何れの場合にも英國の政策を左右するものは、下院の絶對多數黨ではなくて、議會と獨立せる資本家の勢力だとするならば、議會主義は動搖せざるをえない。何故なれば議會主義は政策を左右するものが議會なることを前提として、議會外の直接行動を排斥するのだからである。

議會主義の批判は各方面から試みられたが、その代表者はラスキー教授である。議會主義は社會秩序の根柢に對して結局同一の立場に在るものの間にのみ可能である。十九世紀に保守黨と自由黨とが併立したが、何れも資本主義の基礎に對しては、之を維持するといふ共通の根據に立つてゐた。その後勞働者を代表する政黨が出現した場合にも、それが社會改良主義を採る限りに於ては、資本主義自體には指を染めずして濟んだ。而して英國の國際上の特殊の地位は、巨大なる社會改良を可能にしたから、社會改良主義黨を滿足せしめることが出來た。然し今や狀勢が變化してこれ以上の社會改良を不可能にしたから、政黨は資本主義の現狀維持黨と社會主義黨との二つに大別されねばならない。さうなれば社會秩序の根柢に對して全く見解を異にする政黨が併立することになるので、議會主義の要件たる言論による說得、他人の說に對する寬容、多數者の決定に對する服從等は、自然に跡を絶つに至り、たとへ絶對多數黨の決定した政

策であらうとも、暴力を以て實施を阻止することが豫想される。階級利害を抛棄する場合に、平和的方法にのみ依ることは考へ得べからざることである。從つて勞働黨も亦絶對多數黨として政權に近づくことのみを目標とするならば、社會主義は永久に實現されまい。議會主義なるものは、ヴィクトリア朝時代の特殊事情が許容した歴史的遺物に過ぎないと云ふのである(註一)。だが之丈ではまだ議會主義に對する懐疑と云ふに止まつて、之に代はるべき對案を提示してはゐない。前述した勞働黨と資本家との關係の三個の場合に對して、いかなる對策が擧げられてゐるのだらうか。第一の場合即ち勞働黨が絶對多數黨たるを阻止する宣傳に對しては、社會主義のより合理的なることを宣傳することと、勞働者の不安を除去する方法例へば彼等の少額の投資を保護する爲に、投資の管理を行ふ機關を設置すること等が考へられてゐる(註二)。之によつて勞働者階級のみを牽引しても、裕に絶對多數黨たりうると思ふのであらう。第二の場合即ち勞働黨が政權に近づく可能性の見えた時に、經濟界が混亂することは、如何とも爲し難いと思ふのであらう、何故ならばその時はまだ保守黨が政權を掌握してゐる時だからである。第三の場合即ち勞働黨が政局に立つた場合に就ては色々の對策が提出されてゐる、例へば未來の首領と目されてゐるサー・スタッフォード・クリップスの意見の如きがそれである。彼は內閣成立直後に緊急命令を公布し、經濟界の變動を抑止すべきあらゆる手段を使用する權限を、適當なる機關に附與し、同時に社會主義法案を下院に通過させ、上院に對しては貴族の多數急造により目的を達すべしと云ふのである(註三)。

(註一) H. J. Laski: Democracy in Crisis, 1933.
(註二) G. D. H. Cole: Some Essentials of Socialist Propaganda, 1932.
(註三) Sir Stafford Cripps: Where stands Socialism to-day, 1933. pp. 39-41.

だが之丈ではまだ若し資本家階級が緊急命令による權限の行使に服しないで、武力を以て抵抗した場合に對して答解を與へてゐない。此の問題に對して稍對案を提出してゐるのは「獨立勞働協會」である。同協會によれば勞働者階級は先づ議會に絶對多數を獲得して、政權を掌握せねばならない、それにより行政機關を左右すると共に、軍事的及び市民的勢力を左右することが出來る、之が來るべき闘爭に於て非常に役立つであらう。然しその際に資本家階級は議會主義を無視して、獨裁政治を布かうと試みるだらう、その時は勞働者階級は「大衆行動」「產業

的行動」に訴へて、支配階級と資本主義自體と鬪爭しなければならないと云ふのである(註四)。こゝに大衆行動とは恐らく總同盟罷業を意味するであらう。

それでは「獨立勞働協會」の政策と「共產黨」のそれとは、どの點に於て異るのか。之に就て興味あるのは、昨年四月十八日倫敦メモリアル・ホールに行はれた討論である。一方は「獨立勞働協會」の現議長フェンナー・ブロックウェーが立ち、他方は英國共產黨を代表してハリー・ポリットが立ち、英國勞働界にセンセーションを惹起したやうである。此の討論の筆記(註五)を通してみれば、共產黨は社會主義の實現は露西亞に於けるが如く、唯武力の革命によつてのみ可能であると云ふに對し、「獨立勞働協會」は社會主義の實現方法は、各國夫々の異る事情によつて同一なるをえないと云ひ、然らば英國の持つ特殊の事情は何かと云ふに、英國は大陸諸國と異り國民皆兵主義を採らないで志願兵主義を採つてゐる。從つて勞働者の大多數は軍事に就て何等の訓練を經てゐないし武器も亦所有してゐない、かゝる勞働者階級を以て專門的の軍事的訓練を有し武裝せる軍隊に對し、到底勝利を占める可能性はない、之が英國に於て武力に訴へる行動の成功せさる所以である。然るに若し勞働黨が政權を執るならば、海陸空軍を支配することが出來るから、軍人を牽制するに足る、若しその場合に軍隊の幹部が政府に反抗するとも、兵卒の多くは勞働者階級の出身者が多いから幹部の命に直に服從しない。次に露西亞と異るは生產力が豐富であり生產機關が完備してゐるから、露西亞の如くに社會主義實現後に於て、國家資本主義を行ふ必要なく、又優秀なる技術者を勞働黨の中に既に包含してゐるから、露西亞の如くに國外の技術に依賴する必要がない、之等が英國が露西亞よりも社會主義實現に對して有利な諸點であり、他の資本主義國に依賴する要もなければ、反革命の危險もないと云ふのである。之に對して共產黨側では端的に反駁することなく、顧みて他をいふの傾向が見受けられる。

之を要するに英國勞働界は永く信條として來た議會主義に懷疑を挿むに至り、議會外の直接行動を採ることの必要を認むるに傾いて來た。然し共產黨と異る路を踏まうとすることに於て依然英國特異の傾向が觀取されるのである。

(註四) A. F. Brockway: Socialism at the Cross-Roads, 1932.
(註五) Which Way for the Workers? Harry Pollitt versus Fenner Brockway, 1932.

## （七）總括的批判

扨私は總括的批判に移らう。英國政界は一九三一年以後混沌そのものであり、曾て二大政黨の對立を以て骨子として來た英國が、佛蘭西又は獨逸と類似する政情に在るが、之は果して永續的のものであらうか。今現在の政黨をみると次の如くである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 保守黨 | 四七一名 | 獨立勞働黨 | 六名 |
| 國民自由黨 | 三五 | ロイド・ジョージ派自由黨 | 四 |
| 獨立自由黨 | 三三 | 其の他 | 七 |
| 國民勞働黨 | 一三 | 合計 | 六一五名 |
| 勞働黨 | 四六 | | |

近い將來を展望するならば、サイモン一派の國民自由黨は保守黨に合流し、今年初め國民政府から脱退したサミュール一派の獨立自由黨とマクドーナルドの國民勞働黨とロイド・ジョージ派の自由黨との三黨は、たとへ新黨を作る迄に結成しないとしても、近似した政黨として一グループを形成し、過去の自由黨の如くに少數黨ながら個々人としては優秀な能力者を包含して存在を繼續するだらう。そして勞働黨が社會主義黨たることを確立するに伴つて、獨立勞働黨は勞働黨に復歸することにならう。かくして結局議會は三つのグループに分れることに於て、大戰後の政情に類似するが、稍遠き將來を展望するならば、資本主義黨と社會主義黨との二大政黨に整理されよう。勞働黨が社會主義黨たることを明白にし、而も少數黨で止まる間は、保守でも急進でもない中間黨たる自由黨は、それ丈存在の理由を持つであらうが、勞働黨が多數黨になり資本主義自體に對して、決定的の挑戰を企てるや、自由黨は解消して保守黨に合流するに至る、要するに一切は勞働黨の進退に係る譯である。

私は曾て總選擧直後に勞働黨の未來を豫想して、大敗後の同黨が急進的になるよりも寧ろ、一時穩健の態度を保持して、今少しく黨勢を回復した後に急進的にならうと云ふ意見を述べたのであるが、英國に於てえた印象では急進的に直進する傾向の强いことを認めたのだが、それは議會に於ける現在の地位の劣勢なことより來る一時的の狀勢か、或は永續性を持つ未來の傾向の起點と目すべきかは、今少し時間的餘裕を與へられなければ、何れなりと俄かに判斷し難い。假りに永續的のものとして勞働黨が社會主義黨たることを明白に標榜したとすれば、その將來は何であらうか。之は一は資本家階級の利潤が停止點に來たか、他は勞働者階級の生活條件が